

## はじめに

ユースワークは若者の成長にとって何らかの役割を果たしている。そして、京都市ユースサービス協会もそのように信じて若者と関わっている。しかしながら、その有用性について、個々のワーカーや若者の語りの中で表されることはあっても、改めて価値づける作業は十分にされてこなかった。その結果、若者の成長を支援することやユースサービス・ユースワークについて、理解と共感を十分に上げることが出来てこなかったと言えよう。協会では、内部でのこうした状況への共通認識を確認し、幸いにして2015年度から16年度に掛けて、ある程度まとまった資金を調査に確保することが了承されたこともあり、今回の調査に取り組むこととなった。

その際に、内部スタッフによる調査だけでは、十分な掘り下げが出来ないことも想定されたので、何人かの若者支援やユースワークについて学識・理解のある研究者、実践者の協力を得て、内部のワーカー、協会事務局メンバーを加えた調査チームを立ち上げこの調査に取りかかることとなった。

具体的には、過去、もしくは現在のユースワークのサービスに関わった者に対し、利用の様子やユースワークによる自身の変化や影響についてインタビューを行い、それを通して、日常に埋め込まれ、明確に意識化・言語化されていないユースワークの価値や意義をあぶりだしていく方法を採用した。

本報告書は、この2年間に亘る調査の内容、分析結果を取りまとめたものであるが、構成としては以下のとおりである。まず、調査分析の前提として、フィールドである（公財）京都市ユースサービス協会の概要を1章に示した。また、2章では、2015年度におこなった予備調査と共に、調査方法について記している。続く3章以降が本調査を経ての考察となる。

まず、3章ではインタビュー対象となった若者たちが、どのように協会が実施する青少年活動センターを利用しているのか、概括した。ロビー利用、施設利用、事業参加、ボランティア参加の四形態をベースに、そうした利用形態に留まらない利用・参加の実態にも言及している。センター利用のイメージがわからない場合には3章から順に読んでいただきたい。

次に、4章・5章では、若者の利用・参加のあり方を、よりセンターやユースワークの特徴に関連付けながら検討することを試みている。まず4章では、若者のセンター利用の経過に着目し、利用し始めからその終結までを扱うなかで、センターのどのような特徴がその時々の若者の利用に影響を与えているのか考察している。センターのもつ“曖昧さ”が、若者たちの利用に大きな影響を与えていることが指摘されている。他方、5章では、ユースワークがおこなわれるセンターという〈場〉に焦点化し、その特徴と価値を論じた。若者にとって、センターという場所そのものがあることに価値があるとともに、主体的な参加や他とは異なる関係性の生成などを可能にする特徴的な空間＝〈場〉がセンターに見られることを論じている。

続く、6章・7章は、センターにおける他者とのかかわりに着目し、検討をおこなっている。6章では、ユースワーカーは若者にとってどのような存在であるのか、分析をおこなっている。ワーカーへの意味付けは多重であったり捉えなおされたりしていくことが論じられているとともに、〈場〉と共に埋め込まれているワーカーの存在についても触れられている。また、7章では、ワーカー以外の他者がどのように語られたのかに焦点化し、検討をおこなった。センター利用を通じて、異質性に富んだ他者とのかかわりが可能となり、関係が深まる過程を分析している。

以上を踏まえ、8章では、ユースワークが、若者の価値形成や人間形成にどのような影響を与えた



のかについて、対象者が感じている変容をもとに論じている。人とかかわりによる変容のほか、ユースワークを通じて選択肢や役割を得ることによる影響が指摘されている。さらに、9章では、若者がユースサービスに何を期待しているのか、そのニーズをまとめている。

最後の総合考察は現時点でのさしあたっての総括である。もとより、限られた期間、限られた対象についての調査であり、これをもってユースワークの価値のすべてが明らかになった訳ではない。ユースワークの中でも特定の方法・関わりについて調査したものである、という制約を前提としている。しかしながら、そうした制約条件を持ちながらも、今回の調査から発見された知見は、ユースワークというものの価値や可能性を明らかにする一つの材料となったと考える。ぜひ、忌憚のないご意見をいただけたらと思う。

(水野 篤夫／公益財団法人京都市ユースサービス協会)

#### 研究実施者（「若者調査」メンバー）

- 原 未来 : 元若者支援者・研究者（滋賀県立大学）
- 石山 裕菜 : 研究者（同志社大学心理学研究科博士後期課程）
- 松村 幸裕子 : 元利用者・若者支援者（NPO 法人暮らしづくりネットワーク北芝）
- 勝部 皓 : 研究協力者（非営利活動団体 Atlas）
- 水野 篤夫 : 財団事務局（公益財団法人京都市ユースサービス協会）
- 横江 美佐子 : シニアユースワーカー（公益財団法人京都市ユースサービス協会）
- 久住 祐香 : ユースワーカー（公益財団法人京都市ユースサービス協会）



## 目 次

<b>1 章 京都市ユースサービス協会事業の全体像 ～調査の前提となる実践の背景～</b>	<b>1</b>
1 節 ユースワークとは	1
2 節 ユースサービス協会の概要	2
3 節 青少年活動センターの概要	4
4 節 センターにおける若者への関わり	6
5 節 ユースワーカーという存在	8
<b>2 章 方法</b>	<b>10</b>
1 節 予備調査	10
2 節 本調査	13
<b>3 章 若者はどのように利用しているのか</b>	<b>16</b>
1 節 利用区分から見る利用の実態	16
2 節 利用区分にとどまらない利用の広がり	25
3 節 まとめ	27
<b>4 章 ユースワークとどのように出会い、離れていくのか</b>	<b>29</b>
1 節 利用開始にみられる特徴	29
2 節 利用の広がりを支えるもの	36
3 節 利用の減少と新しい試み	43
4 節 まとめ	47
<b>5 章 ユースワークにおける〈場〉の価値</b>	<b>49</b>
1 節 “場所”としてのセンターの価値	49
2 節 センターで生成される〈場〉の特徴	52
3 節 若者たちにとってのセンター	58
4 節 〈場〉にかかわるユースワーカーの存在	61
<b>6 章 ユースワーカーは、若者にとってどんな存在なのか</b>	<b>64</b>
1 節 若者にとって印象に残っているワーカーとは	64
2 節 ユースワーカーの仕事は若者にどう映っているか	66
3 節 ユースワーカーからの働きかけで印象に残っていること	70
4 節 ワーカーと周りの大人との比較	72
5 節 ワーカーはどんな人たちか	73
6 節 ユースワーカーの役割を捉えなおす語り	73



7節	まとめ	74
<b>7章</b>	<b>ユースワーカー以外の他者との関わりの有無とその意味付け</b>	<b>76</b>
1節	ワーカー以外の他者の存在はどう語られたか	76
2節	本人が意図しない他者との関わりが生まれること	78
3節	他者と出会ったことで若者が変容していったこと	79
4節	他者関係の多様な拡がり	81
5節	まとめ 他者との関わりから見たユースワークの価値	84
<b>8章</b>	<b>自身の変容とユースワークの関係</b>	<b>86</b>
1節	目的	86
2節	人との関わりによって変容が起こったと感じている事例	86
3節	新しい選択肢を知ることによる変容	93
4節	役割を与えられることによって起こった変容	95
5節	まとめ	96
6節	限界と今後の展開	96
<b>9章</b>	<b>ユースサービスへの期待とニーズ</b>	<b>97</b>
1節	目的	97
2節	設備としてのニーズ	97
3節	イベントやプログラムとしてのニーズ	98
4節	ユースワーカーの関わりに関するニーズ	99
5節	利用者を増やす上で若者が青少年活動センターに期待するもの	99
6節	まとめ	100
<b>総合考察</b>		<b>102</b>
1節	若者にとってのユースワークの価値	102
2節	ユースワークの中核	104
参考資料		108





## 1 章 京都市ユースサービス協会事業の全体像 ～調査の前提となる実践の背景～

水野 篤夫（公益財団法人京都市ユースサービス協会）

今回の調査まとめの中身に入る前に、本章では調査の「フィールド」である京都市ユースサービス協会（以下、協会）及び青少年活動センター（以下、センター）と、そこでのユースワーク実践とその背景について、概要を説明しておきたい。インタビュー協力者やユースワーカー（以下、ワーカー）が、どのような場で関わりを持ち、ワークを行っているのかをつかんでいただいた上で、次章以降の調査分析・まとめを読み進んでいただければと思う。

### 1 節 ユースワークとは

この調査の前提となっているユースワークとは、以下のようなものとして理解される。

#### 1－1. ヨーロッパから紹介された概念と実践方法

ユースワークは、主にヨーロッパ各国において若者が大人へと移行していく時期を支える、一連の施策や民間団体の活動を意味する。国ごとに制度や理念に違いもあるが、非形式的な取り組みであること、教育と福祉の双方の領域にまたがる活動であること、若者の自発性や自己選択を尊重する考え方といった意味で共通している。中でもイギリスでは、早い時期から制度化が進められたことから、その考え方と方法が1960年代以降に日本にたびたび紹介され、各地で取り組まれてきた。

なお、イギリスでは60年代にはユースサービスという言い方が主流であったが、70年代以降は、ユースワークやユース・アンド・コミュニティワークといった言い方が使われることが多くなり、主に施策を示す場合にユースサービスが使われ、方法を語る際にユースワークを用いるとも言われるが、両者の区別は必ずしも明確ではないので、本報告書においても厳密な使い分けは意識せず、主にユースワークという表現を用いる。

ユースワークの定義は多様だが、イギリスでは以下のような目標観で語られる。

「楽しさとチャレンジとを学びに結びつけた、“非形式的な教育”を通して、若者が自分自身のこと、周りの人々のこと、そして社会を知っていけるように手助けし、また、若者の個人としての成長と社会性の開発を促し、若者がコミュニティや社会に対しても声を出し、影響を与えることができる位置づけを得られるようにする」<sup>1</sup>

非形式的な教育を基盤とした活動であること、若者の個人的な成長・社会性開発のみを目的とするの

---

<sup>1</sup> What is youth work, The NYA guide to youth work ;National Youth Agency(2007)より。





でなく、コミュニティへの包摂・参加をねらうことを明示している点に特徴があるといえる。

## 1-2. 京都市における展開

京都市においては、全国的にみても早くから（1970年代から）イギリス流のユースサービスの考え方が青少年施策の柱として位置づけられ、現在に到るまで一貫して用いられている（京都市ユースアクションプラン<sup>2</sup>を参照のこと）。そこでは、青少年を“若き市民”としてとらえ、自主的な活動の経験を通して市民として育ててくれることを目指す施策の柱として、「ユースサービスの理念」を掲げている。

## 2節 ユースサービス協会の概要

京都市における、青少年施策推進の担い手として、京都市ユースサービス協会は設立された。以後、30年近くにわたり、市行政と民間の青少年育成活動や青少年団体の活動と密接に関わりながら、「ユースサービス（ユースワーク）」の考えを柱に据えながら事業を展開してきた。その概要を以下に記載する。

### 2-1. 成り立ちと事業の推移

協会は、1988年3月に京都市の全額出資により設立された財団法人（現在は公益財団法人）であるが、設立当初から民間青少年団体と行政の協力で運営されるという点に特徴があった。前身となる活動があったこと、設立時から青少年団体からの出向スタッフが事業を担ったこと、等がユースサービスのコンセプトを具体化してきた。当初は、青少年活動センター1館を運営しつつ市からの委託事業・補助事業を実施していたが、1996年以降に7カ所の青年の家（勤労青少年ホーム）の運営を順次受託し、その後、青少年団体との出向・委託関係を整理してユースワーカーを直接雇用し、その規模を拡大した<sup>3</sup>。さらに、2003年に厚生労働省の施策である、就労支援事業「ヤングジョブスポット」を受託したことで、特定課題支援をも担う財団へと、事業の幅を広げていくことになる。この事業は2006年には、次の事業である若者サポートステーション（サポステ）に引き継がれ、協会も継続して若者の職業的自立支援に取り組んでいった。2010年には、子ども若者育成支援推進法が施行され、京都市から支援地域協議会の指定支援機関としての事業を委託され、従来の余暇活動支援としての青少年活動センター事業とともに、サポステも含めて、「課題を持った」若者の自立支援の事業分野が大きな位置づけを占めるようになっていく。

### 2-2. 職員構成

職員は約60人（内アルバイト10人）。アルバイトを除く大多数の職員が、事業現場に関わるか、関

<sup>2</sup> 京都市ユースアクションプラン（青少年育成第3次計画）：京都市ウェブサイト  
（<http://www.city.kyoto.lg.jp/hagukumi/page/0000099293.html>）を参照のこと。

<sup>3</sup> 元々あった京都市青少年活動センターは2000年に廃止されたため、センター数としては結局7館となっている。







わった経験がある人で占められる。ユースワーカーとしてのトレーニングを内外の研修を通して行って、立命館大学との共同運営による資格認定を経た職員を含んで、内部認定のユースワーカーが 20 人程度在籍する。それ以外にも、関連する資格を有した職員は多く、社会福祉士・精神保健福祉士・教職のほか、思春期保健相談士やキャリアコンサルタントなどの資格を持つ者も多い。主に大学学部卒業者だが、大学院修了者も 2 割ほどいる。

### 2-3. 主な事業

現在の主な事業は次のようなものである。まず協会本来の事業として、青少年団体・機関間のネットワーク形成、シティズンシップ教育、情報発信、調査研究等が柱となっているが、独自の収入源はあまり無く京都市の補助金で実施する部分も多い。続いての大きな事業部門として、子ども若者支援事業があるが、京都市子ども若者支援地域協議会の指定支援機関としての事業及び、個別相談・支援事業（支援ケースは年間 100 ケース程度／相談受理 500 件程度）と、若者サポートステーション事業（就職決定者 120 人程度）が柱となっている。それ以外に、中学生学習支援事業を 2010 年から受託実施しているが、年々事業規模が拡大し、全区での実施を協会がコーディネートしている（2016 年度は 14 カ所／参加中高生 150 人程度／学生を中心とするボランティア 250 人程度で、通算 600 回以上の学習会を実施した）。

それらとともに、青少年活動センター指定管理者としての業務は、事業全体の中でも予算規模・人員ともに最大のものである。7 カ所の管理運営をしつつ、それぞれの事業テーマ設定をしながら事業展開している。詳細は以下に述べる。

### 2-4. 協会の基本的な方向性（ミッション）

協会の活動のねらいとして、「基本的な方向性（ミッション）」では、以下の 4 つの点が掲げられている。

○青少年が自分の本来持っている力を、損なわれることなく伸ばしていけるように支援をする

（1）受け取る様々な情報について、それが自分の考えや行動に与えている影響を自覚できるための支援を行う。

（2）じっくりと自分や他者と向き合える空間・時間を提供し、多面的な見方ができる柔らかい人間性がつくれるよう支援する。

（3）自分の興味関心や能力を実感し発現できる機会を提供する。

○青少年が問題を抱えた時や、必要を感じたときに、課題を自ら乗り越えたり解決していくための力を獲得できるような支援をする

（1）青少年同士が本音で語り合う経験の機会をつくり、相互の学び合いや励まし合いが行われるようにする。



(2) 多様な社会資源を利用するスキルや情報を得られるようにする。

(3) 特に援助が必要と思われる青少年に対しては、個別的な支援を行う。

○青少年が市民社会の一員として参画し、役割を担っていけるための経験の機会を提供する

(1) 自らの学んだことや思いを社会的な場で試す機会を提供し、自分の興味関心がどのように社会的に位置づけられるかを考えられるようにする。

(2) 競い合ったり、協働し合う活動、多世代の交流による活動などを通じ、社会の中での役割を担う上でのスキルやコミュニケーション能力を高められる機会をつくる。

(3) さまざまな障害のある青少年が、障害のない青少年と同様に活動に参加できる場づくりをする。

○上記の課題に対応するユースサービスの事業が、社会的な認知を拡大していくための活動を行う

### 3節 青少年活動センターの概要

京都市青少年活動センター（以下、センター）は、「青少年の自主的な活動を支援する」場として市内7カ所に設置されている。元々は、勤労青少年ホーム（労働省補助を受けて全国に設置された勤労青年の余暇支援施設）として設置されたものが、2000年代に中学生から30歳までが使える施設として転換を果たし、現在まで運営されてきている施設である。

#### 3-1. 施設の概要・立地・利用者の状況・経緯

センターの利用状態は、立地している地域の背景や、学校が近くにあるかどうかといった点、施設特性といった物理的な環境によっても左右される。

京都市内在住の利用対象の青少年は約30万人。利用数は、7センター全体で約50万人（内10万人程度は一般利用）。センターがあるエリアを中心としつつも、全市からまんべんなく利用がある。ただし、西部エリア（西京・右京）からの利用は極端に少ない。年齢層で言えば、徒歩圏に中学高校があるセンターでは、中高生の利用が多いが、全体としては大学生の利用が数としては一番多い。



図 1-1 施設の配置

北・中京・東山・山科・下京・南・伏見



共通する主な施設は会議室・ロビーなどだが、音楽スタジオ、料理室、体育施設等を有するセンターもある。また、単独で建っているセンターもあるが、区総合庁舎等に入っているセンターもある。

表 1-1 7センターと事業の特徴

センター名	テーマ
北	若者の環境学習とまちづくり活動へのサポート
中京	総合相談窓口と社会参加の促進
東山	若者の創造表現活動の支援
山科	若者のまちづくり活動への参加の機会づくり
下京	スポーツ・レクリエーション活動を通した若者の社会参加
南	若者の居場所づくりの支援
伏見	多文化共生の地域づくりを担う若者の育成

### 3-2. 若者はどのようにセンターにやってくるか

調査協力者による語りにも現れているが、全体的な動向としては以下のような経緯で利用に到る。

中学生は、近くにセンターがある場合に、利用し始めることが多い（詳しくは5章に記述）。高校生以上になると、グループでの活動のために場所を検索して来ることが多いが、一人で自習室を探してやってくることもある。また、ボランティア活動の場として来始める若者も多い。全体の数的な割合としては、施設利用（部屋利用）が一番多い。情報源としては、学校・大学などへの広報を見て、先輩などから聞いて、協会・センターからの広報物を見て利用に到ることが多かったのが、最近はインターネットでの検索によって場所を探して利用に到ることも増えている。

事業参加者は10万人程度。センターのさまざまな主催事業広報に応じて参加する若者の数ということになる。明確な動機を持って参加してくる若者もいるが、「何かないか」「暇だから」といった言い方で参加してくる層もいる（詳しくは4章で分析する）。

### 3-3. どんな「利用」形態があるか

施設利用としては、まず青少年グループとして施設を予約して使う形態がある（ダンス・演劇・ボランティア・ゲーム・スポーツ・遊び等）。個人利用は、自習スペースとしての利用、ロビーのみの利用が多い（トレーニングジムの利用も下京・中京センターではある）。予約無しで使うことが出来る形態としてのロビー利用には、時間待ちやPCを使うため、自習のためといった目的がある利用とともに、「暇つぶし」「誰かいないか」「漫画を読みに」「ワーカーと話しに」といった利用もある。また、青少年育成団体としての登録をした団体の利用もある。青少年・育成団体利用以外のものが一般利用で、企業・大人の趣味活動の団体や、地域団体などの利用がそれに当たる。



## 4節 センターにおける若者への関わり

本調査では、センターが若者に関わる形態を以下の4つ（事業への参加・施設利用から・ロビーでの関わり・ボランティアとしての参加）として整理した。また、その4つの区分に収まらない独自の関わりとしての相談・支援についても触れている。

### 4－1. 事業を入り口とした関わり

センターの事業は多種多様に企画実施されており、年間 300 事業ほどの大小様々な事業プログラムが行われている。教室形式で知識を得たり何かを習うことが中心の事業もあるが、どちらかといえば発言したり、身体を動かしたり、対話・コミュニケーションがあるような事業が多い。事業のねらいとしても、若者相互の対話や交流を目指したものが多く、担当ワーカーを中心としてそこで若者と関わり始めることは多い。

（事業例）

- ＊「こども自然・暮らし体験クラブ」（都市近郊の山里を子どもたちと訪問し、農山村の暮らし・文化に触れる）
- ＊「街中コミュニティ」（生きづらさを感じている若者の居場所づくりを支援する）
- ＊「演劇ビギナーズユニット」（初心者を対象とした演劇の集団創作プログラム）
- ＊「地域通貨〈べる〉」（若者が“働いた”対価を得て、役割と承認を得られるようにする取組）
- ＊「チーム街スタ」（若者が地域でフィールドワークし、商店街などでの活性化企画を考える）
- ＊「ロビー喫茶」や「20 代話せるプログラム」（若者の孤立を防ぐプログラム）
- ＊「国際交流カフェ」（外国ルーツの若者とのフリートークやイベント企画）

### 4－2. 施設利用を通じた関わり

センターの施設利用において、グループ・団体で部屋を予約して使うような場合、必ずしも個々の若者に関わる機会は多くない。グループのリーダーや利用予約を担当するメンバーとの関わりは生まれるが、概してそれは「カウンター越し」の施設管理者－利用者の関係となる。その意味で、ピアノ練習やトレーニングジム利用など、個人としての繰り返しでの施設利用の場合は、個別的なワーカーとの関係に入りやすい。いずれにしても、ワーカーの側には、この関係を単に受付対応や管理者としての対応にとどめないよう、意図を持って関わる。催しへの誘いかけや、利用の前後の時間を生かした個々のメンバーへの声かけ、センター運営への意見聴取などがなされている。

### 4－3. オープン空間としてのロビーを生かした関わり

各センターにはロビーがあり（広さや設備は施設によって差がある）、上記のように目的を持って、あ





るいは明確な目的無く、予約なしに使うことが出来る。自習のためにロビーを使う若者も多い。また、部屋の入れ替え前後などにミーティング場所としてロビーを使うグループもある。グループで部屋利用をしている場合と同様、具体的な目的を持って利用している若者にはワーカーが直接関わる余地が無く、“通り過ぎていく”場合もあるが、それでも、基本的にワーカーは声を掛けに行って関係づくりを行う。

ロビースペースを生かした小さな催しを通してアプローチすることもある。掲示板をコミュニケーションボードとして使う（「この春したいこと」「友だちからされて嫌なこと」といったテーマで自由に書いたことを貼り出す。それにワーカーがコメントを付ける等）、「質問 BOX」を設置して自由に書いて投入してもらうといったものから、ロビーでお茶を出してしゃべる機会を作ったり、ボードゲームなどを置いていっしょにやったりする。また、「喫茶」カウンターを持つセンターでは、それを生かしたプログラムをボランティアの協力で運営したり、カウンター越しにワーカーが会話する機会を持ったりする。

こうした関わり方の総体をワーカーの側からは「ロビーワーク」として、ユースワークの重要な活動と位置付けている（詳しくは4章を参照）。

#### 4-4. ボランティアやスタッフとしての参加

青少年活動センターでは、積極的に若者のボランティア活動を促している。その結果として毎年 700 人から 800 人の若者（年間のべ登録数なので必ずしも実働数ではない）がさまざまなボランティアとして活動している。ボランティア（もしくはスタッフと呼ばれることもある）は、ユースワークの担い手（パートナー）であると同時に、関わるべき対象としても捉えられている（考え方はボランティアステートメント<sup>4</sup>にまとめられている）。一般的に活動は無償であり（交通費や活動実費が出る場合はある）、登録し参加する若者は、対価として経験の機会や同世代・他世代の仲間（経験を共有する他者）を得ることで、互酬性が担保されるものと位置付けられている。音楽イベント企画や、子どもにプログラム企画・提供する活動のように年間もしくは一定期間長期の活動もあるが、イベントの当日スタッフや清掃活動など単発・短日数の活動もある。

#### 4-5. 日常会話から始まる個別的な相談や支援

センターにおける相談・情報提供は、年間 1,400 件あまりを受理し、一つの重要な事業として位置づけられている。その特徴は、あらかじめ予約をして来談するケースより、日常的とも思われるやりとりの延長線上で相談に到るケースが多い点にある。それらは「あんなあ」「実はなあ」といった言葉から始まることも多い。相談内容としては、グループの活動内容、学校や職場での人間関係、進路や就労、身体や性格、性や恋愛に関すること、余暇の情報について等、多岐にわたる。また特別な相談員が受けるのではなく、ワーカーが相談に対応することも特徴といえる。この調査に協力してくれた若者との関係

<sup>4</sup> ユースサービス協会ボランティアステートメントについては、協会ウェブサイト（<http://ys-kyoto.org>）を参照のこと。





においても、日常的なやりとりとともに、時には個別相談という形で対応することもある。

表 1-2 内容別相談件数

	2015 年度 (H27)	2016 年度 (H28)
学校生活（進路等）	244	254
市民生活（余暇の過ごし方等）	763	621
職業生活（就職等）	99	82
家族・結婚（親子関係等）	113	146
一 般（生き方や健康等）	500	280
合 計	1,719	1,383

## 5節 ユースワーカーという存在

この節では、ユースワークにおいて、中核的な位置づけを持つ存在であるユースワーカーについて、簡略に紹介する。

### 5-1. 若者の成長を支える専門スタッフ

ユースワーカーは、ヨーロッパの各国において、国家資格として位置づけられて活動している専門職である。学校の教師と比較される場合もあるが、学校外の非定型的な学びの機会と若者を媒介する役割を果たす存在だといえる。養成は大学や大学院などの専門コースにおいて行われている。日本においては、公的な資格としては成立しておらず、かつていくつかの大都市圏で行政による養成が試みられたがうまく継続されず、京都における立命館大学大学院でのコース、協会での養成プログラムが数少ない例となっている（いくつかの NPO（特に若者自立支援や社会教育活動分野）において、自前のスタッフに研修を行う中で、ユースワーカーの呼称を名乗っているケースはある）。

ユースワーカーの特徴は、若者の側に立って考えることが出来る、若者との間で上下関係を作らない、若者を偏見無く受けとめることが出来る、若者と関わるその場の状況に即応して動くことが出来る、若者自身の選択を大事にする、といったスタンスにあり、ユースワークの価値を体現しつつ若者と関わる存在といえる。

本調査で登場するユースワーカーは、いずれも協会が雇用するフルタイムの職員である（ただし若者の側から、アルバイト職員やボランティアについても“ワーカー”と認識している場合はある）。先に述べたように、日本において資格制度は未整備であり、協会として独自の肩書きとして早くから用いてきた経緯があるため、研修を通して「後追い」で名義にともなう力量形成を図ってきた。そうした背景もあり、センターのワーカーが「すべて」上記のような価値観を明確に共有出来ている訳では無いが、研修





(On – Job / Off – Job 両面からの) 等を通して、ある程度の共有が図られ共通基盤となっているといえる<sup>5</sup>。

## 小活

以上、今回のインタビュー調査での若者（やワーカー）の語りの前提となっている、協会におけるユースワークの概況を紹介してきた。以後の各章の分析を読んでもらう際に振り返って参照いただければと思う。

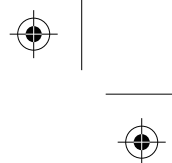
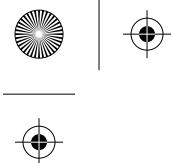
---

<sup>5</sup> イギリス(イングランド)におけるユースワークの価値基準(Ethical Conduct in Youth Work (NYA2007))では、以下の点が挙げられている。

- (1) 若者を尊敬すべき存在として関わる。個々の若者が価値あるものと否定的な差違付けをしない。
- (2) 若者の自己決定と自己選択の権利を大事にし、それを伸ばすよう促す。
- (3) 何かに挑戦することを含む、教育的な活動を通した学びの機会を若者に許容し、若者の福祉と安全を守り伸ばすようにする。
- (4) 若者に対してのみならず、社会全体の公正さの促進のために貢献する。多様性と個々の違いを尊重し、分断に対して挑戦することを促す。







## 2章 方法

石山 裕菜（同志社大学心理学研究科博士後期課程）

本研究を行うにあたり、2015 年度には、調査の大まかな設計と目標設定を行い、予備調査を始めた。予備調査において挙げた検討事項を踏まえ、2016 年度から本調査に取り組んだ。この中で、質問紙調査など量的な調査を行うことも候補に挙げたが、明文化されていないが、そこで起こっていると考えられるユースワークのプロセスやダイナミズムを検討するため、インタビューを用い研究を行うこととした。

### 1 節 予備調査

#### 1－1. 方法

調査期間 2015 年 10 月から 2016 年 3 月にかけて行った。

用いた技法 半構造化面接法によるインタビューを 60 分から 90 分程度行った。

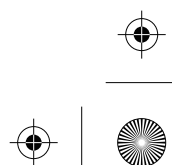
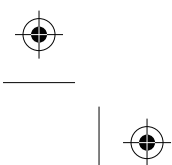
対象者 過去もしくは現在、（公財）京都市ユースサービス協会（以下、協会）のユースワークのサービスを利用している者もしくはボランティアスタッフを対象とした。対象は、ユースワーカーと現在でも連絡可能な人物とした。インタビューは全部で 4 回行われ、そのうち 3 回は対象者 1 名、1 回は対象者 2 名であった。対象者の選定にあたっては、調査グループに属すユースワーカー（以下、ワーカー）が現在も連絡可能で、1 年以上協会と関わっていた者を選定した。

表2－1 対象者の基本属性

対象者番号	年齢	性別
A	23	女
B	28	女
C	23	女
D	19	男
E	18	男

調査グループ 現役ワーカーと、若者関係の仕事、もしくは関連分野の研究者で構成された外部協力者を含む、6 名で調査グループを形成した。全ての面接にはこのグループのうち 2 人が調査者として参加した。なお、調査グループの人員構成は以下の様であった。

- ・原未来：元若者支援者・研究者（滋賀県立大学）
- ・石山裕菜：研究者（同志社大学心理学研究科博士後期課程）
- ・松村幸裕子：元利用者・若者支援者（NPO 法人暮らしづくりネットワーク北芝）
- ・水野篤夫：財団事務局（公益財団法人京都市ユースサービス協会）
- ・横江美佐子：シニアユースワーカー（公益財団法人京都市ユースサービス協会）
- ・上原裕介：ユースワーカー（公益財団法人京都市ユースサービス協会）





質問事項 対象者がどのようにユースサービスを利用していたかを抽出するために必要であると思われる項目を挙げ、それをカテゴリー化した。分類した項目を聞き出すための質問を、様々な対象者を想定し、項目ごとにいくつか挙げた（＊巻末参考資料 1：予備調査インタビュー項目）。項目は、①きっかけ（何故、活動センターを利用しようと思ったか）、②利用方法（どのような形で活動センターを利用していたか）、③グループダイナミクス（人との関わり方はどうであったか、それが、どのような影響を与えたか）、④思い出（どのようなことが印象に残っているか）、⑤第一印象（活動センターを初めて利用したとき、どんな印象を持ったか）、⑥ユースワーカー（ユースワーカーについて関わりや出来事で印象的なことについて）、⑦変化（ユースサービスを利用することで自分の中でどのような変化があったか）、⑧周りの人への対応（周囲の人にユースサービスをどのように語っていたのか）、⑨ニーズ（これから、ユースサービスの何が必要か、また、利用をするうえでこのようなものがあたらよいと思うことは何か）であった。

手続き インタビューを行った。まず、インタビューを行うにあたり、事前にインタビュー趣旨の説明と、説明書の読み上げを行った。その上で、同意書を読ませ、インタビューを途中で止められること、述べたくないことは述べなくともよいことを伝えた（＊巻末参考資料 2：対象者への説明書、＊巻末参考資料 3：対象者への同意書）。

分析 まず、インタビューごと検討を行った。その際、インタビューの流れや注目すべき発言などについてまとめ、比較を行った。その際、今回の予備調査で聞き出せなかったこと、次回本調査で注目すべき部分などについても検討した。分析の際は、①ユースサービスの内、影響を与えた可能性のある要因について推察することとした。②データを比較検討し、対象者共通の要因を検討した。

## 1-2. 結果と考察

（1）調査対象者のセンター利用方法・利用していた発達時期がインタビュー回答に影響を及ぼす可能性

調査対象者がどのような年代に、どのような立場で、また、どのような方法で青少年活動センター（以下センター）を利用していたかによって、インタビューの回答に影響を及ぼす、可能性が示された。

対象者 A・B・D・E は利用者として、参加者 C はボランティアとしてセンターを利用していた。また、A・D・E は中学、B は高校、C は大学になり、センターを利用し始めた。

例えば、C は子どもと関わるボランティアをしたいという思いから、センターの利用をし始めている。そのため、ワーカーを様々な“役割”という視点から見ている。C は京都以外の地域から大学入学に伴って京都に来ており、イベントで初めてセンターについて知っている。そのイベントを訪れたのも“子どもと接する”という目的があつてのことであり、その目的意識がより客観的に自分や他者の活動を観る、ということに繋がっていったのかもしれない。

一方 B は、友人に記事を作成する事業に誘われ参加した。そのため、記事を作成するということがセンター利用の主眼となっていた。よって、インタビューで抽出された会話は、同じ事業に参加していた





メンバーや、事業で出会った人々のことが中心であった。

Cはボランティアとして利用していたため、ユースワーカーがそのイベントで対象としていた子どもへの関わりなどについても言及しているが、Bの場合は、本人が利用者であり、自らとの関わりについてのみの言及に留まっている。

それに対し、Aは、センターを訪れたきっかけとして、先輩に誘われて来たと話している。上述した二人の様に決まった事業に参加していたわけではないが、ロビーに来て、そこで過ごしたり、スポーツをしたり、楽器を演奏したりして過ごしていたという。Aは用事がなくとも、センターに来て、話をするなどして過ごしていたという。実際、Aの通っていたセンターは、地域の中で、青少年が集まる場所として認識されており、学校が終わった後集まる場としてセンターが利用されることも多い。また、一人でセンターに来ていることも多かったと話しているAは、あるユースワーカーとの思い出を多く語っており、相談したいときは、一人でセンターに通っていたのではないかという印象であった。

同様に、C、Dの通っていたセンターは学校の近くにあったこともあり、周りの人間の「口コミ」を聞き、利用し始めたという。これも地域の中にセンターの存在が認識されているからこそ、この様に利用しようと思えたのであろう。彼らは、様々な出来事の中で、エピソードの中の登場人物として、ワーカーを語っている。

以上より、インタビューの比較を通して、場と人（ワーカー・参加者同士・プログラム）が影響を与えていると仮説を立てた。また、対象者がどのような立場でセンターを利用していたかによって、インタビューの回答が異なる可能性が示唆された。そのため、“ボランティア・プログラム・施設利用・ロビー利用×使用していた年代”により対象者を区分し、本調査のインタビューを行うこととした。

## （2）当時をよく知るワーカーがインタビューに同席することの必要性

今回のインタビューでは、対象者がユースサービスを利用していた当時、本人とよく関わっていたワーカーがインタビューに入っていた場合と、入っていない場合があった。入っていた場合では、本人にとって覚えていない出来事であっても、ワーカーに促されることによって、その出来事を思い出すことが可能であった。こうしたことから、センター利用時に関係していたワーカーがインタビューに入るからこそ、話やすいこと、出てくることがある可能性が示唆された。

また、その際、ワーカーが持っている本人の利用動機や変化、思い出が対象者と必ずしも一致していなかった。当時、ワーカーがどのように感じ、どのように関わっていたか、それを対象者がどう感じていたかなどの差についても検討していく必要性が示唆された。

よって本調査では、ユースワーカーの影響をより明確化したり、ユースワーカーの持つユースワークの価値観が対象者に影響を与えたりするため、インタビューに対象者と関係していたユースワーカーに事前に対象者に関するインタビューを行い、調査者に対するユースワーカーのイメージと思い出に残った出来事などを尋ねることとした。その後、そのユースワーカーを調査者加え、対象者にインタビューを行うこととした。



以上より、本調査では（１）（２）を踏まえて調査設計をおこなっていくこととした。

## ２節 本調査

### ２－１． 方法

調査期間 2016年8月－2016年12月に行った。

用いた技法 半構造化面接法によるインタビューを60分から120分程度行った。

対象者 予備調査の結果から、対象者の利用形態により、インタビュー回答が異なる可能性が示唆された。すなわち、その対象者がどの年代に主に利用していたのか、また、どのような形でセンターを利用していたのかによって、インタビュー回答に相違がある可能性が示された。そのため、対象者の利用方法を過去もしくは現在、センターを利用している者・ボランティアスタッフで、対象の利用年代（中学生/高校生・大学生/社会人）×利用方法（施設・ロビー・ボランティア・事業）で大別し、それぞれに対象者を選定した。その際、現在、協会に所属する現役ワーカーに、調査対象となり得る者をリストアップさせ（78名）、その中から、それぞれの属性に最低1人は分けられるよう対象を以下の様に選定した（11名）。

表2－2 対象者の基本属性

対象者番号	年齢	性別	利用区分	利用時期	利用年代
1	21	男	施設利用	高校生	2012
9	28	男	ボランティア	社会人	2014～2016
22	20		ロビー	中学	2011頃～
23	22	男	ボランティア	高校生から	2010頃？
28	31	女	ボランティア	大学生	2004～2007
31	30	女	ボランティア	大学生～ 社会人	2012頃
34	26	男	施設利用	高校生	2009頃
46	21	男	ロビー	予備校時代	2013～
49	24	女	事業参加	大学生から社会人	2011～
53	30	女	事業参加	高校から	2000
78	22	男	施設利用	中学から高校	2011～

\*インタビュー内にて確認の取れなかった項目については空欄とした。

\*利用区分の詳細については1章参照のこと。

調査グループ 本調査のために、ワーカーと、若者関係の仕事、もしくは関連分野の研究者で構成された外部協力者を含む、7名で新たに調査グループを形成した。全ての面接にはこのグループのうち1人が調査者として参加した。なお、調査グループの人員構成は以下の様であった。

- ・原未来 ： 元若者支援者・研究者（滋賀県立大学）
- ・石山裕菜 ： 研究者（同志社大学心理学研究科博士後期課程）

- ・松村幸裕子 : 元利用者・若者支援者（NPO 法人暮らしづくりネットワーク北芝）
- ・勝部皓 : 研究協力者（非営利活動団体 Atlas）
- ・水野篤夫 : 財団事務局（公益財団法人京都市ユースサービス協会）
- ・横江美佐子 : シニアユースワーカー（公益財団法人京都市ユースサービス協会）
- ・久住祐香 : ユースワーカー（公益財団法人京都市ユースサービス協会）

手続き まず、ワーカーに対し、インタビュー対象者となる若者についての印象や関係する出来事などについて、30 分程度のインタビュー（半構造化面接法）を行った（以下、ワーカーインタビュー。＊巻末資料 4：本調査ワーカーインタビュー項目）。この際のインタビューは調査グループから任意の 1 名が調査者となり行った。その後、ワーカーインタビューを受けたワーカー（上述のワーカーインタビューの回答者）を調査者に加え、上述したワーカーインタビューを行った調査者 1 名と共に、対象者となる若者に対し、60 分から 120 分のインタビューを行った（以下、若者インタビュー。インタビュー構造は図 2-1 を参照）。インタビューを行うにあたり、事前にインタビュー趣旨の説明と、説明書の読み上げを行った。その上で、同意書を読ませ、インタビューを途中で止められること、述べたくないことは述べなくともよいことを伝えた（＊対象者への説明書：予備調査と同様のものを使用 ＊対象者への同意書：予備調査と同様のものを使用）。

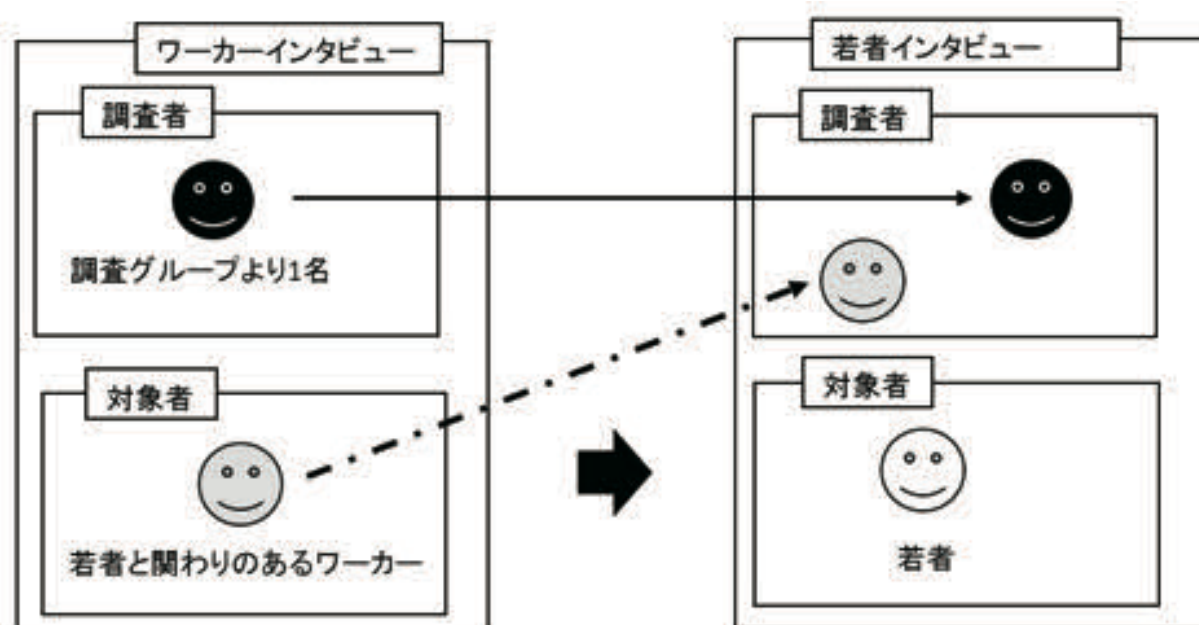
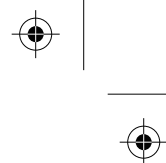
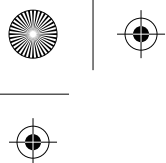


図2-1 インタビューの流れ

質問事項 質問は、予備調査を基に項目を検討し、それを使用した（＊巻末参考資料 5：本調査若者インタビュー項目）。

分析 まず、それぞれのインタビューごと概要を作成し、若者インタビューの流れ、注目すべき発言

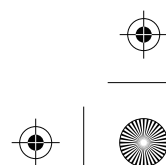
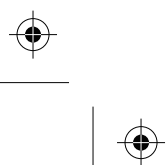




若者の成長におけるユースワークの価値  
—京都市青少年活動センター利用者インタビューから—

や項目について検討を行った。そこからキーワードをまとめ、グループ化した。以上の結果より、利用の実態、ユースサービスとの出会い、ワーカーの存在、ワーカー以外の他者との関わり、ユースサービスとの関わりにおける対象者の変容、ユースサービスへの期待とニーズに焦点を絞り、検討を行うこととした。

なお、本研究では若者を指す場合、対象者番号に No.をつけて記載した。また、若者のインタビューに同席し、インタビューを行ったワーカーは“ワーカー(No.)”の形で示した。





### 3章 若者はどのように利用しているのか

勝部 皓（非営利活動団体 Atlas）

本章では、インタビュー調査から明らかになった調査対象者がセンターをどのように利用していたのかを、整理していく。1 節では、調査時に設定した利用区分に即して若者がどのようにセンターを利用していたのかについて整理していく。そして、そこに当てはまらない横断的な利用について 2 節で分析を行う。なお、本章は利用の実態の全体像を示すものであり、他章と重なって論じている事例や内容もあるが、詳しい分析は他章を参照していただきたい。

#### 1 節 利用区分から見る利用の実態

##### 1-1. ロビー利用

ここでは、ロビー利用における対象者の利用の実態を明らかにしていく。

「中学イコールセンターみたいな」感覚を持っていた No.22 は、中学生の頃からセンターを利用していた。「ふつーに、センター集合みたいな」感じで、センターを集合場所とし、部活が終わってからもロビーでくつろいだりしていたという。中学時は、お金がないために、無料で使えるセンターを毎日のように利用していたが、高校生になったらバイトでお金も手に入るようになったため、「どこにも行きたくない、〈センターのある地域〉からあんま出たくない時とか」にセンターに行っていたという。また、自習する場所としても利用しており、その理由としては、「ここなら別に音楽聞いてても何も言われへんし。静かにしてればいいみたいな、あの勉強の部屋は。自分なりにできるから」と語っている。そして、インタビューでは、高校生の時はイライラしており、センターでは「ストレス発散」をしていたという。それは、「職員でそこのセンターの人らにめっちゃ、おいブスみたいなこと言ったりとか」「（配架されたチラシなどの）紙ちぎったりとか」していたという。それをセンターで行う理由としては、「いろんな人がいるから、楽しい。職員が楽しいみたいな」点と、また怒られても「『めっちゃムカつく』にならへんかったかな」と語る<sup>6</sup>。その、ムカつかない理由は、職員が「一緒に遊んでくれたから」ではないかと話してくれた。また、使用禁止になっても、「禁止されても、そこだけの場所〈を〉禁止されているだけであって、ロビーとか使えるしいいんちゃうみたいな」というように語り、気にしない様子が語られた。これらの語りから、センターに対する安心感がうかがえた。

同じく中学時代から利用している No.23 は、中学の合唱コンクールの練習の時に、センターの存在を知り、その後友達に誘われて、「体育館というか柔道場みたいなところ。あそこで、結構暴れていたというか」という利用をしていた。その後、高校時代も友達を誘ってセンターを利用していた。表向きには「自主勉」で利用していたが、実際には「なんにも。ただ、集まってだべっていただけなんですけど。他

---

<sup>6</sup> ここにおける若者とユースワーカーとの関係について、詳しくは 6 章も参照。





は、ゲームを持ち寄ってやったり、トランプしたり、バスケとか」していたという。そして、「高校って遊ぶところがないんですよ」と No.23 は話し、『『何しよう?』から始まるぐらいですかね。とりあえず、活動の起点がセンター』と話し、「高校入っても、ずっと一貫してたまり場」であったと話す。

また、主に友達と遊んだりテニスコート利用がメインであった No.1 は、目的の場所が借りられない時に「ああ、無理やーみたいな。で、ロビーの人らと喋ったりとか」と言った感じで、決して施設のみを目的としてセンターに来ていたわけではないことがうかがえる。また、センターの第一印象は、「なんかもう汚いし」「ヤンキーみたいな中学生がめっちゃおって。めっちゃ入りにくいみたいな…（中略）…『めっちゃ怖い』みたいな」と、感じていたという。そして、ロビーではそのヤンキーみたいな中学生の中学校同士での対立もあったという。しかし、No.1 は、対立自体は横目に見つつ、何人かとは友達になったり、一緒に遊んだりテニスをしていたりしていたと語っている。そして、あまりよくない第一印象ではあったものの、身の回りに「みんなでこうなんかするっていう場所があまりなかったんで」と語り、みんなで使う居場所としてセンターを利用していた<sup>7</sup>。

さらに、ボランティアで参加していた No.28 は、次第にワーカーと関係ができてくると、入り浸るようになったという。そこでは「個人的な相談を聞いてもらったりですとか、顔見に行くみたいな、職員さんの。そんな感じです」といったかたちでセンターに来ていた。そこでの話は、日常的な世間話や学校の課題の話、そして人生や進路の相談もしていたと語られた。また、以上の点は利用の実態がロビー利用を通じて変化していることを示していると言える<sup>8</sup>。

以上が、ロビー利用の実態である。インタビューからは、ロビー利用をする若者たちにとってセンターは「入り浸れる」場であり、明確な目的意識がなくても来られる場であることがうかがえた。また、気軽に自由に使える場として利用していた。そして、インタビューの端々から、ロビーが普段関わることのない人と関わりが生まれる場であることもうかがえている。なお、ロビー利用に関わるインタビューからは、相談していたなどといった職員の存在も見えてきている。これらの点は、ロビーが多く若者が集まる場であるからこその特徴であるように考えられる。

## 1-2. 施設利用

本項では、センターにある多様な施設をどのように調査対象者らが利用していたのかを明らかにしていく。一章で述べた通り、センターには会議室・ロビーが共通する施設としてあるが、音楽スタジオ、料理室、体育施設等を有するセンターもある。そしてインタビューからは、若者たちはこれらの施設を目的にセンターに来所しているケースもある。

No.1 は、小学校 5 年生の頃は遊ぶ場所として利用し、中学校に入ってから、自身がソフトテニス部に入っていたこともあり、テニスコートをよく利用していた。部活が終わってから「もうちょっとテ

<sup>7</sup> 以上、No.23 や No.1 の語りにある、居場所やたまり場などの「場」としてのセンターについては、5 章を参照。

<sup>8</sup> このように、ロビーを通じて利用方法が拡大する点に関しては、4 章を参照。





ニスしょ」みたいな感じで利用していたという。また、和室も利用していたという。それは高校時代に入ってからと同様で、部活終わってからテニスをする場としてセンターを利用していた。この対象者の語りでは、「ああいうコートひとコートだけでも、タダでつかえるっていうのも、すごくありがたいですね」「テニスコートは大きかったですね」とテニスコートを無料で使えることが大きかった様子であった。また、テニスをしたり友達と遊ぶことが中心であったが、最近友人の結婚式の準備をセンターの会議室を借りて行い「あ、こういう活用の仕方もあるんや」と新しい発見をしたと語っている。

No.46 は、予備校生時代に、仲間とともに自習スペースとして利用していた。グループ登録も行い、メンバーでロッカーも借りていたが、No.46 自身はそのことを知らなかった。また、仲間内で教え合うような形で勉強していたが、「隠れてピザ持ってきて食べてみたり」と勉強以外でも自由に使っている様子がうかがえた。また、思い出について「なんかよく和室を掃除してたなって記憶があって」と話し、「フィルターとか座布団とかをちゃんと入れたりとか」ワーカーの目の届かないところを掃除していた。特に座布団に関しては、「前の、どっかの団体が適当に座布団入れてたのにキレてたような記憶があるなって」と話し、きれいに仕舞わない他団体に怒りながら座布団と並べていたと話していた。また、年末の大掃除にもワーカーの声かけに応じてに参加しており、その理由としては「いつも使っているから、逆にそういうのはするみたいなのが普通かなって思ってたし」と、勉強の邪魔と思わずに前向きに参加している様子がうかがえた。そのほか、講演会にもワーカーの声掛けで参加はしていたが、本人はワーカーが問いかけをするまで覚えておらずインタビューのなかで少しずつ思い出していた。

高校の文化祭の練習をきっかけに利用し始めた No.34 も、その後部活の仲間とともに受験勉強のために自習室を利用するようになる。利用し始めたのは高校 2 年生の頃で、「受験をちゃんとしなあかんって。で、「勉強しよう」って話になって、」仲間とともに利用していた。部活をしている時期は、部活が終わってからセンターで勉強をしたりしており、勉強の他にも、テニスをしたり、ボランティアが喫茶スペースで出していたものを食べたりしていたと語っている。また、一緒に来ていた他のメンバーは、勉強を辞めて自習室を出て、マンガをよく読みに行っていたと語られた。

塾や学校の自習スペースではなく、センターの自習室を利用していた理由は、「考えると自分がやりたかったと思ったときにやれる方がいいかなって思って。で、塾には行かなかったです。で、こっち来たらきたで、気持ち的にもやりたいなって思いましたし。まあ、雰囲気もみんな。やるときはやるっていう感じだったんで。ずっとやるっていう感じではなかったですけど」と話し、自分のペースでできたことがよかったと話していた<sup>9</sup>。また、「自分たちで計画して、何かをやるっていう癖がついたというか」と話し、自分たちのペースで過ごしていたことがうかがえた。受験が近くなれば、一緒に利用していたメンバーは予備校に行ったり、高校の自習スペースを利用するようになっていたが、No.34 は一人になっても、センターで自習していたという。残念だったこととしては、自習室が使えなかったり、場所が変わった時に、知らずに、落ち着かないことがあったことだったと語られた。

---

<sup>9</sup> このような場の利用については、5 章にて詳しく論じる。





また、No.23 がよい思い出として、仲の良かった当時の所長が、クリスマスに特別に男だけの鍋パーティーをさせてくれたことを挙げている。また、マイナスな思い出として「消火器事件」があり、スポーツルームでバスケットをしている時に、ボールが消火器にあたり「センター一面真ピンクになったという」事件があったと話す。この時は、あまり怒られた記憶はないけれど、体育館を使う予定だった団体に自主的に謝りに行ったと話していた。さらに、施設利用がセンターを利用するきっかけとなり、そこから関係や活動が広がるケースもあった。

事業 A のボランティアとして参加するようになる No.9 も、最初はトレーニングルームの利用であった。No.9 は、センターを利用し始めた目的を「心身鍛錬のみですね」と話していたが、トレーニングアドバイザーを通じて、職員や他のボランティアと仲良くなる。そして、お互いよく知るようになり、ボランティアに誘われたために、ボランティアに参加するようになったという<sup>10</sup>。

No.78 も、センターを利用し始めた最初はジムを使うためであったという。当時陸上をやっており、その友達に誘われたのがきっかけであった。その後、高校三年生まで利用するが、お金がかかるためにジムを使わなくなったというが、その間に事業に参加するようになった。また、ジムの利用の目的も、最初は陸上のためのトレーニングだが、その後はダンスのためのトレーニングをするようになった。

ここまで、施設利用の実態を整理したが、利用するきっかけがセンターにある特定の施設であることが多々あった。そのことは、トレーニングなどのある程度顕在化した目的意識があり、その目的を充たす場として利用し始めている場合を示している。そして、中高の友人関係の中で一緒に利用しているケースも多い。これは、既に形成されている関係性の間で使える場所としてセンターの施設を利用していたのではないかと考えられる<sup>11</sup>。一方で、その利用の仕方は受験勉強をしに来つつ、一緒に遊んだりするなどといった、当初の利用の目的に留まらない、自由で幅広い利用をしている様子もうかがえた。また No.9 のように、施設利用からボランティアにつながるなどの、自由度の高い利用を通じた活動の広がりや関係性の構築がみられている。この様な幅広い選択肢として施設利用があることは、センターを利用する敷居を下げ、他の活動につなげる役割を果たしていると考えられる。

### 1-3. 事業参加

本項では、センターが主催する事業・プログラムに参加していった事例から、調査対象者の利用の実態を明らかにしていく。

ボランティアがしたいという理由でセンターに来始めた No.49 は、いろいろなワークショップや講演、事業に参加するようになる。その中で大きいものとして、ワーカーの声掛けで参加したダンスの事業を挙げている。これは、「コンテンポラリーダンスなんですけど、初めての人、その、ダンス未経験者が集まって、半年間ぐらいそのダンスのワークショップを受けて最後に修了公演するっていう」4ヶ月ぐら

<sup>10</sup> 以上の No.23 や No.9 のボランティア利用については、本章 1-4 で詳しく論じる。

<sup>11</sup> センター以外の場での関係性とセンターの利用については、7 章で論じる。







いの事業である。

No.49 は、この事業にワーカーの声掛けで参加し、最初は不安もあったというが、「とりあえず体を使ったダンスなんで、すごい激しく踊るとかじゃなくて自分の体をどう使うか、みたいな感じなんで、自分の体と、それに連動して自分、自分自身ともすごい向き合ったし、それに合わせて、やっぱこう他の人、一緒にワークショップやってるメンバーの人と一緒に同じものを作り上げるっていうので、その人たちの関わりもすごい濃かったなと思って」と、自分の身体の発見を通じた自分自身と向き合う過程が事業を通じてあったことが語られた。また、それを同じメンバーの中でやることを通じて形成された関係性は、他とは異なる濃い関係性が形成されたことが語られている。その関係性は、友達や同僚とは異なる「ダンスを一緒にやった人」という関係性のカテゴリーに入ると語られている<sup>12</sup>。

また、ダンスのメンバーは、舞台慣れしている人も多いため、No.49 は、置いてきぼりにされると感じていたという。そのなかで、自分は前に出るタイプではないけれども、周りに触発され、「普通なことをしている方が変やった」と、前に出ないといけないと思い、試行錯誤しつつおもしろい動きの表現を模索していたと話している。

また No.53 は、事業の立ち上げから関わっている。これについては、以下のように話している。

＜ワーカーが＞あの、『No.53 さー』、あの、えっと、なに、「最近のさ、若者ってさ、何がしたいん？」って言われたんですよ。『うちも、色々ちょっとヤンキー多いからさー』って、『普通のあんた。君らみたいな子にもっと来て欲しいねんけど、なに流行ってるー？何やったらみんなうわって思う？』って、『どんなんやって欲しい？』って言われたときに、『Z＜歌の種類＞やってください！』って言ったんですよ。『Z やってください！』って。『いいねえ！』みたいになって。ほんでなんかあの、先生を雇わはって、まあちょっとしたこうカルチャーみたいな感じでZ やろうぜみたいな感じで始めはったんですよ（No.53）。

事業Zでの様子としては、「むっちゃ怖い。張りつめてましたもん。泣くしね。なんかもうみんな」「意見のぶつかり合いでも、男やったら殴り合いぐらいの勢いで一触即発みたいなんが、よくありました。でもそれで戦わして、よりよい音楽は作られてたかなとは思いますね」と話し、いろんな価値観を持った濃いメンバーが、お互いに意見を忌憚なくぶつけ合いながら、音楽を作り上げていたことがうかがえた。また、そこでは、自分を探して、必死に生きているメンバーとの関わりが非常に印象的であったといい、常に意見がぶつかりあう中で、「生きるって、何？」といった自らの価値観を揺るがされる出会いであったことも語られた。

その後、事業はサークル化や、メンバーの年齢が30代に近づいたこと、センターの名称の変更と職員の異動などの変化もあり、「みんな実際話してたの、なんかやりにくくなったって。なんか。だから別

---

<sup>12</sup> このセンターの利用における他者関係については、7章で詳しく論じる。





にいっかー、もうやめても、みたいな感じにもなってたもん」となり、サークルとしても解散することになる。ただ、形態もメンバーも大きく変わった状態で、「ママさんコーラスの様な状態」でその後復活したと話し、その活動では時々他のセンターも利用しているとのことであった。

陸上のためのトレーニングで利用していた No.78 は、高校生になってから三年間センターのプログラムでやっていた事業 X に参加するようになる。そして、センターの〈イベント〉で歌とダンスを「披露させられた」という。これについては、「最初は嫌でしたよ。今はもうなんとも思わないですけど」と話し、最初は嫌だったが、ワーカーらに求められるうちに、毎年参加するようになり、今では「求めてもらっている、その状況？がなくなるまでは僕はもう出続けようかなって思ってますけど」と考えている。また、その取り組みについては、No.78 はマンネリ化するのが嫌だと話し、「だから、もう準備対策するとき、いっつも考えてますよね。全部。セットリストから全部。絶対考えるようにしてるんで。だからもう毎年ピリピリですよ」と語り、そのピリピリの内訳については「ストレスが3ぐらいで、7が達成感みたいな」と話す。

以上、若者たちの事業への参加の様子を整理した。これらの事例に対する語りはそれぞれ個別的であるが、いずれにしても若者たちが事業に関わることを通じて主体的に関わっていくようになっていた。それは、当初は事業への受動的な参加であったが、次第に事業に入り込み、積極的に関わっていくようになるプロセスであるように思われる。また、事業参加に対する語りは、その事業を通じた経験や学びに対する語りが多く、その事業を通じた自分自身の変化を語るものが多くみられたのも特徴であろう。その点からは、事業を通じた若者たちの価値観の形成がされている様子がうかがえた。

#### 1-4. ボランティア

本項では、センターでの事業などのボランティアを通じてセンターに関わっていた事例を整理していく。

トレーニングルーム利用から、ボランティアに誘われ参加するようになった No.9 は、「ざっくりいうと商店街の活性化のお手伝いをするっていうボランティア」に参加するようになる。そこでの思い出として、商店街の人との話の持っていく方について、ワーカーとの間に意見の違いがあったと語られ、手続きを踏んでいくべきと考えるワーカーと飛び込み営業をしていった対象者の間で考え方の違いもあったと語られた。また、力を入れたボランティアとしては、事業 A を挙げ、「なんか面白いことやろう、っていうので、人を集めるための企画」を行ったと言い、商店街のアーケードでアイドルの音楽を流し、商店街に人が並んで踊り、それを DVD にするという企画が印象的だったと話してくれた。他には、餅つきや神輿を担いだりもしたという。

ボランティアをしてよかったこととしては、地域と関わることで、「地の人も仲良くなれたし、地元のイベントに呼んでもらったりとか、でかつ、この地域にはこんなことがあってとか知ることができたりして、…（中略）…僕の欲しかったものが、おのおの意図せずを得たっていうところがあって、それがよかったことかなと思います」と語る。また、悪かった思い出としては、日常生活の時間を割かれる





ことと、会社で一部の人の目で見られるようになった点をあげている。

中学から高校にかけて一貫して友人とのたまり場として利用していた No.23 は、次第にワーカーの働きかけによってセンターのボランティアや事業に参加するようになる。No.23 が最初に参加したボランティアは、事業 D であったと言い、カキ氷やジュース、フランクフルトを中高生がセンター利用者に売るのを手伝ったという。その後、ロビーで中国人留学生との関わりがあり、ボランティアで事業 E に参加するようになる。その過程としては、「ロビーにいて、友達とゲームしていて、で、対戦型のゲームだったんですよ。で、対戦型のゲームをしていて、まあ遊んでいると中国人に『あ、それ何やってんの?』と言われて『あ、こうこうこういうゲーム』って言ったら、『ああ、それ僕ももっているよ』って言ってきて、『あ、そうか』ってなったんですけど。」そこから、お互いにゲームで勝負することを通じて、そこからその中国人と仲良くなる。その中で、留学生と日本人と交流する企画に誘われるが、最初は断ったという。しかし、入試の科目に国際交流があり、そこで前述の話を思い出し、見学に行く。そこから、継続して事業 E に関わるようになったと話す。

事業 E の思い出としては、「総じていい思い出なんですけど、とりあえずいろんな人と出会えたのは良かったです」と話す。そして、印象に残っていることとして、議事録も取らずただただべっぴんだけのミーティングや運営に対して、ワーカーにダメ出しをされたことを挙げている。

No.23 は、大学に入ってから事業 E に参加し続けた。その理由は、予定が空いていたということと、仲の良いメンバーが何人かおり、居心地が良かったためだと話している。また、No.23 が大学生になって半年後に、当時メインだった社会人が抜けたこともあり、学生メインになることになり、それに伴いリーダーを No.23 が引き受けることになっていた。リーダーになり、立場の変化や、責任を感じるようになったと話していた。ただ、リーダーを経験することで、人と話すのが苦でなくなり、また人との付き合い方を学んだと話す。

また、事業 E 活動日にはセンターにいないことを高校時代の友人に伝えておくことで、活動前の時間に高校時代の友達が集まり遊んだりもしていた。

No.28 は、友人に誘われる形で、大学一年生の時にボランティアとして事業 F に参加する。参加した理由は、クリスマスの期間だけという短期間であることや、学外に友達ができることを挙げている。参加すると、全然分野の違う人が多く、慣れるまでは緊張していたが、グループ分けをしてから、グループを組んだ人から仲良くなったという。意外と周りが受け入れてくれたから行きやすかったと話す。そして、「一年目に、クリスマスの日に子どもたちにプレゼント届けに行った時にすごい喜んでもらえて、いろいろアクシデントとかもあったんですけど、すごい楽しかったなっていうのが残ったのと、喜んでもらえて嬉しかったなっていうのがあって、それで二年目も続けて」参加した。

二年目は一年目と異なり年下も多く、自分が引っ張っていかないといけないと悩みながら取り組んでいた。その時は、ワーカーや他のボランティアに相談したりして助けてもらいながら関わっていた様子が語られている。他には、「結局ギリギリに決まるみたいなイメージがあったんですけど」と、悩みながら焦りながら、それでも追い込みがすごく結局間に合わせていたと話していた。またこの頃には、自身





の得意なことを生かしてチラシの絵を描いたりもしていた。参加した事業 F のメンバーとは今でも年賀状のやり取りをする人もいるとのことであった。

三年目は、学校の都合で毎週参加することができなかったために、来られる時に少し顔を出していたという。また、この年はクリスマスズにサンタクロースの送り出しをワーカーと共にいき、帰ってきた時に「みんないい顔して帰ってきて」とその時の様子を思い出して話してくれた。

他に、一度他のボランティアのグループに顔を出す、「ああ違う空気がする」と感じ「出来上がった中に入っていくのって難しいかもってちょっと思いました」と他のボランティアへの参加の難しさを感じた様子の語りもあった。

また、利用していた当時教育学を専攻して教師を目指していた No.31 は、ボランティアとして事業 G に参加していた。その内容は、「地域の子どもたちが自由に遊びに来れるところに、子どもと関わったり遊んだりしたい人たちが入って、一緒に遊ぶって感じですね」と No.31 は語っていた。その活動で思い出に残っていることは以下のように話してくれた。

なんか、大きいこと、事件とかイベントとかよりも、どっちかっていうと本当に普通に遊んで、何してもいいような時間で、ドッジボールしたり卓球したりコマ回したりとか、何する何するー？ と言って遊んでたこととか…。子どもとがつつり関わるのがそこで初めてだったんで、そこで関わったりして楽しいなっていうのが、次の仕事、子どもと関わる仕事をそのあとで、そのあとですよね多分、していく中では、楽しさとかが影響していたと思います (No.31)。

この語りからは、子どもと一緒に遊び方過ごし方を考えながら関わったことが思い出に残っており、しかもそのボランティアの経験が、その後の仕事にも大きな影響を与えていることがうかがえた。そして、No.31 は実際に仕事に就いた後も、「センターに行ったらなんかこう、違うアドバイスとか貰えるかな、っていうのは思ってたんで、行きました」と話し、子ども若者に関わるのならセンターやユースワーカーだという認識をして、相談にきていたと語っている。さらに、そのボランティアには障がいのあるボランティアもあり、その人との関わりの中で、「別に障がいのあるないとかじゃなくて、個人個人の付き合いみたいな感じで」 関われるイメージを持てたのが印象的だったと話していた。

一方で残念に思っていることとして、共に取り組んだボランティアとの関係性が薄かったことを挙げ、その理由としては自分の都合で時間がとれなかったことを挙げている。

No.49 は、大学入学時に京都にやって来、「せっかく京都にいるし、京都のいろいろな関わりを持ちたいなと思って、ボランティア活動とか」という思いで、姉がバイトしていたセンターにやってくる。そこで、ボランティアをしたいと相談すると、その時募集中だったセンターの事業のボランティアを始めることになった。本人は、ボランティアであればなんでもよかったと語っていた。このボランティアについては、嫌だったこととして「なんか人が足りなくて、すごいいっぱい記事を書かされる」と話しており、大変だったと語っている。その後、No.49 は、大学卒業後、別のセンターで再び同様のボラン







ティアに関わるようになる。この理由は、その別のセンターが職場に違いことと、親しいワーカーがそのセンターに異動したことがあるのだが、別のセンターで情報誌のボランティアに関わることは、「今はわりと大丈夫」と話している。また、センターに行く中で、いろいろな事業や講演、ワークショップにも積極的に参加するようになっていたと語られた。

No.53 もボランティアへの参加がセンター利用の最初であった。その内容については、「お願いされたお家にあの、あらかじめこう用意して頂いたプレゼントを持ってサンタとかの格好をして行く、みたいな、なんか子どもたちを喜ばそう、みたいなやつプロジェクトがなんかあって」と話し、そこに友達三人と一緒に参加していた。その思い出としては、「高校生なので、夜にこう、コスプレして出歩くっていう（笑）、このエキサイティングを非常に楽しんでましたね」と語っている。そして、No.53 もまた、センターに入り浸り、クッキングなどの単発の事業やボランティアに参加していたと話している。

一方ボランティアを断ったエピソードもあった。No.1 は、ボランティアや事業への参加を誘われても、「嫌や、みたいな。めんどくさい、みたいな」「なんかそんなんするぐらいやったら、友達ん家行ってゲームするわ、みたいな」思いがあり、参加することはなかった。

また、No.78 は、ロビーでボランティアと関わりがあったと話す。餅つきにも参加したというが、これはワーカーの無茶ぶりと、ただ餅が食べたかったからだと話し、積極的な関わりがあったわけではなかったが、受動的にボランティアとの関わりがあったことがうかがえた。それについて No.78 は、「なんかやっぱり、人それぞれいて、喋ってて、あーこういう人もいるんやーっていうのを学ばせてもらったんで」と話していた<sup>13</sup>。

以上、本項ではボランティア参加の実態について整理していた。ボランティア参加では、自らリーダー的なポジションになることを通じて活動への関わりが変化していくプロセスや、その中での視野の広がりなどの学びがインタビューから見えてきている。言い換えればそのボランティア活動を先導する役割を担う中で、当初のボランティア活動の枠組みを超えた活動や関係への広がりがあったのではないだろうかと考えられる。その意味では、ボランティアに関する語りは、そのボランティア活動中での人間関係やポジションの変化、そして活動を運営していくことに関する語りが多いことが特徴であり、そのことから活動の中における若者たちの主体化のプロセスがうかがえた<sup>14</sup>。一方で、他の利用区分と異なり、ボランティアに参加しなかった、関わらなかったことに言及する語りもあり、それだけボランティア活動が若者たちに意識されていたことがうかがえる。

<sup>13</sup> センターでの他者との出会いについては、5 章もしくは 7 章も参照。

<sup>14</sup> このような、若者の変容に関しては、8 章も参照。







## 2節 利用区分にとどまらない利用の広がり

前節では、利用区分に即して調査対象者の利用の実態を整理していったが、インタビューではそれに納まらない利用の実態が見られた。そこで、本節ではそれらの点について整理していく。

### 2-1. 手伝うような関わり

利用する中で、ただの利用者ではなく、センターの職員の仕事を手伝ったり、また年下の面倒をみたりするなど先輩的な関わりへと変化している様子が見られた。

No.1 は、ボランティアには参加することはなかったが、職員の仕事の手伝いはしていたと話している。インタビューからは、電話をとったり、設備の貸し出しをしたりできると話している。そのことは、それができるぐらい事務所に出入りしていたことを表している。また、閉館時の駐車場のチェーン張りも自主的に行っていた。その理由として、閉館時間を過ぎても「ちょっと待ってちょっと待ってとか言って伸びとったのもあって、で、ありがとうございました、みたいな気持ちと、＜ワーカーが＞仕事してるし、手伝わなあかん、みたいな」気持ちで手伝っていたと話す。

また、No.46 も、利用した教室の掃除を自主的に行っていた。その思いとしては、「いつも使っているから、逆にそういうのはするみたいなのが普通かなって思ってたし」と話し、いつも使っているので、ある意味で当たり前の様な気持ちでやっていたようであった。

また、ロビーにおいて、年下の子と積極的に関わったり、またその様子を見たりしている語りも見られた。例えば、No.9 は、インタビューにおいて、「あんまり学校に行きたくない感じの子」と一緒に卓球などで遊んでいたと語っていた。また、No.22 は、自分より年下の子に対するワーカーの注意の仕方を見て、それではいけないのではないかと、自分の経験も踏まえてダメ出しをしていたと語っている。

以上の事例からは、ただ単なるセンターの利用ではなく、センターを利用している先輩として、またはセンターを使っている恩返しとして、職員の仕事を手伝ったり、他者と関わったりする様子がうかがえた。それは、若者のセンターの利用の実態が、単に利用するだけの受動的な利用にとどまらないことを意味しているのではないだろうか。

### 2-2. 活動の場の広がり

センターでの活動は、時にセンターの外に広がって展開されることが、インタビューでは語られている。

事業 E のリーダーをしていた No.23 は、中学校で「グローバルな人間になるためにはどうすればいいみたいな」授業で話に行く機会があったと話している。

また、No.28 は、ボランティアの活動の一環としてセンターの外で集まってご飯食べたり準備をしたりしていたと話す。そして、ボランティアの仲間の中には、今でも年賀状のやり取りをする人もいるということであった。そして、美術系の大学だった No.28 は、一度友人と 2 人で展覧会をした時に、ワーカーが見に来てくれたのがうれしかったと語る。それは「ボランティア以外のことでも見てもらえた」





のがうれしかったのだという。さらに、No.28 は、ボランティアの人づてに関係が広がり、他大学の学生団体のイベントのステージに立ったこともあったと話し、活動の広がりがあったことが語られている。

ダンス事業に参加していた No.49 は、ダンスの事業が終わってからも、一緒にやったメンバーの公演を見に行ったりとか、ワークショップの講師の人の公演をみんなで見に行ったりしたと言い、終了後も細く長い付き合いをしていることがうかがえた。

他に、No.53 は、一度 Z のサークルが解散したのちに、最初の、メンバーも残っているものの、形態もメンバーも変わった「ママさんコーラスの様な状態」で「昔の面影はそんなにない状態」で一度解散したサークルが復活したという。そして、その活動で、それまで利用していたのとは異なる他のセンターをたまに利用していると語られている。

なお、No.78 は、ジムを利用する中で同じ趣味を通じて仲良くなった友達と今でも関係がある様子が語られた<sup>15</sup>。

このことは、センターでの活動が、次第に活動の場がセンターの外に広がっていることを表している。また、センターで形成された関係性が、場合によってはセンターの外でも維持されている様子も語られており、それはセンターでの活動や関係性が、利用の中で次第に拡張していることを意味するのではないだろうか<sup>16</sup>。

### 2-3. さりげなく支えられる

インタビューからは、センターを利用する中で、若者がワーカーに対して悩みを打ち明けたり、悩みを吐き出したりなどの話をする様子が語られている。それは、若者たちにとってワーカーやセンターが、他の場ではできない話や愚痴、相談ができる場となっていたことを示している。

例えば、No.28 は、ワーカーに顔を覚えてもらえるところから、顔見知りになり、相談できるようになっていたという。相談していたこととしては、就職や学業の相談、人生相談や悩み相談、ボランティアの相談もしていた。そして、相談する内容はワーカーによって変えていた。これについて No.28 はインタビューで以下のように語っている。

センターがあったから頑張れた所があると思うんですよ。…（略）…学校で悩んでもセンターに行ったら話聞いてもらったりとか、こんな事しましたっていうの見てもらって、励ましてもらったりとか、いいねって言ってもらえるだけで、（間）なんか救いになったっていうところもあったり。

このことから、センターが No.28 にとって、学生時代の支えになる場であったことがうかがえる。また、No.1 は、4 世代が同居しており、しかもその中の関係に不和がある中で、家の中の関係にめんど

<sup>15</sup> 以上の事例の様な、センターを利用した後も活動が広がっていく点については 4 章を参照。

<sup>16</sup> このセンターの中での関係性の広がりについては、7 章でも論じる。





くささを感じていた。そしてワーカーに、「で、めんどくさいし、家帰りたくないな、みたいな話はしたことがありますね。たぶん。たぶんそんな話ちゃうかな」というようにインタビューでは語っている。しかし、No.1 はその話を特定のワーカーにしか話していなかった。それは、一年間関わって、「こういう人なんやなってのが、たぶんわかってたからこそ、言えたのかな、みたいな」理由であったという。このような、家庭の状況に踏み込んだ悩みも、さりげなく吐き出せる様な関係性が築かれていた。

他の場所では言えないことを相談することもある。No.34 は、文化祭で女子と揉めた時に、職員にその話をすると、『向こうもこういう気持ちやったんじゃないか』とか、『こういう考えやったんじゃないのか』って言われました」と言い、違う視点からアドバイスをもらえたと話している。また No.34 は、ワーカーに対してだけでなく、クラスのことや受験について仲間内で相談していたというが、これは学校では無い場所であったからこそ、話すことができたと言える。同様に、No.22 は、仕事の愚痴を言える場であったと言う。それは、働いていない友達に言ってもなんか違うとなると言い、「でもここは、仕事のこともできるし、愚痴も言えるし、やっぱり職場の人でも愚痴言える人はいるけど、そんな言ったら広まる、って言うのもわかってるから抑えてるみたいな」と、職場と違うからこそここで愚痴を言えたという。

また、現在子どもに関わる仕事をしている No.31 は、仕事についてから、子ども関係であれば「違うアイデアとか貰えるかな、っていうのは思ってたんで、行きました」といい、「仕事の相談もしたら、そういうの…（略）…ズレた話じゃない、アドバイスだったり貰えるだろうな、って思っていました」というように、同業者の支援の場にもなっていたことがうかがえる。

以上の事例から、ユースワーカーやセンターという、普段関わる大人や場とは違うからこそ話せる愚痴や相談を若者たちがしていたことがうかがえる。それは、センターでの利用の中で、若者がユースワーカーやセンターという場で支えられていることがうかがえた。また、No.9 がインタビューで『相談員に相談しに行く』っていうのは、あんまりみんな、抵抗があることやと思うけども、そういう相談したいことであっても、ユースワーカーなら聞きやすい、っていうのはあると思う。単に雑談しにいく感じで行けるし。そういう意味で…さっき言ったみたいに当てはまらん、でいいと思う。なんかね、そう、友達感覚やけど、友達よりもしっかり聞いてもらえる人、みたいな」と話すように、この支えられている感覚は、相談員に相談する様なものではなく、友達感覚の延長とも言えるようなさりげなく緩やかなものであるのではないかと考えられる<sup>17</sup>。

### 3節 まとめ

本節では、今回の調査対象者の利用の実態を整理した。今回のインタビューで語られたエピソードはそれぞれ個別的、個性的であったが、利用区分に照らし合わせるとそれぞれの語りに特徴があった。

ロビー利用については、特に「入り浸る」という言葉に表されるような、明確な目的意識が無くても、

<sup>17</sup> ユースワーカーと若者の関係については6章で論じる。





気軽に来れ、自由に利用していたことがうかがえる。また、施設利用の場合は、ある程度明確に目的意識をもって利用しており、またそれまでに形成されていた友達などの関係性の中で利用していたことがうかがえている。一方で、ロビー利用、施設利用共に、表向きの利用目的とは異なり、利用の実態は自由にセンターを利用していたことがうかがえている。そしてそれは、活動の広がり新たな関係性の構築を生み出していた。事業利用については、参加を通じて事業に入り込み、積極的に関わっていくプロセスが語られ、その中での若者自身の変化や学び、そして価値観の形成が語られていた。一方で、ボランティア利用については、活動の中での役割の変化やその中での関わり方の変化に対する語りが多く、活動の枠組みを超えて活動を展開していく若者もいた。これらの利用からは、参加する中で主体的に関わるようになっていくプロセスがあることが見えてきている。

この四つの主な利用形態での区分は、それぞれセンターを利用し始める理由や入り口における区分だが、実際の若者たちはセンターの利用方法に縛られずに自由に利用しており、また利用をする中で当初とは異なる利用をするようになることも明らかになっている（この点について、詳しくは次章を参照）。

そして、利用をするなかで職員の仕事を手伝うようになっていたり、利用の実態がセンターの外に広がったりなど、利用区分に当てはまらないような実態の広がりもあった。また、対象者が利用の中で、さりげなく支えられている様子も語られている。

さて、本章では、若者がセンターをどのように利用をしていたのかについて、インタビューから整理していった。その利用についての語りで共通して見られたのは、センターを自由に利用していたという点であった。この点は、言い換えれば若者の今のニーズに基づいてセンターを利用しているということの意味しているのではないだろうか。もしくは、センターを利用し続けるなかで、新たな、もしくは潜在化されたニーズが表出し、それに基づいて主体的に利用するようになっていったのではないかと考えられるだろう。そして、そのような利用は、多様な利用方法の中で可能になっており、そのなかでの若者の主体的な利用を通じて、若者たちは活動が広がり、新しい関係が構築されるような素地となっていたのであると考えられる。

以上が、本調査で明らかになった若者の利用の実態である。本章で見えてきた若者の利用の実態を踏まえて、以降の章で若者の成長におけるユースワークの価値について、各章の視点で分析を行っていく。なお、冒頭に述べた通り本報告書の中で同様の事例を重複して取り扱う場合もあるが、本章で見えてきた若者の利用の様子をイメージしながら、各章での視点で見えてきた分析を読み進めていただければと思う。







## 4章 ユースワークとどのように出会い、離れていくのか

原 未来（滋賀県立大学）

本章では、若者たちの青少年活動センター（1章参照。以下、センター）の利用について、時間軸に焦点化した検討をおこなう。若者はどのようにセンターを利用しはじめ、その後利用はどのように維持・拡大され、また減退していくのか。その経過を扱いながら、センターやユースワークのどのような特徴が、その時々若者の利用に影響を与え、また意味ある経験を生成することにつながっているのか明らかにする。ただし、現段階では対象者インタビューに基づく素描的要素が強いことを断っておく。

### 1節 利用開始にみられる特徴

まず、センターにアクセスする際の情報源や動機について概括し、その特徴を明らかにする。

#### 1-1. どのようにセンターにアクセスするのか

もっとも多かったのは、友達・きょうだい・知り合いなどの「人づて」によってセンターの存在を知るケースである。なかでも友達から情報を得たというケースが多く見られた。特定の親しかった友達に誘われたというケースもあれば、クラスメイトの誰かが知っていたというケースもある。

また、センターによっては、地域全体で存在が認知されているような場合もあった。たとえば、No.22は「中学イコールセンターみたいな」と語っており、きょうだいや先輩などからセンターの存在が受け継がれている様子がうかがえた。このような表現は、とりわけ学校と近い立地条件にあるセンターを利用していた若者から聞かれた。

他方、インターネットで情報収集をおこなったケースもあった。たとえば、No.31は、「子どもと関わるボランティアがしたいなっていうイメージで、たぶんネットとかで探して」センターの存在を知ったという。また、No.9は、インターネットで「京都 ジム 安い」と検索したところ、「yahoo! 知恵袋<sup>18</sup>で引っかかっ」たと話している。インターネットの情報に基づいた初回利用・初回参加は、施設目的の利用者やボランティア希望の学生に特徴的に見られた。

#### 1-2. アクセスのしやすさを担保するもの

若者たちがセンターの存在を知っても、実際にそこに足を運ぶとは限らない。初めての場所に敷居の高さを感じたり、敬遠したりする若者もいるだろう。そのなかで、対象者たちの初回参加が何によって支えられていたのかについて見てみたい。

<sup>18</sup> Yahoo! JAPAN が運営する、電子掲示板上で参加者同士が知識・情報・知恵などを教え合うサービスのこと。







### (1) 若者自身の〈戦略〉

第一に、インタビュー対象者の多くは、誰かと一緒に来所することで初回利用のハードルを下げていた。

〈最初行きづらいというのは〉ちょっとあったけど、でも、なんか、雰囲気的に、そんなめっちゃく行きづらいというわけではなかった>、なんか、「わー」なって、他の周り<の友達>もいたから<大丈夫だった>。知らん人とかもいたけど、騒いでたり、そうしたらあ、<この場所>いいやんみたいな (No.22、補足は引用者による)。

このように、「人づて」でセンターの存在を知った場合、多くの若者が、初回は情報源となった友達・きょうだいと一緒に来所していた。逆に、センターに慣れてくると、一人でも行こうと思うようになったという若者も少なくない。たとえば、No.78 は中学生の時に同級生と共に利用し、最初の頃は「ほとんど友達といた」というが、高校生からは一人で利用していたと話している。また、No.28 は、ボランティア参加に際して、1 年目は友達と共に、2 年目は一人で参加している。そのことについて、「<1 年目に誘ってくれた友達は>多分自分 1 人で行くのが心細くて<私を>誘ってくれたんだと思うんですよね。だからもう、自分がその、<センターに>慣れてて、また行きたいって思ったんで、<2 年目のボランティアは>友達関係なしに<自分一人で>ちょっと行こうって思ったんです」と語っていた。

### (2) ユースワーカーの対応・センターの雰囲気

他方、ユースワーカーの対応やセンターの雰囲気によって、初回利用のハードルが緩和されたと感じているケースもあった。とりわけ、ボランティア目的で来所した大学生からは、ユースワーカーの対応が「優しい」ことに安心感を抱いたという話が複数出てきた。たとえば、No.31 は、初めにメールのやりとりをしていたワーカーが「めちゃ親切にしてくれたので、初めてでも、緊張しつつも活動に打ち解けるというか、できた」と話している。No.31 のように初回利用時に一人で来所している（あるいは、その後一人で来所することが前提となっている<sup>19)</sup> ケースでは、見知らぬ場でまずは頼れる人として、ユースワーカーの存在が重要となる可能性が高い。そのため、ワーカーの対応によってアクセスのしやすさが左右されやすいと考えられる（6 章も参照）。

また、センターの雰囲気がよかったということを挙げた若者もいた。No.22 は、初めて来たときから「なんか、落ち着くなあみたいな」という印象を抱いたという。No.49 も、初来所の際に「いい空間やなと思った」と話し、「広いし、なんか居心地がいいなー」「ほわーっと、なんか入りやすいな」と感じ

<sup>19)</sup> たとえば、No.49 は、初回は姉と共に来所し職員との橋渡しをしてもらっているが、その後の利用は姉と共に過ごさなかった。そのため、一人で来所しているケースと同じように、初回の中からユースワーカーの対応のよさが印象に残っていた。





たという。No.49はその居心地のよさはユースワーカーの「気軽にしゃべりかけられる」ような雰囲気に関係していると感じていた。ユースワーカーが「楽しそう」に見え、「いつでもどうぞー、みたいな雰囲気があるなと」思ったと話している。以上からは、センターの雰囲気や、それを作り出しているワーカーの存在が、若者の初回利用時の安心感を担保していると考えられる。

### (3) プログラム・参加の形態

また、参加形態によって初回参加のハードルが下がったと話した若者もいた。No.28は友達に誘われボランティアに参加しているが、最初は「説明会にひとまず行ってみました」と話している。即日参加や事前申し込みを要するのではない、説明会という形態が、「ひとまず」行ってみるという行動を後押ししている。また、彼女の参加したボランティアは冬季限定であった。彼女が「長期じゃなくて、クリスマスまでの期間っていうのも入りやすい」と話しているように、〈ユースワーク〉が提示する枠組みが、初期の参入を下支えする役割を負っていることがうかがえる。

### (4) 情報の重なり

複数の情報源をもっていることも、初回利用を後押しすることにつながりうる。たとえば、No.46はセンターを利用するようになる前から、地下鉄の案内でセンターの名前を聞いたことがあったという。

＜センターの案内が＞地下鉄であるじゃないですか、放送で。…（略）…で、＜車内放送でセンターの名前は＞なんか聞いたことあって、＜センターの＞中に入ったことなくて。で、＜センターに初めて＞行ったら、ああこんなところあるんやみたいな。雰囲気とか普通に、机もあるし何かいろいろあるし、みたいな（No.46）。

どこかでセンターの名前を聞いた覚えがあったということが、予備校の知り合いに誘われたときに一緒にセンターに行ってみるという行動を後押ししたようにも考えられる。また、彼の場合は、その情報が地下鉄という公共交通機関において発信されたものだったことも信頼性を高める結果につながったかもしれない。

### (5) 公共施設という感覚

最後に、公共施設であるという感覚について触れておきたい。センターの最初の印象として、複数の若者から「よくある市営の施設」（No.9）といったようなイメージが語られた。No.9は「市が運営してる体育館とか、市が運営してるそういう施設と、設備的にも、建物の雰囲気、事務所の雰囲気くも似ているところ」とかから、最初はそういった印象を持ったという。こうした公共施設であるという感覚は、場所への信頼感を高める可能性がある一方で、近寄りがたい印象を与える場合もある。たとえば、No.49は「何とかセンターって堅苦しいイメージとか、閉鎖的なイメージが私はあったんですけど」と





話している。また、No.53 は青年の家からセンターに名称が変わったことについて、次のように話していた。

やっぱりこう、なんかこう、息かかってそうやもん、政府のなんか、活動センターとか、青少年活動センターとか。…（略）…なんかこう、行きづらいわ（No.53）。

ここからは、公共施設であるという感覚が、若者にとって初回アクセスをためらわせる要因となる可能性があることもうかがえる。

### 1-3. 当初のセンター利用の動機

では、若者たちは、何を期待し、センターを利用しはじめるのだろうか。以下では、初発の動機の所在について、明らかにしたい。

#### （1）ある特定のことをやりたい

まず、ある特定のことをやるためにセンターを利用し始めたという若者たちが一定数いた。かれらは、初回のアクセス時に比較的明確な目的をもって来所している。たとえば、No.23 や No.34 は合唱コンクールや文化祭などの学校行事の事前練習のために、部屋や体育館を借りる目的で来所している。また、インターネットで安いジムを検索してセンターの存在を知った No.9 は、「最初僕くが>求めていたのは、純粋に心身鍛錬のみでしたね」と話しており、「体を鍛えたいな」という目的を達成するための利用であった。ジム目的で利用し始めた No.78 も同様である。さらに、No.46 のように「勉強スペース」として利用し始めるケースもあった。以上のように、初回から明確な目的をもってセンターに来る場合、施設利用と結びつけられて語られることが多い。

他方、ボランティア参加者のなかにも、特定のボランティアをおこなうためにセンターを利用し始めたというケースがある。たとえば、No.31 は「子どもとかかわって遊ぶ時間が一緒に持てるっていうのが私は魅力的だったので、それで<センターに>来ました」と話している。ただし、ボランティア参加者の場合、それほど目的が明確でないまま来所しているケースも少なくない。そのことについて、次で補足したい。

#### （2）何かしてみたい

ボランティア参加者は、一見、特定のことに對して明確な目的意識をもって利用を始めているように見えるが、対象者たちへのインタビューからは、より漠然とした欲求も浮かび上がってきた。たとえば、大学1年生の時に子どもにかかわるボランティアに参加した No.28 は次のように話している。

学校以外のこと、何かしてみたいなと思っていて。で、ちょっと引がかかったっていうか、気になる





なと思って。そのく友達に誘われたボランティアの活動が (No.28)。

また、No.49 も同様に、「大学生になって何か新しいことしたいな」、大学で専攻している領域だけでなく「ほかのことにも影響されたいっていうのがあった」と話している。「ボランティアはしたかったけどやりたいボランティアはなかった」という彼女は、初回来所時にユースワーカーから聞いたボランティアに、「あーやってみたいですよって言って」参加していくこととなった。

以上のように、No.28 や No.49 はもともとそれほど明確な目的をもってセンターに来所したわけではなく、より漠然とした何かしてみたいという欲求をもって来所している。また、彼女らに共通するのは、交友関係を広げたいという意識である。No.28 には、「学生さんが主に集まってくるんだろうなって思って、学外に友達ができるかな」という期待感があった。また、No.49 も「もっといろんなこと知りたいし、いろんな人と関わりたいけどそういうところがく高校時代はくなかった」と話している。二人に見られるような、「何かしてみたい」「いろんな人と関わりたい」という欲求は、学校と家庭（あるいは塾）に閉じ込められがちな高校生活から、より自由度の増す大学生活への転換のなかで、象徴的に生じているようにも捉えられる。

### （３）何か楽しいことができるのではないかと期待

前項では大学生ボランティアに特徴的に見られるものとして「何かしてみたい」という漠然とした欲求を挙げたが、類似したものは大学生ボランティア以外にももちろんみられる。中学生からセンターを利用し始めた No.22 は、「遊び場とかめっちゃあるみたいだな、聞いてたから」「まず行ってみて」と初回利用を振り返っている。同じく、No.53 は高校生のときに知り合いからボランティアを募集しているらしいと聞き、「じゃあ、行きたるわー、みたいな感じ」でセンターに初めて行ったという。「ノリノリで、暇やったんで」という彼女からは、何か楽しいことができるのではないかと期待感を読み取れる。彼女の場合は、実際にボランティアに参加するなかで「夜にこう、コスプレして出歩くんって（笑）、エキサイティング」を楽しんでいたようだ。

また、以上に見てきた「何かしてみたい」という漠然とした欲求や、楽しいことができるのではないかと期待感、学生に限ったものではなく、社会人である No.9 から聞かれた。

転職をして、で、まったく見知らぬ地に来て、特に当時、仕事以外何もすることがない状況で、暇だなあと、まずそっからで。で、とりあえず体を鍛えたいな（笑）と思ったのがくセンターを利用するくきっかけですね…（略）…

もともと俺、最初引っ越したときに、休みの日とか仕事終わったあと暇なとき、ひたすらゲームしてた（笑）。ずっとゲームしてた。…（略）…はっ、一日が今日、パソコンの前で終わってしまった…！っていうの、なんぼでもあったんですよ俺（笑）。で、やっぱそのとき思う、終わってしまった、やってしまったと、なんて無駄な一日を過ごしたんだっていう風に思うことが多かったんで（No.9）。







初回利用の目的は、彼が「最初僕くが>求めていたのは、純粋に心身鍛錬のみでしたね」と話しているように明確で限定的であるが、その目的の背景には、充実した私生活を送りたい・そのために何かしたいという欲求があるように思われる。つまり、明確な目的をもって利用し始めたと思われる彼の場合もまた、その背景には漠然とした欲求や期待感があったとも考えられるのである。

#### （４）行き場を求めて

最後に、行き場を失うなかでセンター利用に至っているケースについて触れたい。これは、小中高生時代に初めてセンターを利用した対象者に多く聞かれた。

No.1 は初回利用時の状況を「センターに逃げてきた」と表現している。公園が雨や他の人の使用で使えないなど、「遊ぶ場所がなかった」という。「みんなでこうなんかするっていう場所があまりなかった」結果、センターを利用するに至っている。同様のことは、No.22 からも聞かれた。「遊ぶ場所がなくて、中学って。基本。外か、もう、唯一のここ<センター>みたいな」といい、センターは「唯一のなんか、別に騒げる場所やし、集まる場所」と話している。No.22 の場合、「高校はもうバイトもできるから、行きたい場所にも行けるけど」、中学はお金もないため、センターの存在価値は大きかったようである。

他方、No.23 は高校生もまた遊ぶ場所がないと話している。

高校生がどこで遊ぶかって。遊ぶ場所無いんですよとくに。部活入るか、部活入っている奴は一日本当に部活やし、で、えー、部活入ってへん奴は帰って、当時プレステーション3があって、ネットで通話しながらゲームができる時代だったんで、別に特に集まって遊ぶ必要がないし、逆に集まって遊ぶ場所もないんですよ。河原<sup>20</sup>行って何をするわけでもないし、そーーーんな時に、…（略）…センターやったら、あの確実に場所はあるし、空いていたら部屋とれるし、で、部屋とったら、別に禁止事項以外はなんでもできるし（No.23）。

以上のように、小学生から高校生年代において「遊ぶ場所」「集まる場所」がないことが、若者たちにとっては切実な問題であることがうかがえる。行動範囲が限られるこのような年代において、居られる場所・使える場所としてセンターが存在していることの重要性が垣間見える。なお、かれらの語りに見られるように、行動範囲や金銭管理の幅が広がっていく年代には、通学路やバイト経験の有無をはじめとする地域差・階層差が影響しているだろうことを付記しておく<sup>21</sup>。

<sup>20</sup> 場所としての河原ではなく、「河原町」（市内中心部の繁華街）を指して話した可能性もある。

<sup>21</sup> たとえば、地元志向とされる「マイルドヤンキー」（原田 2014）も、（全体の議論の適否はさておき）行動範囲の階層性を示すもののひとつとして考えられるだろう。日常行動に限らず、旅行などの遠方への行動が、社会階層や世帯収入レベル、あるいは学歴と関連していることを明らかにした研究もある（林

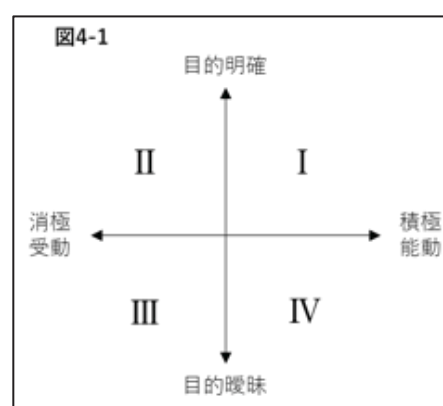




#### 1-4. 小括

以上、若者の利用のきっかけに関する事柄を見てきた。かれらは、「人づて」やインターネット情報によってセンターの存在を知り、その後、誰かと一緒に来所することによって、初回利用のハードルを下げていた。また、ユースワーカーのかかわり方、場の雰囲気、参加形態の工夫などによって、センター側からも敷居が低められる働きかけがなされており、それらが相乗的に作用することで、初回アクセスのしやすさにつながっていると考えられた。

また、初回利用時の動機については、目的が比較的明確な者から曖昧なものまで多岐にわたっていた。それらをあえて単純化すると図 4-1 のように分類できる。まず、利用目的が明確か曖昧かという Y 軸を見てみると、比較的利用の目的が明確な者は施設利用者に多く見られた。学校行事の準備・練習等で体育館や部屋を借りる場合や、ジム・学習スペースなどを利用する場合である。ただし、かれらのなかには自らの意思で積極的にその目的に向かって初回利用に至った若者もいれば（図 4-1 の



I)、クラスメイトに連れてこられた場合のように、利用目的は明確であるものの比較的受動的・消極的な利用だった場合もありうる（図 4-1 の II）。

他方、インタビューをおこなうことで見えてきたのは、実はそれほど目的が明確ではないなかで利用を開始している若者たちの存在である。とりわけ、ボランティアやプログラムへの参加は、それ自体をねらって来所するようにも思えるが、それよりも、「何かしてみたい」といった漠然とした欲求の方が強い対象者も少なくなかった。つまり、積極的・能動的ではあるものの何をしたいかは明確ではない状態でセンターにたどり着いている若者が一定数いることが明らかとなった（図 4-1 の IV）。また、「暇つぶし」と思ってセンターに足を踏み入れたような場合や、遊び場を失って「センターに逃げてきた」場合など、時間を持て余していたり、居られる場所がなかったりするような状態で“流れ着いた”若者たちもいた（図 4-1 の III）。

多くの場合、特定の場所を利用・参加する際には、何らかの目的性やそこを利用する意思を求められることが多い。そうしたなかで、センターは、目的が曖昧である若者たちや、さほど積極的に何かをしようと思っているわけではない若者たちも利用・参加しはじめることのできる場所となっている。漠然とした欲求・期待や、「暇つぶし」という表現に代表されるような何か充実感を得たいという潜在的な欲求が、包摂されうる場として、センターは感受されているといえるだろう。ユースワークが、若者の自

2011)。

原田曜平 (2014) 『ヤンキー経済—消費の主役・新保守層の正体』幻冬舎新書

林幸史 (2011) 「観光行動の促進要因と阻害要因—JGSS-2010 のデータを用いて—」日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集 11

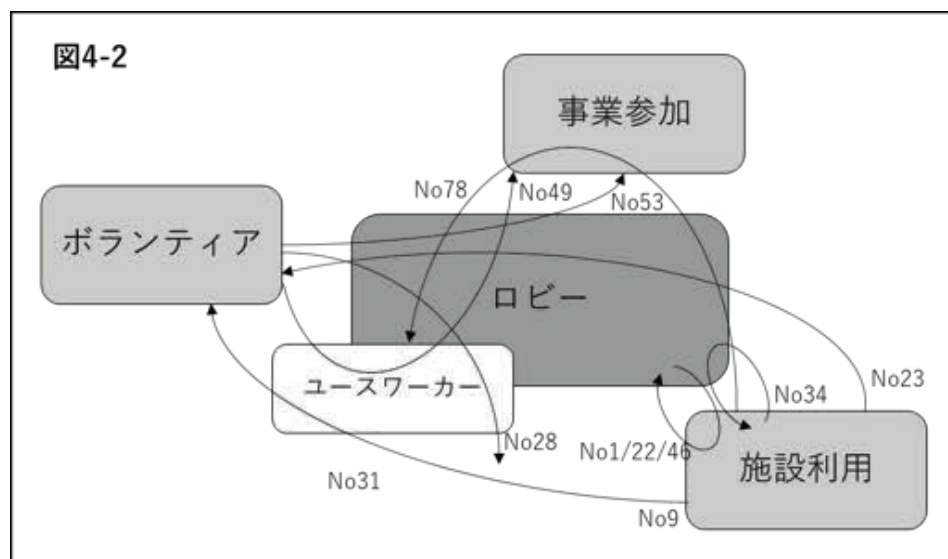
己決定・自己選択を伸ばし、かれらの主体化を支えることに価値をおくものであることを踏まえれば、  
かかわりはじめる入口において、曖昧性・多様性が確保されていることは、より幅広い若者とのかかわ  
りを展開していく上で重要な意味をもつといえる。

他方で、目的や動機が必ずしも明確でない若者たちがセンターに来所するためには、やはり一緒に来  
所する誰かの存在が重要な意味をもつといわざるを得ない。一人で、何の目的や能動的動機も持たずに  
来所するのは実際には難しいだろう。今回の対象者においても、一人で初回来所したケースは目的が非  
常に明確なケースであったことはその一端を表しているといえる。

## 2節 利用の広がりを支えるもの

次に、初回利用・参加から、その後継続的にセンターにかかわるなかで、どのように利用が広がるの  
か（また、広がらないのか）について見ていきたい。なお、利用・参加の広がりといった際には、同じ  
プログラムに参加しているなかで他者との関係性が広がっていく、参加のスタンスが変わっていくなど、  
多様なことを含みうる。それらの一部は前章で見たとおりだが、ここでは参加形態に限定して、初回利  
用からの時系列上の変化を考察することとする。

対象者らには、初回利用した際の利用形態から、多様な利用・参加形態へと利用が拡大している様子  
が多く見られた。図 4-2 は、初回の利用形態・目的からの時間的变化を、矢印にて模式的に表したもの  
である。以下では、かれらの利用形態の広がりに関する特徴について、対象者らの経緯から検討したい。



### 2-1. ロビーを経由して広がる利用

図 4-2 における特徴の一つとして、様々な利用形態からロビーを経由して新しい利用・参加のあり方  
へとつながっている点を挙げられる。もっとも象徴的なのは、No.23 である。彼は中学生の時に、学校  
行事の練習のためにセンターを初めて利用したケースである（施設利用）。その後、高校生の際には、「集  
まって遊ぶ場所もない」ということから、センターに「入り浸っている」ようになった。高校の友達と



「たまり場」のように利用していた No.23 だったが、ある日ロビーで友達と対戦型のゲームをしていたら、中国人留学生に声をかけられ、対戦をすることとなった。その後ゲームを通じて仲良くなった留学生に、留学生と日本人が交流する企画に誘われたことが、後々大学 AO 入試に向けて何かをしようと思った際に思い出ボランティアに参加していくきっかけとなったという。

このように、No.23 の場合センターのロビーに入り浸っていたことによって、思わぬ人との出会い・交流が生まれ、その後新たな参加へと至っている。これは偶然の産物というよりは、センターのロビーがもつ大きな特徴とみるべきだろう。そのことについて次のようなやりとりがある。

調査者: ある意味知らへん人とゲームすることに対してはくどう思ったん？

No.23: あーそれに関しては、僕ら結構オープンで。知らん奴でも WELCOME だったんですよ。

調査者: それはなんで？

No.23: なんで？そういうもん。

調査者: 街の中でもそうしていた？

No.23: センターの中オンリーで。センターの中でなら話しても問題はないじゃないですけど、知らない人同士が集まる場で、場ってというような感覚だったんで。

つまり、センターという場の特性として No.23 に認識されている「知らない人同士が集まる場」、あるいは「話しても問題はない」場という感覚が、初対面の留学生との交流を可能にし、またそこから新たな活動へ参加していく過程を結果的に生み出したのである。これについては、センターがどのような場であるのかという詳細な検討を別途要するが（5章も参照）、少なくともセンターのロビーが特殊かつ重要な役割を果たしていたことは確認できるだろう。

また、以上に見たようなロビーでの利用者同士の交流から利用・参加形態が拡大していく以外に、ロビーが“つなぎ”のような役割を果たしているケースもあった。No.53 は、高校生でボランティアに参加して以降、ボランティアが終了した後も継続してセンターを訪れていた。「何をするでもないんですけど」、ロビーに「入り浸ってた」という。ある日、ユースワーカーに「最近の若者って何がしたいん？」と聞かれ、当時流行っていた「Z<歌の種類>やってください！」と言ったことで、その後事業 Z に参加していくこととなった。彼女の場合、ボランティアに参加するという目的が終了した後も、特に何をするわけでもなくロビーに「入り浸ってた」時間が、その後ユースワーカーからの声掛けを経て、新しい事業に参加していく際の“つなぎ”の期間となっている。ここには、前節で述べたような、明確な目的を持たずとも利用できるセンターの存在意義とともに、そのような状況を経て、(再び) 何かに取り組んでいくことを支える側面がロビーにあることがうかがえる。「たぶん昔からなんか楽しいこと好きやったんじゃないですかね」と彼女が言うように、彼女には何か新しいこと・楽しいことをしたいという欲求があり、何をするでもなくロビーに入り浸っていた時間は、その潜在的な欲求を表出・具体化させていく熟成期間、あるいはその機会を待つ時間だったとも捉えられるのである。以上からは、「入り浸ってた」と





表現されるロビー利用が、新たな利用や参加につながっていく重要な位置づけを持っていることがうかがえる。

また、同じように「入り浸ってた」ケースとして、No.28 のことも付記しておこう<sup>22</sup>。大学生の時に初めてボランティアに参加した No.28 は、ボランティア終了後も「センターにちょっと入り浸ってたって感じ」だったという。彼女にとってセンターは「学校以外の学生時代の自分の居場所みたいな感じ」で、「くじけそうになった時に駆け込み寺みたいなところがあります」と話している。ボランティア終了後も、ボランティアで知り合った人たちが参加している他の活動のミーティングに参加してみたり、声をかけられイベントを手伝ったり、他の人に紹介されたりなど、「きっかけがわからない、知り合いは増え」ていった。「単発ではあったんですけど、ボランティアからの派生みたいな＜関係性の広がり＞はありましたね」と話している。彼女の場合、ボランティアへの参加を通じて得た関係が、その後「入り浸ってた」という継続的なロビー利用を背景に継続され、やがてセンター外の新しい活動へとつながる資源となっていったのである。

最後に、ロビーを経由した利用の広がりの中なかでも多く見られたものとして、ロビー利用と施設利用を行き来するケースに触れておきたい。たとえば、No.22 は長くロビーをメインに利用していたが、高校生の時には、学習スペースを利用するようになった。「テスト期間の時に、家でしても覚えられへんから、ここ静かな場所、やから」利用していたという。ロビーを継続的に利用していたことで、センターがもつさまざまな資源（施設）を知っていることが、何らかの必要性が生じたときにスムーズに利用を開始できることにつながっている。また、施設を目的に利用していた No.1 は、ロビーで過ごすこともあったと話している。

＜部屋などを＞借りようとしたけど、ああ無理やーみたいな。で、ロビーで職員の人らとしゃべったりとか（No.1）。

No.1 に限らず、施設利用者にとってロビーはその前後の時間を過ごす場になる可能性が高い。その際、ユースワーカーが自然と話に入ったりかかわったりすることで、ロビー利用と施設利用双方の行き来がおこなわれやすくなっていることがうかがえる。そして、ロビーで過ごす時間が、上述してきたような刺激や交流を若者たちに与えていく可能性を生み出していくのである（5章も参照）。

## 2-2. ユースワーカーの声かけによる広がり

対象者らの利用・参加形態の広がりに関しては、ユースワーカーの働きかけも欠かせない要素となっている。図 4-2 では、とりわけ明確にユースワーカーとの関係が利用形態の変化に影響を与えている場

<sup>22</sup> なお、複数の若者が使う「入り浸っていた」という表現（No.23、No.53、No.28）は、ロビーの存在意義とそれによる〈ユースワーク〉の価値を明らかにするにあたって重要であると思われる。先に示したように、曖昧性が担保された場であることが、このような“入り浸り”を可能にしていると考えられる。







合や、利用がユースワーカーに会うためといった目的に比較的限定されている場合にユースワーカーを経由する矢印として表現した<sup>23</sup>。

たとえば、No.49 は利用形態の拡大がユースワーカーの声かけによるものと明確に話している対象者の一人である。もともとボランティアを希望しセンターを利用するようになった彼女は、その後、あるユースワーカーに「やる？って言われて、じゃあやります、みたいな感じで」ダンス事業に参加していったという。

〇〇さん<ユースワーカー>がやるー？って言ってくれたので。でまあ、楽しそうだし身体動かすことも好きだし、いいかなと思ってやったんですけど (No.49)。

彼女の場合、積極的に表現系の事業そのものに参加したかったというよりは、信頼しているワーカーが「やるー？って言ってくれた」ということを根拠に、新たな事業参加へと至っている。もともと「大学生になって何か新しいことしたいなと思って」センターを訪れていたケースであるため、ボランティアから表現系事業へと広がっていくことも「何か新しいことしたいな」という欲求の充足になっていた可能性は高いだろう。そのように捉えれば、ボランティア参加時期に関係を築いてきたユースワーカーからの声掛けが、結果的に彼女のもともと持っていた欲求・期待に応えうる活動に彼女を後押ししたとも考えられる。

潜在的欲求に応えうる活動へユースワーカーが後押しするという意味では、No.9 も同様である。彼はジムを目的にセンターを利用し始めたケースである。トレーニングアドバイザーのボランティアと仲良くなり、その人を通じて、ユースワーカーや他のボランティアとも仲良くなっていったという。その後、ユースワーカーに「ボランティアやってみない？」と「なかば強引気味に (笑)」誘われたことがボランティア参加のきっかけとなる。「まあ…基本的に、誘われたら断らない主義なんで、特に用事がなければ…まあまあ時間ある限り行っただろか、ぐらいい気持ちで」始めたという。「声かけられなかったら、一生単なる利用者でしかなかったわけやし」と話しているように、ユースワーカーからの声掛けが大きかったと認識しているケースの一人であった<sup>24</sup>。ただし、一方で彼は次のようにも話している。

20 半ばくらいで引っ越してきて、京都なんも知らんし、地元の人とか地の人とか全然知らんし、でもせっかく、後こうね、40 年 50 年、60 年 70 年 80 年と<京都で>生きるかも知れんのやったら、

<sup>23</sup> 言うまでもなく、前節で見たロビーの機能自体も、ユースワーカーの場づくりを経て形成されているという点ではユースワーカーの働きかけと一部重なっているし、ワーカーとのやりとりがロビーでおこなわれていることから、前項との重複があることも付言しておく。

<sup>24</sup> 同じく、ジムの利用から表現系事業に参加するようになった No.78 も「センターがなかったら、ダンスもしてなかったですし」と話している。「スタッフさんがこういうのあるよみたいな、… (略) …紹介してくれてありがとうございますっていう気持ちで」と話しているように、彼もまたユースワーカーからの声掛けが重要であった一人である。







せっかくやったら地の人とか地のこと知りたいし、地の人と仲良くなっておきたいっていうふう思うけども、普通に会社員してたら、ね、職場の人以外で知り合いなんてなりえないですね。なんです、その全然、いやだからそのボランティアくを>やったんですってわけではなくて、たまたま、たまたまなんです。そういう、地域と関わるボランティアっていうのは、<そのボランティア>に入れてもらって、地の人とも仲良くなれたし、地元のイベントに呼んでもらったりとか、でかつ、この地域にはこんな人があってとか知ることができたりとかしたりして、それはあれです、なんかこう、僕が欲しかったものが、おのおの意図せずを得たっていうところがあって、それが良かったことかなと思います (No.9)。

「体を鍛えたいな」という明確な目的をもってジムの利用を開始した彼ではあるが、その背景に充実した私生活を送りたいといったような潜在的欲求があったのではないかということは、1-3 (3) で見たとおりである。さらに、その漠然とした欲求は、ボランティアへの参加を経て、地域のことを知り、地域の人たちとつながりたいという願いとその充足へと言語化されている。つまり、ユースワーカーに声をかけられなかったらそのまま表出・言語化されずにいた欲求は、ユースワーカーからの声掛けを経た新しい参加形態によって達成される機会を得たということになる。

なお、ユースワーカーへのヒアリングでは、ユースワーカーがそのような彼の潜在的欲求を事前にキャッチし、ボランティアに強く誘ったという経緯が読み取れる。

YWr (ユースワーカー)：一番最初くの No.9 の印象>は、正直自分の中は、多分そんなに印象がなくて、っていうのもあの、施設利用の、そのトレーニングルームへ来られる方、けっこう年代 20 代の半ばから後半の方もけっこうおられたので、その中の一人っていう感触ではあったんですけど。ただその話、こちらからの話に対する彼の反応っていうのは、良かったと思います。

調査者：良かったというのは？

YWr：良かった、その、反応がよくあった、反応があった、話に対してのなんていうんですかね、対応というか…聞き方とかも含めて、すごく積極的に聞いてもらったっていう印象があって、またそこくボランティア>に誘った原因もあると思うんですけど。

調査者：… (略) …そういうボランティアに関する話をよく聞いてくれたってことですか？

YWr：あ、えーっと、多分それを、ごめんなさい、そのへん詳しく記憶にないんですけど、それくボランティアの話>をするまでにいくつか雑談とかがベースにはあったと思います。

調査者：雑談とかの印象が…<良かった？>

YWr：印象もよかったですし、<ボランティアの話をした>その日の感じもよかったんでそこまで<事業の内容などを>話したっていうのはあります。

No.9 から「反応がよくあった」ということを、たとえば人とかかわりへの欲求などといったかた





ちで何らかキャッチしているからこそ、ユースワーカーはより参加・かかわりが拡大するようなボランティアへと「強引気味に」誘ったのだろう。ここからは、日常的なやり取りのなかから、若者の潜在的欲求を汲み取り、引き出し、表現するきっかけを与える役割をユースワーカーが果たすことによって、若者たちが新しい利用・参加形態へと至っていく様子が見えてくるのである。

### 2-3. 限定的な利用か？

ここまで初回利用からの利用・参加形態の拡大について見てきたが、すべての若者がセンターを利用しながら利用形態を拡大していくわけではない。今回のインタビュー対象者は長期にわたってセンターを利用していた者が多く、選定方法による偏りも含んでいるため、比較的使用が多岐にわたる者が多かった。しかし、センター利用者全体から見れば、単一の利用形態に留まったり、短期で利用を終えていたりする若者も多くいて当然だろう。また、利用形態が広がることのみが重要であるというわけでもない。そこで、最後に、利用形態の変化という観点から見れば利用が比較的固定的・限定的に見える対象者たちを取り上げたい<sup>25</sup>。

たとえば、周囲に遊び場がなく、小学生の時に「センターに逃げてきた」No.1 は、ロビーや貸部屋で過ごし、中高生になると部活の関係で施設も利用するようになった。他方で、それ以外の活動に参加することはなかった。

調査者：＜センターで＞事業とかやってるのは、知ってた？

No.1：あれでしょ、あの、ゴミ拾いとかでしょ。

調査者：あー、ボランティア？うん。

No.1：と、なんか、カフェみたいな。

調査者：うん。

No.1：ね、料理教室みたいなん、ありましたよね。＜ワーカーに対して話しかける＞

YWf：はい、やってました。

No.1：やってましたよね。めっちゃ誘われましたもん、おいでよ、みたいな。コーヒー、タダで飲めんでくって誘われたけど>、いやめんどくさい、みたいな。

調査者：あんまりそこは参加する気にはならなかったん。

No.1：ならなかったですね。それ以外の日には、コーヒーちょーだいや、みたいな。

…（略）…

No.1：なんか、それやったらこの日おいでよ、タダで飲めるで、とかくユースワーカーに言われる>。

いやそれはめんどくさい、みたいな。…（略）…たぶんその日はだってテニスコートとかで、借り

<sup>25</sup> あくまで利用の「形態」が、前項まで見てきた対象者よりも限定的に見えるという観点にすぎないことに留意したい。また、限定的と言いながらも、後に見るように多少の広がりを持っているのは、インタビュー対象者の選定によるところが大きいと考えられる。





なかったんです、行かへんから。

調査者：行った日に、何かあったら、うん。

No.1：テニスして、体動かして、喉渴いた、みたいな。でも自販機あるけどお金あるし、かかるし、でもコーヒー飲んでるし、みたいな。ちょっとちょうだいよ。

Ywr：で、なんかやったら、あげる、って<スワーカーが>言って、でもそのなんかには、<No.1は>乗らない（笑）。

No.1：なんかには乗らない。そうそう。

…（略）…

調査者：そうやって、<ユースワーカーに>交換条件を出されてたわけでしょう。（笑）

No.1：そうですね、なんか嫌でしたね。…（略）…なんかそんなんするぐらいやったら、友達ん家行ってゲームするわ、みたいな。

彼は、中高生になると施設利用がメインとなり、施設の利用に合わせてセンターに来所していた。そのため、それ以外のことには関心が向かず、新たに他の事業に参加したいというニーズもその当時はないことが以上のやり取りからはうかがえる。

ただし、施設利用目的である彼が、他章でもみるようにユースワーカーの存在の大きさについて語ったり、ロビーでの利用者同士の交流について語ったりしている様子からは、彼の利用を施設利用に「限定されていた」、あるいは施設利用から他の新たな利用・参加へと「広がらなかった」と見るべきではない。むしろ、施設利用目的にもかかわらず、ロビーを経由してワーカーや他の利用者との交流の機会を得るなど、その利用は意図せずに拡張していたと捉えるべきであろう。一般の市営体育館など、利用形態と目的が明確な施設であれば、施設利用に限定されていた可能性もある彼の利用は、センターという場だからこそ、それに留まらない部分を含みこんだものとなったと考えられるのである<sup>26</sup>。

#### 2-4. 小括

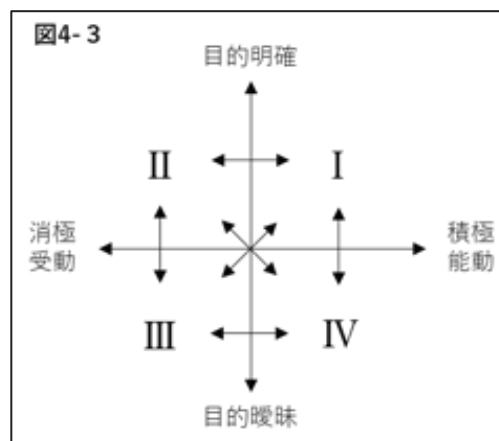
以上、初回利用がその後継続・発展していく経過についてみてきた。対象者たちの多くは、利用・参加形態の観点から見たとき、そのあり方を拡張させていた。そして、その背景にはユースワーカーのかかわりとともに、ロビーが大きな役割を果たしており、ロビーという中継地点を経て利用・参加を拡大していく様子が明らかとなった。以下では、本節のまとめとして、前節で示した動機の議論と重ねて、利用形態の発展について考えてみたい。

<sup>26</sup> 限定的な利用になっていることへのもどかしさを語ったケースがあったことも付記しておく。No.31はボランティアの活動に、時間的制約などから「がっかり」かかわりきれなかったことを、「しょうがない」ことだが「残念」だったと語っている。しかし、彼女は他方でセンターやワーカーへの強い信頼感を形成し、その後の資源としても活用している（5章参照）。その点では、「がっかり」かかわれなかったと感じている彼女もまた、「利用（を経て）の広がり」を経験している一人といえるかもしれない。





前節で、初回利用時の動機は目的の明確さや積極性の観点から見ると多岐にわたっていることを指摘した。しかし、それは初回利用時に限ったことではない。初回利用後も、若者たちの来所・利用動機は多様であり、また、一人の若者のなかでも、動機は四つの象限を行き来しながら利用・参加が継続されている（図 4-3）。たとえば、No.23 であれば、学校行事の練習という比較的明確な目的で初めて利用したのち（Y 軸上方）、高校生になると「たまり場」として特に明確な目的もなく入り浸るようになり（Y 軸下方、



第Ⅲ象限寄り）、そして AO 入試のためにボランティアに参加するようになると（第Ⅱ象限寄り）そこに居心地の良さを感じるようになりボランティア参加を継続していく（第Ⅰ象限寄り）といったような流れである。彼の場合も含めて、このような目的や動機が流動性を保ちながら利用できる要因として大きな役割を果たしているのが、ロビーである。複数の対象者らによって「入り浸ってた」と表現されるロビーの利用は、特に何をするわけでもなく目的も曖昧である。しかし、そのような利用の仕方・存在のあり方がロビーで保障されているからこそ、ほかの利用・参加形態への拡張可能性が開かれるのである。ただそこに居られるという過ごし方の〈自由度の高さ〉が、動機の持ち方の〈自由度の高さ〉を担保し、明確で積極的な動機をもたない若者たちの利用を継続させ、新しい何かに発展させていく契機を作り出しているのである。

### 3節 利用の減少と新しい試み

最後に、センターの利用が減退していく時期について見ていく。また、利用が終結に向かっていく一方で、継続していくものや新しい試みの萌芽についても、簡単に言及したい。

#### 3-1. 利用の減少の背景

利用が減少していった背景として、センターの体制や対象者自身の環境の変化といった外的要因と、本人の意識・ニーズの変化といった内的要因の両者が対象者からは語られた。

##### （1）センターの体制の変化

利用が終結するもっとも明確な理由は、参加していた事業の終了である。たとえば、No.53 は参加していた事業 Z がサークルとなることで小規模となり、また自分も半年ほど行かない時期があるなかで、サークル自体の解散へと至っている。

また、ユースワーカーの異動も利用の減少と結びついている。たとえば No.28 は、「＜大学＞卒業きっかけではある」とした上で、「よくお世話になってた職員さんもみんなセンターからいなくなってしまう」たことがセンターと疎遠になっている背景にあると話している。もし知っているユースワーカーが







センターにいれば、卒業後居住地が離れていても「何かのきっかけでお邪魔してたかもなってます」という。同じく No.53 も、スタッフが異動していなかったら、センターに「行ってたかもしれないし、もしかしたらまた何かする？とか<ユースワーカーが>言ってくれてたかも。やろうや、みたいな。もしくはこっちがこんなしたら、しょうや、あたしやりたいわ、とかいう話を<ユースワーカーに>したかもしれない」と話している。ユースワーカーの異動は、現場の活性化や多様性の促進、役割変化によるユースワーカー自身の成長などさまざまな機能をもっているが、とりわけユースワーカーとの関係性に高い比重が置かれている若者にとっては、利用の減少と直結する側面をもっていることも事実である<sup>27</sup>。

### （２）加齢に伴う制限

また、若者たちの加齢に伴い、以前まで利用できたものに制限がかかることで、利用が減退していくケースもある。No.78 はジムの利用から始まったケースだが、高校３年生まででジムを利用することはなくなったという。「やらしい話なんですけどお金がかかる」ことがその背景にはある。また、事業に参加していた No.53 は、「30 歳超えた瞬間にもう<センターから>撤退せなあかんのかな、みたいな、なんかこうピリピリ感」を感じていたと話している。

以上のような加齢に伴う利用・参加制限は、かれら自身の利用に限定すれば「制限」以外の何物でもない。しかし他方で、かれら以降に利用を始めるより若い世代の存在を踏まえれば、かれらが当初受けてきたように、かれらより下の世代もまた同じように恩恵を受けられるよう体制を整えることも不可欠なことである。ユースセンター・ユースサービスは「ユース」にかかわる存在として定義されるわけだが、経済的・社会的に不利な状況に置かれる「ユース」が長期化し、また様々な「生きづらさ」が拡大している昨今においては、この点は難しい問題を孕んでいるとも考えられる。

### （３）若者自身の環境の変化

利用の減退を促す外的要因はセンターに関連するものだけでなく、若者自身の環境の変化といった要因もある。もっともわかりやすいのは、卒業や就職などを含む何らかの状態像の変化である。No.28 は、「卒業」とともに居住地が遠くなったことでセンターと「疎遠」になっていったという。また仕事などで「忙しくなったっていうのもあるんですけど」とも話しており、センターまでくる時間的・心理的余裕がないこともうかがえる。センターを頻繁に利用している No.23 も、社会人になったら「絶対、来なくなりそうですよね」と話している。「<仕事が>しばらく、落ち着くまでは<センターには来られない>」という彼の言葉からも、No.28 と同様に時間的・心理的余裕がなくなるだろうという予想がうかがえる。

<sup>27</sup> 他方で、特定のワーカーに限定されない、ワーカーやセンター全体への信頼感や安心感のようなものが形成されている事実もある。5 章を参照。







以上のように、何らかの若者自身の環境の変化によってセンターの利用が減少することは大いにあり得ることである。一方で、たとえば No.34 は、高校卒業後にまったくセンターと疎遠となるのではなく、何回かセンターを利用していたという。社会人となった現在でも、施設利用などで訪れる機会がある。彼の場合、近くに住み続けているという立地が利用の継続のしやすさにつながっている面はあるとはいえ、必ずしも若者自身の環境の変化が利用の終結につながらないことを踏まえれば、その「差」が何に寄るのか、今後検討の余地があるだろう。

#### (4) 若者の内面的変容

最後に、利用の減退に作用する若者の内面的変容についてまとめたい。端的に言えば、若者自身の利用・参加ニーズの減退である。たとえば、No.22 は中学生からセンターを利用していたが、高校生になると「そんな頻繁には利用してない」という。

中学は、なんかお金もないしって感じやったけど、高校はもうバイトもできるから、行きたい場所にも行けるけど、なんか、どこも行きたくない、地元からあんま出たくないときとかに、じゃあく友達>誘ってセンター行くみたいな、久々に行かへんみたいな。

… (略) …

<高校は、自分は電車で通っていたから>帰り道に遊びに行ったり、街に行ったりするから、<センターに行く>数は減るかな。… (略) …そこまで<センターを>必要としていなかった、高校のときは (No.22)。

No.22 の場合、高校進学をきっかけに行動範囲が広がっている。選択肢が増えることによって、他の居られる場所を得ていくことができれば、センターへのニーズは下がり、利用頻度も下がる。前節との重なりでいえば、進学という若者自身の状況の変化（外的要因）が、センターへのニーズの減退（内的要因）につながっていることがわかる。

また、前節で見たセンターの体制の変化や加齢に伴う制限といった外的要因に影響を受け、自身のニーズが変化していったと感じている場合もあった。No.53 は、センターの利用を辞める時のことを以下のように話している。

<青年の家からセンターになったり、ユースワーカーの異動があったり>いろいろ変わっていたときやったし、まあ別にそこまで私も多分その時は、なんやろ、<ユースワーカーに>親身になってもらおうと思ってなかったかもしれないし、求めていかへんかったから、そういう意味ではなんか、冷たくあしらわれた悔しい、みたいな、もうええわ、みたいな、そういうのは全くないですね。なんか普通に自然にフェイドアウトしていった感じがありますね (No.53)。





彼女の「多分その時は」それほど自分も求めていなかったという感覚は、それまでの利用・参加のなかで自分の欲求がある程度満たされてきた実感に下支えされているのだろう。しかし彼女は同時に、寂しさも語っている。

＜センターの意義って＞居場所を見出すってどこあったじゃないですか。だから居場所を別に、社会である人たちはもうええやん、みたいな。＜ユースワーカーは＞常にこう下を見に行ってはる感じがしたから、だんだん自分たちが年齢が上がっていくにつれて、なんか、あたしらも独り立ちせえ！みたいな感じになるっていう、感じになりませんか？…(略)…で、次の病んでる子いこか、みたいな(笑)。拾いにいこか、まあそれ大事です、もちろんそうやで、それがあなたたちの仕事やん、でもさみしいよなって、ね、なりますよね。だからそういうイメージ、あたしたちやっぱあって、その、ヤンキーとか、世間に入れない人たちが、子どもたちが来てんのかなって、じゃああたしたちはやっぱり、そういう意味でも居づらいわ、みたいな、別にあたしら大丈夫やし、っていうのもあるから、なんか、全部一緒にたにしたいですよ、そんな子も、こんな子も、ね。大丈夫そうな子も、大丈夫じゃない、ホントに大丈夫じゃないっぽい子も、でも大丈夫な子かって大丈夫じゃないとこいっぱい持ってるんやから、…(略)…(No.53)。

これまでの長期のかかわりのなかで自分の欲求がある程度満たされてきたからこそ「別にあたしら大丈夫やし」という感覚が生じていると考えれば、彼女のニーズはすでに一定満たされていた側面もある。そして、ニーズがある程度満たされたからこそセンターを利用しなくなっていったとも捉えられる。しかし、他方では、加齢に伴う制限などから自分たちが居ていい感覚を何となく剥奪されていく感覚のなかで、自らのニーズそのものを減退させ、自身を納得させていったような側面もまた垣間見えるのである<sup>28</sup>。

### 3-2. 新たな試み

センターの利用は減退・終結したものの、その後センター外の試みとして連続している事柄を最後に付記しておきたい。

まず、センターでの利用・参加とそこでの関係性を足場に、自分たちで新たにサークルを立ち上げている対象者がいた。事業Zに参加していたNo.53は、事業がサークル化するなかで利用が減退し、やがてサークルも解散したケースであったが、その後、形態もメンバーもかなりの程度変わっているというが、サークルが再び立ち上がったという。たまにセンターも練習場所として利用している。センターの事業に参加し、そこで築いた関係性や体験が、その後時を経て再び似たような取り組みを復活させる

<sup>28</sup> これについては、年齢による制限をどのように若者に伝えるか・理解してもらうかというユースワークの実践的な課題も含まれていると思われる。





際の重要な資源となっていることがうかがえる。

また、上記のような具体的な活動でなくても、個人のなかでセンター外にも継承されているものもある。たとえば No.28 は、ユースワーカーについて、「学校と家族と違う視点で言ってもらえる」ところがよかったと話している。彼女の場合、卒業・就職を機にセンターとは疎遠になったが、今では会社の先輩などに話をしているという。

その人<会社の先輩>も<ユースワーカーと同じで>人生の先輩って感じはあるんですよ。やっぱそういうところ探してしまうのかも知れないです。で、まあそういう、新しく話を出来る人が見つかったというか、知り合えて (No.28)。

彼女は、センターを利用していた当時ユースワーカーに求めていた役割を、その後、他の場所でも見つけている。センターやユースワーカーと疎遠になったとしても、必要な他者を自分の生活圏のなかで見つけ出していることは、センターで経験した原型を基にしつつ、自身の生活をつくっている証のようにも考えられる。言い換えれば、そのような役割を他に見つけることができているからこそ、センターとは疎遠であるということでもあるだろう（前項のニーズの減退と同様）。

他方で、No.28 の場合は同時にセンターの特別感についても語っている。「センターだからボランティアに参加していたようなところがあるんで」という彼女は、現在住んでいるところの近くでは「自分で探してボランティアやろう、みたいな所まではちょっとたどり着けなかったです」と話している。センターへの「思い入れ」が強い分、「比べちゃうかなとかも思ったりして」他の場所での活動にはつながらないという。センターでの経験が他の場面でも汎用性をもって適応されるものと、そうでないものがあることが彼女のケースからはうかがえる。今後の検討課題の一つであろう。

### 3-3. 小括

センター利用の減退についてその要因を整理してみると、環境変化や施設枠組みなどの外的要因と若者自身のニーズの変化といった内的要因の双方が見られた。しかし当然のことながら、それらは個別に作用しているというよりは、環境変化のなかで本人のニーズが消失し利用の減退に至るといったかたちで複合的に作用していることがわかる。

若者はいつまでも若者でないことを踏まえれば、若者層をターゲットとするユースワークは、いずれかのタイミングで目の前の若者がセンターから去っていくことを前提としている。その際、前項で見たように、センターでの経験や関係性の持ち方が、利用を終えた後も何らかの活動や生活の土台となっていく点は、若者時代にかれらとかかわるユースワークの一つの意義であるといえるだろう。

## 4節 まとめ

本章では、若者たちの利用の開始からその維持・拡大、さらには終結に至るまでの過程を扱いながら、





その時々利用に影響を与えるセンターの特徴やユースワーカーの存在を考察してきた。その際、極めて重要であったのはセンターが“曖昧さ”を伴った空間であることであった。「これがしたい」という明確な目的がない場合や、積極的に活動に取り組みたいと思っているわけではない場合も、利用・参加し始めることのできる空間として、センターは機能している。そして、そのように利用の敷居を下げることによって、目的志向を強くもった若者から「暇つぶし」で流れ着いた若者まで、ある程度の幅をもった若者層を呼び込み、ユースワークと出会うきっかけを生み出しているのである。

さらに、利用を維持・拡大していく際にも、この“曖昧さ”は重要な意味を持っていた。何をするわけでもなく「入り浸ってた」と表現される若者のロビー利用は、潜在的な欲求を表出・具体化していく時間を保障するとともに、ワーカーが若者の潜在的欲求を引き出していくためのかわりの土台をも形成していた。こうした“曖昧さ”を伴う空間が存在することに下支えされ、一見“無為”にも捉えうる時間・経験を経ることで、若者の利用や参加は拡大・深化可能性にひらかれるのではないか。目的も、利用方法も、すべてが明確に定まった場所であったなら、利用や参加のあり方が無作為に拡大する可能性も、ワーカーが若者に働きかける機会も減退し、ユースワークを目の前の若者に即して展開する余地は著しく狭まるであろう。

このように考えれば、ユースワークは、“曖昧さ”を担保しながら可能性にひらかれたプロセスを生成する点に、その価値があると考えられるかもしれない。なるほど、センターでの経験や関係性の持ち方がその後の人生の礎となっていくことは、ユースワークによる結果として、意義深いことであろう。8章に見る、センター利用を経て対象者らが語る成長感覚も、ユースワークによる一つの効果といえる。しかし、それはあくまで結果論であり、そのことがすなわちユースワークの目的や価値そのものと考えてよいものか疑問が残る。むしろ、ここまで検討してきた“曖昧さ”の重要性を踏まえれば、曖昧なものを包摂しながら流動的に展開されるプロセスこそが、結果的に活動の広がりや多様な経験をつくりだしていたのであり、とすれば、その“曖昧さ”と多様性を含みこむあり方にこそ、他の取り組みに見られないユースワークの価値と本質があるとは考えられまいか。本章で見てきた、利用開始からその継続・発展、さらには利用終結まで、ユースワーカーやセンターという〈場〉のさまざまな特質に影響を受けながらも、若者自身が選択し、活動し、経験していくその過程そのものが、若者の成長・主体化に際しての一経験である。そうした過程を保障し、支えるものこそが、ユースワークが担保する“曖昧さ”なのである。







## 5章 ユースワークにおける〈場〉の価値

勝部 皓（非営利活動団体 Atlas）、原 未来（滋賀県立大学）

### はじめに

本章では、青少年活動センター（以下、センター）において生成している〈場〉のあり方に注目し、検討する。〈場〉に着目する理由としては、ユースワークがおこなわれる〈場〉そのものに何らかの機能や価値があると考えられるためである。実際に、インタビューでは、〈場〉の特徴に関する語りが多くみられている。たとえば、No.49 は、初回利用時に「いい空間やなと思った」と語っているほか、センターは「居心地が良かった」と語る若者が少なくない（No.23、No.78）。

もちろん、今回の調査は利用歴の長い若者へインタビューをおこなっているため、このような語りが出るのは当然であるとも言える。一方でかれらが、上記のようにセンターを捉えていることは、センターにおいて生じている〈場〉そのものに特徴や価値があるとも考えられないだろうか。そこで本章では、センターで生じている〈場〉の特徴を明らかにすることで、ユースワークの価値の一端を明らかにしていく。

なお、本章では〈場〉をさしあたって次のように用いたい。センターという施設・建物は、物的空間を占める“場所”である。それに対し、〈場〉とは、何らかの相互作用によって生み出されその力が働いている空間を指している。つまり、センターという“場所”を利用する若者たちやユースワーカーの相互行為によって、センター内には様々な〈場〉が立ち現われているといえる。先に見た「居心地が良かった」という若者の感覚は、センターで生成している〈場〉のあり方そのもの、あるいは〈場〉に影響されたものであるとも考えられるだろう。以下では、1 節では“場所”としてのセンターの価値、2 節ではセンターで生成される〈場〉の特徴とその価値にそれぞれ迫りたい。そして、3 節では、そうしたセンターという“場所”あるいはそこで生成されている〈場〉に対して、若者がどのように感じているのかについて言及する。さらに、4 節では、そのような〈場〉の特徴にユースワーカーがどのように関わっているのか触れ、本章のまとめをおこないたい。

### 1 節 “場所”としてのセンターの価値

まず、本節では、センターという場所・建物そのものが、若者たちにとってどのように位置づけられているのか、考えてみたい。

#### 1-1. 使いやすい場所

インタビューでは、センターが若者にとって、使いやすい場所であったことが語られている。センターには、若者が利用できる様々な施設があるほか、ギターや雑誌、ボードゲームなど、過ごし方の幅を広げる小物があえて置いてあり、利用者はそれを多様な形で利用している。それを表す語りとして、







No.78 は、センターを人に紹介するとしたらという問いかけに対して、「たとえば音楽が好きな人だったら「音楽スタジオあるでー」とか、トレーニングしたいんだったら「ジムあるし一緒に行かへんかー」とか、言いますし。あとはなんや、暇つぶし？したいんだったら「じゃああっこ行こうぜー」みたいな。僕は言いますけどね」と話している。ここからは、利用方法の選択肢の多さとそれゆえの使いやすさをセンターの長所として捉えている様子がうかがえる。実際、本調査でも、センターの設備を目的として利用している人は多い。例えば、テニスを主目的にしていた No.1、トレーニングジム利用の No.9 と No.78、自習室利用の No.34 と No.46 が挙げられる。

中高時代は主にテニスの練習をするためにセンターを利用していた No.1 は、テニスコートの存在の大きさを語っている。「この年齢くに>なってでも、タダで、無料で使えるってのは、大きいですね」と言い、特に無料で使えることの利便性を指摘している。No.78 も、最初に利用し始めたのは部活のトレーニングのための、トレーニングジムの利用であった。一方で、No.78 がジムを利用しなくなったのは、高校を卒業し、お金がかかるようになったためであった。

これらの語りからは、センターに様々な施設・設備があることが利用のきっかけの一つになっていること、またそれらが無料で使えることが、若者にとって大きな意味を持つことがうかがえる。

また、施設としての使いやすさに言及する若者もいた。No.34 は、センターの第一印象として「なんかでも、利用しやすいと思いましたけど。その、例えば文化祭の練習でも、広いところを、簡単っていうか、ちょっとした手続きですぐ使えましたし。えっと、まあ、他にもテニスコートや将棋盤があったり、まあ、いざ、どっかの施設使おうとしたらややこしかったり。実際、なかなか、そういう施設がなかったりするんで」と話している。

施設としての使いやすさの点で言えば、開館時間も重要であろう。No.23 は、「センターが<夜>9時までやっているんで、終わってからセンター行って、高校の時は塾も通っていて、で、センターのすぐ近くに塾もあったんで、塾行くまでセンターにおって、塾に行くみたいな」かたちで利用していたと話している。

以上からは、センターが、多様な施設・設備を、無料で、かつ簡易な手続き・利用しやすい時間帯で使えるといった、使い勝手のいい場所として若者たちに認識されていることがわかる。

## 1-2. 地元にあるということ

センターは、主に中学生や高校生らにとって地元にあるものとして位置づいており、かれらの生活圏の中にあることに大きな意味があることが語られている。

たとえば、遊ぶ場所がなくセンターに「逃げてきた」という No.1 は、「近場で。…(略)…こういう施設があるっていうのは、ほんとに子どもからしたらすごい助かってるんじゃないかな」と話している。また、地域のなかにおけるセンターの認知度の大きさについての語りもあった。No.1 は「まあでもみんな知ってたんで。センターがあるっていうのは」と話し、地域のなかでセンターが認知されていたことを語っている。また、No.22 も、「中学イコールセンターみたいな」という感覚があったと言い、地





域の中学生が利用する場としてセンターを捉えていた。ここからは、センターが、地元で根付き、認識されている場所であることが読み取れる。

このように、かれらの生活圏内に位置づくなかで、センターは、地域のなかでの若者たちの集合場所としての役割を担っていたようである。No.22 は「行ってみて、あー、めっちゃいいやんみたいな、思って、そっからずっと、もう集合場所そこみたいな…（略）…なんか。だから今もそうやと思う。ふつーに、センター集合なみたいな」と、集合場所としてセンターを利用していたと語る。同様に、高校生にとっても、センターは地元で遊べる、集まることのできる貴重な場所であったようだ。No.23 は、以下のように話している

No.23: 何を目的にっていうと、うー——ん。高校って遊ぶところがないんですよ。

調査者: うん

No.23: 基本。で、中学でいっしょに仲良かった友だちとも、ばらけてしまって。で、高校行くじゃないですか。で、高校生がどこで遊ぶかって。遊ぶ場所ないんですよとくに。部活入るか、部活入っている奴は一本当に部活やし、で、えー、部活入ってへん奴は帰って、当時プレステーション3があって、ネットで通話しながらゲームができる時代だったんで、別に特に集まって遊ぶ必要がないし、逆に集まって遊ぶ場所もないんですよ。河原行って何をするわけでもないし、そー——んな時に

調査者: 河原…

No.23: そーんな時に、センターやったら、あの確実に場所はあるし、空いていたら部屋とれるし、で、部屋とったら、別に禁止事項以外はなんでもできるし。

このように語る No.23 は、「活動の起点がセンター」と話しているが、「起点」たり得たのは、センターが自分たちの生活圏内に存在する場所であったからと言えるだろう<sup>29</sup>。さらに No.23 は、大学進学後もセンターのボランティアに関わり続けながら、地元の人間関係も同時に維持していた。

No.23: 大学はみんなバラバラで。就職した奴らもいるんで。

調査者: うんうんうんうん。

No.23: もう、俺はくボランティアのある>木曜日ならセンターにいるよって感じで。なんか、みんな木曜に集まったりとか。

調査者: 大学に入ってから。

<sup>29</sup> この「活動の起点がセンター」という No.23 の言葉には、センターが地元にあることによる拠点性という意味あいにとどまらず、自分たちで活動を次々に展開していくことができるという意味合いも含まれている。このような、若者が主体的な活動を展開していける〈場〉がセンターに生成している側面については、次節で触れる。





No.23: 大学に入ってから。

この語りからは、No.23 がボランティアとして関わる曜日を高校時代の仲間に伝えることで、その日はセンターで高校時代の仲間と継続的につながり続けていた様子がうかがえた。

以上からは、センターは中学生や高校生にとって、地元で集まれる数少ない場所であり、集合場所であったことがうかがえる。そしてそれは、進学などによって切れがちななる彼・彼女たちの地元の友人関係を維持することを支える役割も果たしていたのではないかと考えられる。

### 1-3. 小括

以上のように、若者たちへのインタビューからは、センターという施設そのものの価値が見出される。

第一に、小・中・高校生など、行き場所が限られる年代の若者たちにとっては、センターという“場所”が存在することそのものが大きな価値をもっているということである。その利用の仕方が、テニスコートやジムといった施設利用であろうと、仲間と集まるための場所利用だろうと、利用できる施設や集まれる場所そのものが、かれらにとっては有用な資源である。そもそも、若者のやりたいことの実現を手助けするというユースワークの理念を踏まえれば（1章参照）、それに際して必要な施設・設備などの“場所”があること自体が重要であることは当然のこととも言える。

第二に、センターのような気軽に集合できる場所がかれらの生活圏内にあることは、進学や就職などの進路選択によって分断されがちな主中高時代の仲間関係を維持するのに役立っていた。それは、センターがかれらの生活圏内に位置づいており、自然に集うことのできる場所であるからこそ可能となっていた。なお、この緩やかに集うことができる背景には、立地、あるいは多様な選択肢があるという設備上の条件だけでなく、センターがどのような〈場〉として生成されているかも重要な意味をもっているが、それは次節に譲りたい（4章も参照）。

第三に、センターという“場所”に利便性を感じ、利用するようになることによって、かれらは他章で見えるようなユースワーカーや他者との出会いや、自身が変容するきっかけを得ていく可能性がある。つまり、若者にとって使いやすく集まりやすい“場所”が、ユースワークの入口として重要な役割を占めているのである。ユースワークを展開していくにあたって、センターという“場所”が存在することが、若者とかわるうえで他に代えがたい価値を有していると言えるだろう。

## 2節 センターで生成される〈場〉の特徴

では、センターという施設のなかで展開されている〈場〉にはどのような特徴があるのだろうか。以上に見てきたセンターという施設＝“場所”のあり方と、そこで生成される空間＝〈場〉の特徴は不可分の関係にあることに留意しつつ、以下では、センター内で生成される空間的特徴、すなわち〈場〉に焦点化して検討していきたい。





## 2-1. 若者たちのコントロール圏内—「自分たちの空間」

先に、センターは「居心地が良かった」と若者たちによって表現されることを述べたが、そうした感覚を担保する一つの要素として、「自分たちの空間」を確保できることが挙げられる。「自分たちの空間」とは、自分たちで占拠できる空間であり、自分たちでコントロール可能な空間である。

たとえば、小学生の時から利用していた No.1 は、センターには「ヤンキーみたいな中学生みたいな人」が「めっちゃおって。めっちゃ入りにくいみたい」と感じつつ、利用を続けていた。その理由として、「みんなでこんなかするっていう場所が他にあまりなかった」という点を挙げつつ、「<部屋を>借りさえすれば、結局、あの、ねえ、空間に、納まるんで。なんかこう、外から干渉されることもないですし。ね、急に入ってくるみたいな感じも、さすがにそこまではなかったんで」と話している。ここからは、彼が、センターのなかで、外部からの干渉の少ない空間を確保できる感覚を持っていたことがうかがえる。

また、No.23 は、「何がって、居心地が良かったです。普通に友だちと集まってなんでもできるし、部屋借りて、自分たちの空間で何をしてもいいし、部屋なかったとしても、ないならどうしようかって考えて自分らでなんかしていたし」と語っている。前節でも触れたように、小中高生が「遊ぶ場所」「集まれる場所」は今日限られている。そのなかで、自分たちが占拠できるような空間をもつことは、なおのこと難しい。事実、No.23 は「自ら進んで自分の家に友だちを招き入れる奴は一人もいなかった」と話している。そうしたなか、彼の言葉で言う「自分たちの空間」(≒場所)を確保できることの価値は、若者たちにとって絶大なものであったといえる。

さらに、「自分たちの空間」の確保という際、それはおそらく、空間的な占有(≒場所の確保)の意味に留まらない。先の No.23 の言葉の最後では、部屋(=場所)が借りられなくても、「ないならどうしようかって考えて自分らでなんかしていた」と言及されている。つまり、自分たちが占拠できる場所がなくても、「自分らで」何か考え実行できる感覚がそこにはあるのである。こうしたことをより表しているのは No.34 のインタビューであろう。彼は、センターで学んだことを聞かれた時に次のように語っている。

友だちと。なんていうんですかね。あの、自分達で計画して、何かをやるっていう癖がついたというか。例えば学校だと時間割が決まっていたし、部活もまあ、形は決まっていたし。今までだったらセンターに行く前だったら学校行って、部活して家に帰って終わりなんですけど、そうじゃなくて、わりとそう、部活後の夜の時間をなんかテニスにしろ、勉強にしろ、なんていうんですかね。今日はじゃあ、こっちに行って、勉強して、ここぐらいからちょっとテニスしようかみたいななんか、結構考えたり、今、今週はテストが近いから頑張ってテニスはやめておこうとか (No.34)。

つまり、センターは、自分たちで自由に過ごし方を決められる点においてもまた「自分たちの空間」であったといえる。センターは、若者たちが自らの行動のあり方をコントロールできる空間として認識







されているのである。

そこには、ワーカーが意識的にそのような空間をつくりだしている一面もうかがえる。たとえば、No.22 はセンターで自習していた時について「やからホンマに、家とかもまず、勉強しろしろしろって感じで<親が>言ったり、音楽聞きながら<勉強>したら、そんなんでも入らへんやろ頭になって感じで<言われたりするけど>、いや自分<頭に>入んねんみたいな。ここ<センター>なら別に音楽聞いて何も言われへんし。静かにしてればいいみたいな、あの勉強の部屋は。自分なりにできるから」と話している。若者の過ごし方にワーカーが必要以上に介入しない関わり方が、若者たちに「自分なりにできる」感覚を与えているとも考えられよう。若者自身がやり方・居方・使い方をコントロールできる空間＝〈場〉が、センター内に形成されている様子がうかがえるのである。

## 2-2. 多様な他者の存在と関係の広がり

ところで、「自分たちの空間」の確保というと、仲間内に閉じられた限定的な空間や関係性を想起するかもしれない。しかし、調査からは、一緒に利用していた仲間以外の他者や活動への認識が多く語られている。センターが多様性を含む場として意識されており、そこから関係や活動が広がっていた様子もうかがえるのである。以下ではその点について明らかにしていく。

### (1) 多様な他者との共存

インタビューからは、自身と共に利用している仲間以外の他者の存在について、緩やかに認知している様子がうかがえた。なかでも、いわゆる“やんちゃな子ら”への認識は複数の若者から語られている。たとえば、小学生からセンターを利用していた No.1 は、センターが「ヤンキーっぽい感じ」の「ガラ悪い系の子ら」のたまり場になっていたと話している。ただ、そのような人がいたとしても、「<部屋を>借りさえすれば、結局、あの、ねえ、空間に、納まるんで」と話しており、その「ガラ悪い系の子ら」とも共存していたことがうかがえる。同様に、高校生から利用している No.53 も、当初センターは「ヤンキーが流れ着いてくるところ」のようにも見えていたという。「なんかちょっと怖いな、みたいな感じ」ではあったというが、「全然絡まれることはなかったし」、「いいヤンキーやったと思う」と話している<sup>30</sup>。さらに、同世代ではなく、少し上の世代から、“やんちゃな子ら”への意識を持っていた者もいた。社会人になってからセンターを利用するようになった No.9 は、「暇を持て余した中高生の子らとかよく<センターに>来てたんですよ」と話している。かれらは「どっちかっていうと、あんまり学校行きたくない感じの子」であり、センターは「そういう子らの受け皿にもなっていた印象やった」と語られている。以上からは、自身とは異なる立場や状態にある（ように感じられている）他者と同じ空間を共有し、そ

<sup>30</sup> ただ、初めてセンターにくる人にとっては、マイナスな印象を与えていたのかもしれないとも指摘している。







の存在を意識する様子が見られるのである<sup>31</sup>。

また、センター内でおこなわれている様々な活動も、同じ空間内でおこなわれているものとして少なからず意識されていた。No.49 は、センターの第一印象として、「一番なんかいいなと思ったのは、あの、今はなかったかもしれないんですけど、ホワイトボードがあって、どこの部屋になんの団体が使ってる、みたいなん書いてあるのがあって、その団体名がなんか面白いんですよね、なんか。何これ、何してる人たちなんやろな、みたいな、見てたりとかして」と語っている。ホワイトボードが、センター内の異なる団体の存在を知る・想起するきっかけになっていた。同様に、No.34 は、「たまに、そのダンスチームとかそういうのがあったりしたんで、それみて、こういう人なんだなって。ちゃんとしたチームの練習があったのかなって思いました」と語り、関わりはなかったものの他の活動の利用者のことを見ていたことがうかがえる。さらに、No.78 は、ボランティアがロビーでやっていた餅つきに加わったことがあったと言う。その理由について本人は、ユースワーカーに脅されたためと、餅が食べたかったためと語るが、「なんかやっぱり、人それぞれいて、喋ってて、あーこういう人もいるんやーっていうのを学ばせてもらったんで。センターにはもうセンキューって感じですよ」とその時の新しい出会いとしてポジティブに捉えていた。他にも、座布団のしまい方から、同じ部屋を利用する他団体へ思いをはせる様子が見られたりと（No.46）、多くの若者たちが他者や他の活動を意識していることがわかった。

以上からは、センターにおいて、多様な他者や活動を含みこみ、それらが同居できるような空間＝〈場〉が生成している（あるいはそのように若者たちに感じられている）ことがうかがえる。確かに、部屋を借りればそこは「自分たちの空間」となり、かれらの占有スペースになりうる。しかし、その空間は、センターという場所で生成する〈場〉の一つであり、センター内には自分以外の他者によるそれぞれの「自分たちの空間」もまた生成している。それを若者たちは、互いに感じ取りあっている。その意味で、センター内で形成される「自分たちの空間」は、仲間内に閉じたものではなく、自分とは異なる他者や活動の存在といった“外部”を緩やかに感じつつ形成される〈場〉であったといえる。また、逆に、ある程度の「自分たちの空間」を確保できる感覚が、多少の異質性を孕む他者ともセンター内で共存していける状況を生み出している。ここに、多様な他者を包摂する公共空間に開かれつつ、占拠・コントロールできる「自分たちの空間」を形成しているという、若者たちのつくる〈場〉の特徴が垣間見えるのである。

## （２）他者との交流が生まれる場、関係性や活動の広がり

前項で述べた通り、センターは異なる他者や活動が共存しうる空間であった。そしてインタビューの中では、かれらがそうした〈場〉で過ごす中で、時に異なる他者や活動に触れ、関係性や活動が広がっ

<sup>31</sup> なお、こうした他者への認識が自分自身の立場の捉えなおしにつながるような場合もある。No.23 は「あいつらうるさいな～、みたいな奴っているんですよね、絶対」と話し、他の利用者を意識していたという。しかし、あるとき、「俺ら、普通に使っているくつもりだったけど、その＞普通が、そいつらがいなかったら、そのくうるさい＞ポジションに立っているのは僕らやって」気付いたと話している。





ていく様子もまた語られている。

たとえば、No.23 は、ボランティアに関わるきっかけとなった中国人留学生との出会いについて語っている。ロビーで友達と対戦型のゲームをしていたところに、「あ、それ何やってんの」と中国人留学生に声をかけられたという。その後、ゲームの対戦を通じて仲良くなると、「留学生と日本人との交流するイベントをする団体あるねんけどって、自分こうへん？みたいな話」をされた。その時は「面倒くさかったから、まあいいや別にみたいな」感じで断ったが、その後、大学受験科目に国際交流の科目があり、「あいつがいたなって思い出し」たという No.23 は、中国人留学生に「センターで来た時に声をかけて」ボランティアに参加するようになったという。

また、最初はトレーニングジムを利用していた No.9 は、アドバイザーのボランティアと「けっこう最初仲良くなって」、その後、アドバイザーを通じて「職員さんとか、他のボランティアと仲良くなった」していったという。そして、『「ボランティアやってみない？」』っていうふうに。けっこう、なかば強引気味に（笑）」誘われ、ボランティアに参加するようになった。なぜこのような関わりが生まれたのかについて、No.9 は「〈センターが〉非常にそんな、お堅い施設ではなくて。職員と利用者なりボランティアなりの壁が薄かった」点を挙げている。

さらに、No.28 も、センターのボランティアで関わるうちに関係が広がった一人である。ボランティアで知り合った友達に人を紹介されるなかで、「きっかけがわからない、知り合いは増えた」と話している。紹介を受けて、イベントのステージに立つといったこともあったそうだ。

以上から、センターでは、多様な他者や活動が同居するだけではなく、そのような条件によって、関係性や活動の拡張可能性に開かれていることもまたうかがえるのである。前項では、それぞれの「自分たちの空間」を形成しつつ、他者や他の活動を互いに意識し共存している様子を指摘したが、本項では、そうした状態をさらに超え、センターという場所で、新たな他者や活動にかかわり、「自分たち」という範囲をもとの仲間内からさらに発展・拡張させていくようなプロセスが看取できるのである。

### 2-3. 形成される人間関係の特徴

さらに、センターで生成される〈場〉の特徴を表しているもののひとつとして、そこで生成されている人間関係のありようを若者たちがどのように感じているか、ということが挙げられる。ここでは、その点について見てみたい。

たとえば、No.28 の場合、一人でもボランティアを継続する理由に、センターでの関係性のあり方が重要な位置づけをもっていたという。

＜このボランティアが自分に合っていたと思うところは＞人づきあいが一番大きかったのではって思っている。その、＜1 年目のボランティアで＞決まったグループがたまたま私と波長の合う人たちっていうか、お兄ちゃんお姉ちゃんみたいな感じの人たちと組んで。そこがまず最初よかったかなっていう（No.28）。





彼女の場合、1年目に参加した際のボランティアでの「人づきあい」が「意外とく自分に>合ってた」ことが2年目もボランティアを継続していく理由となったという。しかし、彼女が参加したボランティアは季節限定のものであり、2年目にはボランティアメンバーが大きく入れ替わるものであった。実際、1年目は「結構メンバーの中でもく自分は>年下の方」だった状況が、「2年目は若い子達がすごいいっぱい」いる状況に変わっている。つまり、ある特定の個人との関係性の良さというよりは、1年目で感じたセンターやボランティアでの「人づきあい」のあり方そのものへの親和性が、彼女にボランティアの継続をうながしたと考えられる。

類似して、学校や予備校などとは異なる関係性をセンターでは築けると話した若者もいた。予備校時代に利用していたNo.46だ。

No.46: ほんまに〇〇<同じ予備校の学生>が絡んできて。本当は最初は誰やねんと思って。(笑)誰やねんこいつって思ってて。で、まあばーって喋ってて、あーでもこいつおもしろいなと思うようになって。

調査者: ほー。それがセンターに来て、その彼の友達とか連れともなんかしゃべるようになってなんか絡むようになって。

No.46: そうなんです。

調査者: そういう関係は予備校の中ではあんまりやっぱり起こらなかった。

No.46: まあそうですね。なんか、言ってしまうとこいつら敵みたいなんあるじゃないですか。

YWr: あーそうね(笑)。

No.46: 表面上には付き合うけどみたいな。なんか蹴落とし合いもあるから。

調査者: あるんだ。

No.46: まあまあまあ、ひどいですよ(笑)

YWr: えーそんなに？

調査者: そう？ふーん。

No.46: ありますあります。

調査者: そっか…そういう意味ではそういうのから逃れてきたっていう面もあるのかな。

No.46: まー基本的にもう、そうですね。蹴落とし合いが面倒くさかったんで。高校が△△<進学校>なんで蹴落とし合いだらけなんで。まあ面倒くさいのに、またそのだるいし…ていう。

… (略) …

調査者: うんうんうん。ここ<センター>では逆に言うとあんまりそういうことは。

No.46:<そういうこと>は、なかったです。なかったし、普通に〇〇<友達>となんていうんですか、こう教え合いをしてたりとかだったんで…まあ、ていってそれぞれの目的が違うし行きたいところも違うから、そういうの<蹴落とし合い>はなかったなと。





以上のように No.46 もまた、センターの〈場〉で築かれる人間関係のあり方そのものの特徴に触れている。つまり、センターが、予備校や学校などを始めとした多くの若者を取り巻く環境で形成されるものとは異なる人間関係や「人づきあい」を形成しやすい〈場〉として、若者たちに感知されている可能性があるのである。センターの〈場〉に特徴的に生成されているこのような人間関係のあり方が、前項までで見てきた他者との共存や交流を生み出し、関係や活動を広げていく土台となっていたとも考えられるだろう（ロビーでの関係性の特徴については4章および7章も参照）。

#### 2-4. 小括

以上、本節ではセンターで生成される〈場〉の特徴について検討してきた。そこで見出されたことは、センターが、若者たちが自分たちでコントロール可能であると感じられるような、「自分たちの空間」＝〈場〉として感受され、生成されていたことであった。さらに、そうした「自分たちの空間」は、決して仲間内に閉ざされた内閉的なものではなかった。センター内に同時に存在する多様な他者や活動への視線がそこには存在しており、さらには、新しい他者との交流や活動へと、自分のかかわる〈場〉自体も広げていく様子がうかがえた。

これらの点についてもう少し考察してみるならば、「自分たちの空間」は、おそらくアメーバ状に拡張していくイメージとして捉えられるべきだろう。はじめは借りた部屋内こそが、「何をしてもいい」「自分たちの空間」であることもあるだろうが、次第にその範囲は、部屋を借りれなくともロビーやソファーといったセンター内の様々な場所でも維持可能なものとなっていく。あるいは、先に示したように、他の他者や活動と一部共有していくような事態も生じていく。その意味で、若者たちは利用とともに、「自分たちの空間」を押し広げ、センターという施設を「自分たちの空間」としての〈場〉へと組み替えていくのだと考えられる<sup>32</sup>。ここにこそ、公共に参画しその場を作り変えていく若者の主体形成・主体発揮の原型があると考えれば、ユースワークが若者にかかわるうえでもっとも重要な価値がこの過程に内在していると言えるだろう。

### 3節 若者たちにとってのセンター

これまで、センターという“場所”が存在することの価値と、そこで生成されている〈場〉の特徴・価値について明らかにしてきた。次に、本節では、センターという“場所”あるいはそこでの〈場〉に、若者自身がどのような意味を付与しているのか、見てみたい。インタビューでは、センターについて、「学校以外の学生時代の自分の居場所」(No.28)、「落ち着く」「和める場所」(No.22)、「うち感ある」(No.9)

<sup>32</sup> たとえば、自習スペースとして和室などを利用していた No.46 は、センターの年末大掃除に参加した理由について、「いつも使っているから、逆にそういうの＜＝掃除＞はするみたいなのが普通かなって思った」と語っている。センターが「自分たちの空間」となっているからこそ、そこを維持・形成する一端を担う感覚が生まれるのである。







など、さまざまに表現されていた。初回利用時から、「なかなか使い心地がよかった」(No.46)、「めっちゃいいやん」(No.22)と感じている若者もいれば、長期間利用するなかで「居心地よかった」(No.23)と語る若者も多い。すべてを検討することは難しいため、今回は、特徴的に見られた、学校でも職場でもない“場所”あるいは〈場〉としての意味付けと、その価値について触れておきたい。

以下は、No.34 によるセンターについての語りである。

No.34：まあ、高校生っていうのは、まあ、なんていうんでしょう、人によっては一人になりたい子もいたでしょうけど、僕はどちらかというと、わいわいしたかったんで。まあ、学校終らも正当な理由でみんなと一緒にいられるという感じがよかったですね。勉強するという正当な理由で。  
… (略) …

調査者：繰り返しになっちゃうんですけど、毎日、ほぼ毎日来ていた理由をもう一回教えていただいてもよろしいですか？

No.34：えーと。受験を。えーと。あー。えーと。まあ。受験を意識して勉強しようとしてたのと、それとさっきも言いましたが、みんなで何かするのが僕は好きだったので、その家に帰るよりは、もうちょっとこっち来て、勉強しようってなったからですかね。

調査者：えーと、その二つがあったからみんなが来なくても、勉強のために来ていたりとか。

No.34：あー、そうですね。みんなが来なかったときは、まあ、それはそれで勉強しようかなって思いましたし。

進学校に通う彼は、高校の友達とセンターに来所し、学習スペースやロビー、テニスコートなどを利用していた。おこなうべきものとしての勉強が身体化されているかれらにとっては、“学生の本分＝勉強”の側面を担保しつつ、それ以外も含んで友達と共に過ごせるという点で、センターは大きな価値をもっていたと考えられる。なぜならば、かれらの利用できる多くの施設—たとえば図書館、自習室など—は、その目的と利用形態が明確であり、それに合致した振る舞いのみが要求されるからだ。他方で、センターは、勉強“も”できる、という曖昧な〈場〉であり<sup>33</sup>、先に見たようにそれらの行動をかれら自身で自己決定できる〈場〉である。そうした〈場〉の特性を背景に、彼はセンターに“勉強もできる”場所であるという「正当な理由」をつけて、来所・利用し続けたのではないか。進学校に通う若者層が、「正当に」仲間と集まり活動できる数少ない場としてのセンターの価値を、No.34 は語っているのである<sup>34</sup>。

なお、上記の No.34 の意味付けは、勉強という名目を保ちつつそれ以外の活動や交友関係が強く意識されるという点で、学校とセンターの共通性も感じさせる。しかし、No.34 本人が「学校だと時間割が

<sup>33</sup> センターが曖昧な〈場〉であるということに関連して、4章では、利用目的がそれほど明確でなくても利用できる場としての価値を検討しているため、そちらも参照のこと。

<sup>34</sup> 似た様子は、予備校時代に勉強目的でセンターを利用していた No.46 にも見られた。「部屋借りてみては隠れてピザ持ってきて食べてみた」など、勉強プラスアルファの楽しみを見出していたようである。







決まっていまして、部活もまあ、形は決まっていたし」と言うように、カリキュラム化され、勉強が全面化される学校と、「自分たちで計画して、何かをやる」ことのできるセンターとは、やはり異なる存在として意味づけられているように思われる。

このように、学校や職場と異なる“場所”あるいは〈場〉として、センターをとらえている若者は少ない。たとえば、No.28 は、センターについて、「学校で悩んでもセンターに行って話聞いてもらったりとか、こんなことしましたっていうの見てもらって、励ましてもらったりとか、いいねって言ってもらえるだけで、なんか救いになったっていうところもあったり」と話している。そして、センターが「挫折そうになった時に駆け込み寺みたいな所があります」と話していた。センターは、生活の中心に位置づく学校生活のことを持ち込みつつ、学校とは切り離された場所であるがゆえにその表出が可能となる点で、「駆け込み寺」として機能していると考えられる。彼女にとって、学校外で、学校生活も含みこんだ自分を受け入れてくれる場の存在が大きな支えになっていたのだろう。それゆえ、彼女にとって、センターは「特別」な場所であった。

また、No.22 は、以下のように語っている。

＜職場の人には＞相談って言っても仕事のことしか、できひん。やっぱ仕事場の人やから。でもここ＜センター＞は、仕事のことくの相談＞もできるし、愚痴も言えるし、やっぱ職場の人の愚痴言える人はいるけど、そんな言ったら＜職場に内容が＞広まる、っていうのもわかってるから抑えてるみたいな。そうかも、友達に言ったり、友達なんか、そんな働いてる子一人しかおらんけど、その子に言ったりとか、するし、やっぱ友達も聞いてくれるし、うっとおしいなみたいな感じで言ったりするし、んー、なんかまた違うなってなる。なんでもっていったらあれやけど、＜ワーカーには＞ちょっとは言えるかな (No.22)。

上記の No.22 の語りからは、センターでワーカーと話すことは、職場の同僚や友達と話すこととは少し違うこととして感じられている様子がうかがえる。No.28 も No.22 も、学校や職場のなかでの友達・同僚関係（あるいはそこでの自分のあり方）とは異なるものを、センターやワーカーに感じているといえるのではないだろうか。

なお、さらに明確に、センターでは、他の場所ではできない関係性が生成されると感じていた若者もいる。先に見た、予備校時代に仲間と自習室としてセンターを利用していた No.46 はその典型だろう。彼は、「ここ＜センター＞がなかったらここは友達にはならなかったかなっていうのあるかな」と話し、センターという場だからこそ構築された友人関係があると感じ、意味づけていた。

これらの語りからは、センターが、学校や予備校・職場—そして時に家庭<sup>35</sup>—など、若者たちが多く

<sup>35</sup> たとえば、No.22 は家庭内での過ごし方や親との関係と、センターでの過ごし方あるいはユースワーカーとの関係の違いについて述べている。





の時間を過ごすことになる場所とは異なるものとして、かれらに位置づけられていることがうかがえる。かれらは、学校・予備校・職場とは物理的に異なる“場所”であり、異なるものが生成する〈場〉であったからこそ、できた話や関係性の構築があったと感じていた。こうした感覚は、前節までで明らかにしてきた“場所”としてのセンターの価値と、センターで生成される〈場〉の特徴を背景に形成されたものだと言えるのではないだろうか。

#### 4節 〈場〉にかかわるユースワーカーの存在

最後に、やや補足的になるが、これまで見てきたセンターという“場所”あるいはそこで生成される〈場〉の特徴に、ユースワーカーの存在がかかわっていることを指摘しておきたい。当然のことながら、上記で見てきたセンターの特徴は自然に生まれたものではなく、ワーカーが若者たちと共に作り出す実践のなかで生成されている。

たとえば、2-1の最後で指摘したように、若者たちが「自分たちの空間」としてセンターを感じられている背景には、ワーカーが管理的になることなく、むしろ若者たちの自主性・主体性を支えるようなかわりをおこなっていることがある。また、たとえばNo.34のように、勉強をしたり、時にマンガを読んだりといったことを、「自分たちで計画して」やることができるのは、そのような曖昧な空間としてのセンターをワーカーが意識的に作りだしていることにも影響されている。ロビーには、マンガや雑誌が置いてあり、ギターやゲームなどもあるが、たとえば予備校の自習室にそのようなものがあることはまずないだろう。「自分たちで計画して」やることのできる空間が（もちろん時には若者と協同で）作りだされているのである。

同様に、センター内で多様な他者との共存が可能となっているあり方も、貸部屋によって「自分たちの空間」をひとまず確保できるという物理的条件だけでなく、ワーカーの日々のかかわりに影響を受けている。No.23は、あるワーカーの中学生への対応を例に出しながら、センターは「あまり人を否定しない場所ってイメージ」があると語っている。日常的なユースワーカーの振る舞いが、「人を否定しない」という〈場〉の特徴をつくりだす一端を担っているといえるだろう。

さらに、センターを利用している者同士で新しい他者関係が形成されたり、活動が広がったりしていく場合も同様である。多様な人々が一つの空間内に収まっていることが、ただちに関係性や活動参加を広げていくわけではない。たとえば、ファストフード店で、見知らぬ他者との交流が生まれるかと言えば、それは稀なことであろう。センター内に、他者との交流や出会いが生まれやすい何かが生成しているからこそ、そのような特徴をもつ〈場〉にセンターはなり得ているのであり、そこにはユースワーカーの意図や実践が関係しているのである<sup>36</sup>。

そのように考えると、若者たちにとって、かわりが深く印象深かったワーカーのみが、ユースワー

<sup>36</sup> 他にも、音楽系事業に参加していたNo.53は、センターが「ただの利用してただけの箱やってんやったらあそこ、そんだけ、そこで＜自分が＞必死こいて＜事業に参加して＞たかどうか分からないですね」と、ユースワーカーが共に事業に参加し「親身」で「必死に」なってくれたことの大きさを語っている。





クをおこなっている（若者に影響を与えている）わけではないことがわかる。ワーカーたちの日常的なふるまい・かかわりが、センター内の〈場〉をつくりだす一端を担い、その〈場〉を若者たちは共有しているのである。また、詳細な検討は6章に譲るが、若者たち自身も、個人としてのユースワーカー（あるいはそこでの関係性）に価値を見出しつつ、その個人に留まらず、ユースワーカー全体、あるいはセンター全体への信頼感・安心感を示している。たとえば、No.31は、仕事のことであるワーカーに相談しにいったことがあったという。

＜自分がやっている＞児童館は子どもの居場所づくりだし、青少年活動センターは青少年の活動、居場所づくりだし、っていうイメージであったので、同じ居場所づくりを頑張ってる施設だなっていう印象は、どっちも関わったからこそ私は思ってたんで、仕事の相談もしたら、そういう、あの、変な話、友達とかよりも全然、ずれた話じゃない、アドバイスだったり貰えるだろうな、って思っていました（No.31）。

相談しに行ったのは、ある特定のワーカーであるものの、センター自体が「居場所づくりを頑張っている施設」という認識を持っており、センターそのものへの信頼感・親近感をもっていることがうかがえる。さらにその後も彼女は、「青少年活動センターなら間違いないと思って」、シンポジウムの広報依頼などをたまにおこなっているという。こうした様子からは、ある一人のワーカーや、自分がかかわった人々という個別性を超えて、センターのワーカー全体あるいはセンターそのものへの信頼感・安心感が形成されていることがうかがえるのである。本章ではさほど扱うことができなかったが、センターという〈場〉に、多くの若者たちが安心・信頼できる〈場〉といった意味付けをおこなっているように見えたことも付言しておきたい。

## おわりに

本章では、センターという“場所”そのもの、あるいはそこで生じている〈場〉に注目し、その特徴と価値を、若者たちのインタビューから検討してきた。そこで明らかとなったのは、第一に、センターが物理的な“場所”として存在することの価値であった。多様な選択肢のある使い勝手のいい場所として存在することそのものが、若者にとって重要な資源となっていた。また、地元には位置づき、途切れがちな年少時代の交友関係を維持する機能を果たしていることも明らかとなった。

また、第二に、センターという施設の内部で生じている〈場〉には、他の場所には見られ難いいくつかの特徴が見られることも明らかとなった。若者たちは、貸部屋などによって自分たちで占有・コントロールできる空間を確保していたが、それは密閉されたものではなく、ほかの多様な他者の存在や活動を緩やかに感じられるものであった。さらに、時には、そうした他者との交流や活動の広がりを通じて、かれらは、「自分たちの空間」を有機的に組み替え、拡張していった。そのような空間的特徴は、かれらに学校でも職場でも家庭でもない“第三の場所”としての感覚を与え、センターの存在意義を体感す





る根源に位置づいているように思われた。

本章で示してきたように、若者たちが自ら占有しコントロールできる空間を確保できる機会は今日多いとは言えない。ましてや、そうした空間を、誰と、どこで、どのように形成し共有するかといった事柄について、若者自身が、他者との関わりを通じて自ら拡張していく経験は、ほとんどおこなう場所はないといっていいのではないか。ユースワーカーが若者とともにつくりだしてきたセンターに生成する〈場〉の特徴は、若者が自らの生きる空間をつくりだし、参画し、変容させていくプロセスを生み出しうるという点で、若者の主体形成にかかわる機能を伴うものと捉えうる。No.34 が「自分たちで計画して、何かをやるっていう癖がついた」ことを自身の成長としていることは、そのひとつの証左かもしれない。

さらに、最後に述べた特定の個人に対するものに留まらない〈場〉を共有する人々への信頼感・安心感の形成は、信頼に足るコミュニティがあるのだという感覚を形成していくだろう。それは社会全体への信頼感・安心感と地続きのものとなり、若者に、センター以外の社会も同様の参画とプロセスによって、「自分たちの空間」として変容できるという感覚をもたらしていくのではないだろうか。その意味で、センターでの経験はその後の社会参画につながりうるものであり、センターが若者と社会の間をつなぐ役割をもっているとも言えるかもしれない。







## 6章 ユースワーカーは、若者にとってどんな存在なのか

横江 美佐子（公益財団法人京都市ユースサービス協会）

若者にとって、若者の成長を支えるユースワーカー（詳細、第1章5節参照）はどのような存在なのだろうか。この章では、インタビューからユースワーカーの存在、役割が若者の目にどのように映っているかについての語りを中心に抽出・分析し、これを明らかにしていくことを目指す。

まず、今回の調査の前提を述べておく。本調査の対象者は、かれらがセンターを利用する過程で関わりがあったユースワーカーから調査協力を行っている。つまり、対象者は、なんらかの形でワーカーの存在を認識していること、調査対象者とユースワーカーは、利用者全体からみると相対的に深い関わりやつながりがある。

また、この章を担当する筆者は、青少年活動センターにてユースワーカーとして25年勤務の経験があり、それに加えて、現在は施設のマネージメントや職員の養成を担う管理職の立場にいる。すなわち、当事者としての側面を持っており、実践の場で培った経験や経験知をもとにしながら、実践と研究の場を往復し、この節の執筆を進めていることを最初に述べておく。

なお、本章の分析にあたっては、インタビューで使ったインタビューガイドをもとに、ユースワーカー（以下、ワーカー）に関する問いを整理した。そのうえで、インタビュー結果を読み込み、調査対象者のワーカーについての語りに着目し、『印象に残っているワーカーは、どんなところが印象に残っているか』『ワーカーからの働きかけで印象に残っているエピソード』『ワーカーの仕事は何か』『ワーカーはどんな人たちか』『ほかの大人とワーカーの比較』の5つのカテゴリーを生成した。このカテゴリーをもとに、対象者の語りを抽出した一覧表を作成し、カテゴリーをもとに対象者の語りの比較検討し分析、考察を進めた<sup>37</sup>。

### 1節 若者にとって印象に残っているワーカーとは

センターを利用する上で、ワーカーとの接触は多かれ少なかれ避けられないものである。前述したとおり、今回の調査対象者は、ワーカーとなんらかの接点をもっている。そこで、かれらの語りのなかで、『印象に残っているワーカー』『どんなところが印象に残っているか』についてふりかえった語りを中心に検討する。

「印象に残っているワーカーは誰ですか」という問いについて、その返答は、大きく「ノリのよい人」と「話やすい人」という二つの語りに分けられた。まず、ノリがよく返してくれる：一緒に遊んでくれるというNo.22は、印象に残っているワーカーのことを次のように表現する。「なんか、めちゃめちゃあっちくワーカー>も言ってくるし、乗ってくるから、ああーいいな、こいつみたいな、楽しいみたい

<sup>37</sup> 一部、カテゴリーに沿うワーカーインタビューから語りを用いている。





な。茶化したら楽しいなみたいな」(No.22)。また、No.53 も次のように語っている。『『お前らなあ』みたいな、『お前らなあ』といつも言っている感じ』(No.53)。その他にも「みんなが落ち着いて仕事してんの、この人なんでこんなに明るいのやろう」「ちょっとのノリで言っても全然やってくれるという…(略)…なんか普通に『腕相撲しようぜ』って、『いいよって』」(No.78)、「見た目はちゃんとしているが、面白いことを話すというギャップ」(No.46)とそれぞれが、印象に残っているワーカーについて語っている。これらの語りに共通してみられるのは、気軽なやりとりであったり、ワーカーが、かれら若者にあうテンポ、まさしく、かれらの「ノリ」に呼応しているところである。

もう一方は、「すごい話やすい人、年上なのに友だちみたいな感じ」(No.1)、「友だちでもない先生でもない、職場の人でもない話を聞いてくれる人」(No.49)、「平べったく言うと話しやすい人…」(No.28)と語られるワーカーたちである。

この結果について考察してみたい。前者の「ノリの良さ」をあげた対象者は、中高生の頃から、多くは、放課後に友人と連れ立ってセンターの利用をしている。そして、かれらのあげたワーカーの多くは、その当時、キャリアが1年目から2年目と若手が中心であった。若手の職員は比較的、受付のそばにデスクが配置されていることが多く、必然的にセンターにやってくる若者たちと雑談を含むやりとりをする機会を持つ場にいる。このことから、年齢が近く気軽に話かけやすいことに加えて、若者たちに顔が見えやすい存在になっていると考えられる。

一方の「話しやすい人」という印象というのは、事業やボランティアに参加するためにセンターを利用していた対象者から語られている。かれらのセンターを訪れる動機が、「ボランティアをしたい」というような、前者よりセンターの利用の目的が比較的明確であること、そして、友人たちなどの事前情報からセンターの雰囲気を知ることなく、緊張した状態で訪ねてきていることがうかがえる。No.31は、ボランティアをしたいと思い立ち、ネットを検索、センターにはじめて連絡を入れたときの様子を次のように語っている。

期待と不安が半分半分で、おそろおそろだったんですけど…(略)…たぶん、メールでやりとりしていた…(略)…そのユースワーカーさんがめちゃ親切にしてくれてたので、初めてでも、緊張しつつも活動に打ち解けるといえる、できた(No.31)。

彼女にとって「最初に関わったので、そういう意味ではいちばんしゃべりやすい、行ったら声をかけてもらえるので…(略)…一番、そういう意味では印象的」だという。No.49もまた、大学に入学後、新しいことにチャレンジしたい気持ちから、以前からセンターに出入りしていた姉があるワーカーに会いに行くというので同行した。その時の様子を「<センターは>閉鎖的なイメージが私にはあったんですけど、そんなこともなく、対応もすごいやさしいというか、いい、気軽な感じ、気軽にしゃべりかけられる、話しかけられるような雰囲気だった」と語っている。つまり、はじめて足を踏み入れる場で、安心して受け入れられたという気持ちは、センターの印象だけでなく、ワーカーの印象としても残り続





けていると考えられる。

また、中学生から大学生という期間を利用していた No.23 は、ボランティア活動に参加するようになり、活動についての確なアドバイスをくれた担当職員、また、中学生、高校生と利用していた No.1 は、センターで過ごす時間のなかでさまざまな話をするようになったワーカー、No.22 は、「ノリ」に重きを置きながらも、利用を継続するなかで、「真面目になるとときにはちゃんと相談にのってくれる」ワーカーについても語っている。これらの三者の語りから、若者が、センターで過ごす時間を積み重ねるなかで、「ノリ」だけではなく、必要な場面では相談や手助けを求めることができるつながりをワーカーとの間に築いていることを理解できる。

一方、ボランティアとして参加していた No.28 は、前述した通り「話しやすかったワーカー」が印象に残っているが、その印象もまた、センターで過ごす過程で築かれた関係から生まれていることが、語りの中から読み取れる。「センターに通う時に挨拶とかしていたら、職員さんたちも私のことを憶えてくださって…（略）…空き時間にちょっと話したりと…」(No.28)。そして、ボランティアの時間以外にもセンターに入り浸るようになった。何をきっかけで悩みを話すようになったか、覚えていないとしながらも、時間が経つにつれて深まっていく関係を「2年間通っていると慣れてきて、職員さんとも顔見知りになっていくんですよ」「いろいろお話する機会ができたりして、個人的な相談を聞いてもらったりですとか、顔を見に行くみたいな、職員さんの」と述べており、こちらも時間を積み重ねる中で、信頼関係が深まり、それらが、《印象に残っているワーカー》として語られていることが理解できる。

## 2節 ユースワーカーの仕事は若者にどう映っているか

次に、若者にワーカーの仕事、センター内での役割がどのように映っていたかという語りを中心に分析、検討を行う。

### 2-1. 施設管理者としてのユースワーカー

まず、主にセンターの部屋利用や〈場〉として利用していた対象者から得られた語りをみる。かれらの考えるワーカーの仕事は、センターという建物の管理、運営をするというものである。No.34 は、ワーカーの仕事についてどのようにとらえていたかとの問いに「施設の管理をする人」「管理とか。あとその、まあ、例えば体育館のスケジュールもダブルブッキングしないようにぐらいですかね。仕事」、そして「デスクワークされているなって感じでしたね」と付け加えている。また、No.23 も、高校生ぐらいまではと前置をして、同様に「施設を管理する人、施設がある以上、いないといけない人」と施設管理者としての役割だと思っていたとする。No.1 は、飲食店の店員になぞらえて「センターの職員の人らは、飲食店と一緒にちゃんかな、みたいな」「注文されたもん応えて、持ってきて終わりぐらいの仕事のには…（略）…『和室貸して』<と利用者が>言うたら、あ、<申請書を>書いてみたいな。『<部屋の>鍵はい』『じゃあバイバイ』みたいな」と説明する。そして、No.46 は、市職員がセンターを管理していたと思っていたとしながら「パソコンカチカチしている人」、そして「フィルターの掃除ができないほど





忙しい」と語っている。

## 2-2. 活動を手助けする役割としてのユースワーカー

二つ目は、事業を円滑にすすめる、プログラムを行うことが、ワーカーの仕事とする語りである。この語りは、ボランティア活動に参加していた対象者から語られたものが中心となっている。No.31 は、「<ボランティア>活動するときに、一番お手伝いしてくれる感じの人たち」、No.9 は、「僕ら<ボランティア>だけでやってくと、やっぱりやりたいことだけで終わってしまうというか、現実性が低いのにこれでやるぞ、っていう風に突っ走ってしまったり…(略)…それをこうなんか軌道修正してくれる」と語る。しかし、その手助けは、ただ助けるだけではない。No.31 は、「あれこれ言うとかではなく、良い意味で距離を置いて見守ってくれたり…(略)…あったかく見守ってくれる」と語っている。No.23 は、「センターの事業でセンターの施設を使っていて、センターから予算がおりているのであれば、<センターの>人はいないといけない」とボランティア活動をする中で、職員との付き合い方も変わったという。そして、その語りからは、前述した、施設の運営を担うワーカーの役割から活動を手助けするという役割としての認識の変化があったことが読み取れる。

## 2-3. 若者と関わるのがユースワーカーの仕事

同時に若者との関わりこそがワーカーの仕事とあげる対象者もいる。No.22 は、「事務所で、はい、仕事をして終わりじゃなくて…(略)…中高生とかとコミュニケーションをとったりして、また、次になつたら<次の会話では>、『あー前の話どうなったん』とかくと聞くとか>」と語っている。No.49 は、「<若者が>気軽に入りやすい雰囲気をつくるのが、ワーカーの仕事」と述べており、ワーカーが受付などで他の若者とやりとりをする姿を見て、次のように続けている。「部屋を借りに来る人とかもいると思うんですけど、ただ、事務的なやりとりをするだけじゃあなくて、『最近どう?なんか』、例えばなんですけど『髪型変えた?』…(略)…そこまでよく見ている方が多い印象だったので職員さんが、そして、一人でいたい若者もいるかもしれないとしながらも「関わりをもとうとするというか、<若者が>そこに来ている限りは何かしらの関わりを持とうとすることが大事」ではないかと続けている。

No.34 の目には、ワーカーは「子どもの扱いになれている人」と映っていたという。そして、No.53 は、「スタッフさんを…(略)…おいしいなと思った。体当たりでもお金もらえんねや、あわよくばうまいことプロジェクト自分で作ったらそれに入って『わーい!』って楽しめんねや、仕事やけど楽しそうやったんや」と共にプロジェクトのなかで過ごしたワーカーの働く姿を語っている。

相談という切り口で、ワーカーの仕事をとらえる語りもみられる。例えば、No.78 は「ボランティアもそうですけど、うーん、常にいろんな方が来はるじゃないですか。それとか、僕もそうなんですけどなんか普通に相談して、応えてくれはるんで、まあ、そういう言うイメージかな」と答えながら、「前やったら、バイトとかどうしようみたいな話もしてたんですけど、たまにそういう恋愛系とか、相談しますね」と自身がワーカーに相談した内容をふりかえっている。No.9 は、センターを利用する若者たちが、







ワーカーと就職をはじめ、さまざまな内容の相談をしているのを目にし、「ワーカーなら聞きやすい&ltgt相  
談しやすい&gtgtっていうのもあると思う。単に雑談をしに行く感じで行けるし」と語り、加えて「物じゃ  
なくて人を相手の仕事」とも述べている。

#### 2-4. 人をつなぐ役割を担うユースワーカー

ユースワーカーは、若者が参加する事業や不特定多数の若者が過ごすロビーの運営を通して、利用者  
同士が出会う場をつくっている。これらの場への参加を通して若者たちは他者とつながっていく。No.78  
は「自分からあまりはなしかけないタイプ」と自分を表現しつつ、活動をサポートしてくれるボランテ  
ィアと出会い、同じ趣味をもつひとつ上の人と友達になったという。No.9 も事業に参加することで出  
会った「商店街のおちゃん」との出会いが印象に残っているという。No.49 は、「&ltgtワーカーから&gtgt  
いろんなことを紹介してもらったりとか、いろんな人を紹介してもらって、で、つなげてもらったりと  
かもしてた」とより具体的にワーカーに他者とつながりを促されていることを語っている。

「中学生の数学や化学を教えてくれたらいいのになあーって、実は、そんな時思っていて、で、こうな  
んとなく仕向けてみるんだけど、中学生が照れたりしてね…（略）…いつも不発に終わっていた」とい  
うワーカー（No.34）の語りからは、ワーカーがロビーで過ごす若者たちをつなぐ役割を担おうとして  
いたことがうかがえる。ワーカー（No.9）、ワーカー（No.78）もまた、トレーニングジムを利用する  
ために来館していた対象者を事業への参加を意識して促していたことをインタビューの中で語っている。  
そして、ワーカー（No.78）は「彼は、このセンターでいろんな人に出会ったと思うんで、そこは、&ltgt  
彼の&gtgt変化というか、大きかったんじゃないか」と語り、ワーカー（No.9）は、次項にて後述する、  
No.9 に意図的にボランティア活動に参加させるように促していることが語りにみられる。

そして、ワーカー（No.49）は、No.49 がボランティア活動で得たことを「いろんな人と知り合える  
というところが魅力やったんじゃないかと思いますよね。自分の知らない世界を知れるみたいのところ」  
と述べている。

これら若者、ワーカーの語りから、ワーカーの役割にセンターに集う人をつなげること、そして、人  
が出会える空間や機会を提供する役割があることが読み取れる。なお、センターにおける人と人のつな  
がりについては、第5章では、場を通した視点から論じている。

#### 2-5. ユースワーカーの役割についての若者の認識の変化

放課後の居場所として利用を目的に来館していた若者と、ボランティアやプログラムへの参加をする  
ために利用をはじめた若者との間には、センター職員への期待する役割に違いがみられることは、前述  
してきた。しかし、当初、放課後の居場所として利用していた若者も事業に参加するなど場への関わり  
が変わることによって、ワーカーの役割のとらえ方が、両者の間に差がなくなってきたことがわか  
る。

No.23 は、仲間とセンターを利用していた時期は、ワーカーは施設管理をする人と考えていたが、ボ





ランティア活動への参加を通して、職員の新たな役割を認識しはじめている。No.34 も、職員は施設管理をしているが、どうやら「子どもの扱いに慣れている人」たちでもあると、ちがった角度からワーカーの役割を捉えなおしている語りがみられる。すなわち、若者たちのワーカーの役割に対するとらえ方は、固定的ではないのだ。それでは、この変化はどのようにして起こるのだろうか。

まず、「施設管理をしている人」という語りに注目したい。この施設管理には、さまざまなとらえ方が含まれている。インタビューでは、予約の管理、貸し部屋の鍵のやりとり、清掃フィルター掃除など対象者それぞれの視点で表現している。No.1、No.23、No.34、No.46 らは、その時々によって頻度は違うにしろ、週の多くの放課後などの空いている時間をセンターで過ごしている。センターの部屋を利用する際は、申請という作業が必要であり、自習室への入室の際は、記名を求められることがほとんどである。つまり、かれらは、ワーカーが事務作業をする受付に立ち寄る頻度は高い。そこで、デスクワークに没頭するワーカーたちの姿を目にしており、これらが「施設管理をしている人」という印象を与えるきっかけになっていると考える。

しかしながら、筆者のワーカーとしての経験をふりかってみると、受付は、若者たちと関わるきっかけをつくる一番の良い機会であった。「こんにちは」からはじまって、少し若者たちがセンターになじんできた頃、「なんの勉強してんの」とか「どんな遊びをしているの」と会話を進める。もちろんすべてに返答があるとは限らない。そんな時は「なんか困ったことあったら、言ってなあ」という一言だけで会話を切り上げることや「こんにちは」「さようなら」を繰り返すだけのこともある。そのうち「あれ、今日、帰ってくるの早いやん」「もう、期末テスト？早いなあ」…と若者と会話を進めていく。前述したNo.49 が、「最近どう」と来館する若者にワーカーが若者に声をかけるエピソードは、この過程の一部であろう。

また、ワーカーを対象にしたインタビューでは、ワーカー（No.9）がNo.9 がトレーニングをするために最初センターにやってきていることを知りながらも、ボランティア活動に声をかけるプロセスを次のように語っている。「(No.9 が) 来るタイミングで日常的な話をするのが、何度かあって、で、ちょうどその時、担当していた事業のボランティア募集… (略) …『今度こういう事業があって』とかっていう、事業紹介というか、を踏まえてボランティアに誘うこともあって、そこから気にいってもらって、継続的にボランティア活動を続けてもらった」。「日常的な話」をすることで、関わりを深めようとするワーカーの働きかけの意図が読み取れる。

ほかにも若者が気づかない働きかけをワーカーたちは行っている。No.34 は文化祭の練習がきっかけで、センターを利用し始めている。どのセンターも文化祭前になると多くの高校生や大学生たちの利用が入る。かれらは、練習場所の確保に向けて動き、ワーカーと受付にて会話を交わす機会が増える。加えて、ワーカーは、空調や音響の調子が悪くないかなどのチェックをするという口実で、かれらの利用する部屋に入室することを筆者は同僚に促している。これらの行為を通して、安全管理、きちんと使用できているかの確認だけでなく、若者がどのようにセンター利用しているかをワーカーが知ること、そして、それをきっかけに仲間だけの時間をセンターという他者にかかれた場へつなぐことを目指してい





る（5章も参照）。

ワーカー（No.46）は、対象者や彼とともに過ごしていた仲間たちが、『何かするよ』という絶対手伝ってくれていたんですね。大掃除したりとか、書初めとか…」と語っている。同時に、「たまにお菓子パーティーとか和室でやったりとか。そのグループの中にカップルがいたので二人だけで利用するときとかがあって、ちょっとチェックしたりとか、うーん、なんか、まあま、言動が結構わかりやすかったので、常に気にとめていたぐらいなかんじですかね」と述べている。ただ、部屋を貸すだけでなく、「ちょっとチェック」をするなどし、かれらがどのように施設を利用しているか知ることで、関わりの糸口をつかんでいる。

今回のインタビュー記録を読み込むなかで、ロビーや部屋利用をしていた対象者には、センターの施設の目的やワーカーの役割が、（その当時）伝えられていたと思われる記述はみられなかった。一方で、ボランティアやプログラムに参加していた対象者とワーカーはその活動の目的や目標や活動の意味を確認し、伝えており、その過程でワーカーの役割、イメージが形成されていることを No.23、No.31 らの語りにみることができる。No.49 は「事業に参加したとかじゃないんですけど、その対応の仕方というか、こう、すごい親身になって一人に関わってくれて」と事業を通してワーカーの役割を位置付けている。また、彼女が参加してきたプログラムの目的やそこで起こったさまざまな出来事意味を今回のインタビューにおいて、当時の担当ワーカーとの間で確認している。ほかにも No.31、No.53 も同様にその当時の出来事の意味付けやワーカーの役割について確認しあう要素がみられることをも付記しておく。

### 3節 ユースワーカーからの働きかけで印象に残っていること

ここでは、もう少し幅を広げ、対象者がセンターで過ごす過程で、特にワーカーとのやりとりや関わりを語ったエピソードを抽出し、考察を加える。

#### 3-1. 場と共に語られる働きかけ

今回の対象者の多くは、3年以上センターを利用している。1節では、そのなかでも、対象者それぞれに「印象に残っているワーカー」とその理由をたずね、特定のワーカーに焦点があてられた語りに考察を加えた。しかし、対象者、それぞれの語りのなかには、1節で取り上げた以外にも多くのワーカーが登場している。No.53、No.9、No.78 らは、インタビューのなかで、覚えている思い出せる限りのワーカーの名前を挙げようとしている。一方、No.34 は、「名前はちょっと出てこないですが、最初の方にいた黒縁眼鏡をかけていた人」「ぽっちゃりしたおじいちゃん」と容姿や年齢で記憶を手繰り寄せており、No.1、No.46 らにも同様の語りがみられた。

若者がワーカーの名前を憶えていることと、覚えていないことに何かちがいがあのだろうか。ここでは、名前は出てこなかったが、若者が印象のある関わりとして語った内容を中心に検討する。ほぼ、毎日、放課後をセンターで過ごしていたという No.34 からは、具体的なワーカーの名前が語られることがなかったが、彼は、同級生の女子とのいざこざを相談し「向こうはこういう気持ちやったんちゃうん」





とアドバイスもらったことが印象に残っているとあげている。No.23 は、クリスマスに彼女がいない男子だけで過ごしたエピソードを次のように語った。「あの時の所長さん、なに所長さんかまでは忘れてしまったのですが」と前置きしたうえで、「鍋パ（鍋パーティー）したいって言ったら、もう、特別やでって、和室でガスコンロ使って、で。鍋やらしてくれて、そんな時は、よかった、＜センターに＞通っていてよかったなって思いました」（No.23）。No.1 は、毎日しゃべりに来ていたことについて、「僕らより上の人らの、世代の人らに、こうやっぱ、こう、反応してもらうのはうれしかったですね」と語っている。グループや仲間と利用している若者にとっても、それぞれの印象に残る関わりが語られており、ワーカーの存在は、センターという場と共に埋め込まれており、名前は憶えていなくとも、ワーカーはセンターと一緒に若者にとって日常のひとつであることが理解できる。なお前述した No.23、No.34、No.22、No.46、No.53 らに共通して挙げられる特徴の一つには、かれらが10代頃から現在まで、ほぼ一か所のセンターを利用していたことを付け加えておく<sup>38</sup>。

### 3-2. ワーカーとの関係のなかで語られる働きかけ

他方、語りの大部分を特定のワーカーが占めるものもある。前述した No.1 の、具体的なエピソードは、ほぼ限定したワーカーとのやりとりが中心であり、No.28、No.31 も、限られた数名のワーカーだけが、語りの中に登場していた。No.49 は、今回、調査を依頼したワーカーと No.49 が最初に出会ったワーカーのみしか登場していない。

No.28 は、大学の卒業とともに京都を離れたことも理由の一つとしながらも、センターから遠ざかった理由を「知っている人＜ワーカー＞がいなくなって、通い続ける理由がなくなってしまって…」と語っている。調査者が、もしワーカーが残っていたら顔を出しにいったかと問いかけると、「学生の時ほど、しょっちゅうではないですけど、もしかしたら…」「何かのきっかけでお邪魔してたかもなって思います」と返答している。そして、No.1、No.78 のように、インタビューであげたワーカーに異動先のセンターまで、会いに行く経験を持っている対象者もあり、No.49 は、ワーカーの異動先のセンターも利用の活動場所の一つに加えている。かれらがセンターに出向く理由の一つには、ワーカーとの関係があり、信頼できるワーカーと語り合い、共に過ごすこと、それ自体が、印象に残る働きかけとなっているのだ。

### 3-3. 働きかけが変化すること

対象者にとって、当たり前のように思っていたワーカーとの関わりが、変化していく時期は、かならず訪れる。No.28 のようにその場を離れるという選択をする対象者がいる一方で、その様子を異なった角度で表す若者もいる。No.22、No.1 は、現在の職員と自分たちがセンターを利用していたころに出会っていたワーカーの働きかけの比較をする。No.1 は、自分が高校生ではなく、大学生になっている

<sup>38</sup> 2節では、若者が施設管理者としてのワーカー役割がとらえられていたが、その役割像は変化している。それは、若者たちがワーカーをワーカーとして意識しない状態（他者）からワーカーとして意識するものであるが、その変化の過程は、ワーカーからの働きかけや関わりのなかでみられるといえる。







としつつも「なんか、職員の人らは、ああ冷たくなった、みたいな」、よく来ていたころは「絡んでくれるっていうか、けっこうしゃべっていたイメージがありましたね」と続ける。「今しゃべっても、ああ…（略）…ずっと終わらせて、で、なんかく対応が簡単に>サクサクみたいな」（No.1）。No.22 は、「職員がもっと積極的でもいいんとちゃうん」と語っている。

筆者の経験をもとにすると、職員は、かれらの存在を無視しているわけでないが、かれらの来館の頻度が減ることで、比例して声をかける回数が減る。新たな利用者が来館することに加えてそこにワーカーの異動が重なると、それまでのワーカーからのアプローチは変容せざるを得ない。しかし、若者がワーカーの働きかけになんらかの変化を感じるとき、かれらが感じ取った変化は印象に残る出来事になっているのだ。

#### 4節 ワーカーと周りの大人との比較

今回のインタビューでは、その当時の自身の周りにいた大人とワーカーを比較する発言がみられた。その比較する対象で一番多かったのが、教師、その次に親、職場・アルバイト先の上司、友人と続く。

No.49 は、ワーカーは、親や学校の教師と違い「素直にきける」存在だったと語っている。No.28 もまた、ボランティアとして参加するうちに、ワーカーに「個人的な相談」をするようになり、相談するなかで「なんかがんばろうと思えるようになった」という。

まず、教師との比較を述べている語りを中心に検討していきたい。No.34 は勉強を教えてもらうのは教師、ワーカーは話やすい存在で大人の視点でやりとりができたとしている。No.23 は、「学校の先生はもっとがみがみ言ってくる」とそれぞれの高校生時代をふりかえって比較をしている。中高校生時代を中心に利用していた No.1 の語りには、その当時との比較に加えて、現在、教師を目指している彼が持つ教師像とワーカー比較したものがみられる。それは、ワーカーと教師はルールやマナーを子ども・若者に伝えるところでは、同じとしながら、教師は「子どもたち一人ひとりをみる」ことや「親へ苦情への対応」をするところに違いがあるというものである。

親との比較では、No.22 は、「自分は親にはあんま話さないタイプ」として、学校であったことや悩みとか、個人的なことをセンターでは、ワーカーを相手に話せるという。「<親は>なんかすぐ怒ったり、なんか、なんでも世間、世間体のことを言ったりみたいな、とかなんか、誰かと比べられる…（略）…うっとおしいみたいな。ここ<センター>ってくらべるも何もないから」と述べている。親と比較した No.1 は、「こういう人なんや」とワーカーの人柄をわかっていたからワーカーに、自身が家では落ち着いて過ごすことができないという話をしたという。しかし「家族ならもう少し助けてくれる」と違いを語っている。

友だちや職場の同僚との比較では、No.9 は、友人と比較して、「友だち感覚」だが、友だちよりワーカーは話をしっかりきいてくれる、No.53 は、「意見を私らの目線にたってしゃべってくれる」、No.22 は、仕事場の人間は、仕事の相談しかできないが、ワーカーは、仕事の愚痴も言える存在として比較をしている。





## 5節 ワーカーはどんな人たちか

今回のインタビューの語りのなかで「友だち感覚」という言葉が使われており、ここでは、この「友だち感覚」をキーワードに若者にとってのワーカーの存在をまとめたい。

No.78 は、おしゃべり好きな自身が、ワーカーに会いに行く理由は「話すこと」、それは「友だち感覚みたいな」感じだという。また、4節で用いた No.9 やその他の語りのなかにも友だち感覚、また、その他の語りの中にも非常に近い言葉として、「友だちみたいな感じ」というものが使われている。これらは、語り手にとって、ワーカーとの関係を表すものではあるが、それは、あくまでも友だちのようなものであって、友だちではない、普段の生活の中の友だちと違う文脈で使われていることは、明らかである。では、なぜ、〈友だち〉のような感覚を持つ表現が、若者たちの語りにみられるのだろうか。

その問いへの手がかりが、No.22 と調査者の応答にみられる<sup>39</sup>。

調査者：今、一番親しいのは、さっき、A さん<sup>40</sup>って言ってたけど、それはなんでなの？

No.22：え、なんか、センター来たらずぐに話しかけてくれるし

…（略）…

No.22：やし、だからそういうのもんもあるから、＜A を＞からかえるし、真面目な話もできるし、わかってくれるみたいな、ちゃんと。

調査者：ふーん

No.22：『こうしたらいいんちゃう』みたいなシビアな話になっても…（略）…ほんまに友だちみたいな感じ、なんか、そう思わな、言いたいことも言えへんし、自分が言いたいこと言える人の方がどっちかと言うと楽しい、また来たいなってなるし。

No.22 は、「ほんま友だちみたいな感じ」という表現を使うことで、A が自身にとって、気軽に話せて、また会いたいと思える人であるということを伝えている。だからこそ、時にはシビアな話、相談ができる関係が、若者とワーカーの間に成立していることをこの応答から読み取れるのだ。同時に前述した No.9 の「友だち感覚だけど、友だちよりしっかりきいてもらえる人みたいな」の語りにみられるように、「友だちみたいな感じ」であるから友だちを意味していないともとらえられる。両者に共通していることは、友だちという言葉を使うことによって、若者とワーカーと距離感を表していることである。

## 6節 ユースワーカーの役割を捉えなおす語り

これまで、時間の経過とともに若者のワーカーへのまなざしに変化していることを幾度となく述べて

<sup>39</sup> この応答の前提として、No.22 は、ワーカーが若者との関係のなかで、大切なものは「ノリ」とインタビューの中で表現を変えながら何度も繰り返していることを押さえておく。

<sup>40</sup> 今回の調査に同席したユースワーカー





きた。今回の調査では、対象者の語りの多くは、最初、現在の自分からはじまる。そして、センターで過ごした時間、そこでの出来事をさかのぼり、その当時、自身が何を感じていたかを言葉にしていく。そして、現在に戻り、今いるところから、そこでの出来事をあらためて意味づけるというプロセスがみられる。ここで、若者のワーカーへのまなざしに変化していると思われる語りのなかでも、特に現在の立ち位置からふりかえり、ワーカーの役割について述べている語りに注目し、考察を加えていく。

No.23 は、語りのはじめは、ワーカーの仕事を「施設管理をする人」「事業を遂行する上で必要な人」と述べていた。しかし、過去から現在にさかのぼり、現在の立ち位置でふりかえって、ワーカーの役割を「その人の良さ、悪さもあったとしても、その人の良さを育てて社会に送り出す」と語っている。それを表す一つのエピソードとして、「中3とかの悪ガキ」が、地面にビーズをばらまけ、そこに関わるワーカー (No.23) の様子を次のように語った。「一回りぐらい違う年の人に『おい、〇〇<ワーカー (No.23) の名前>』って<呼び捨てにされて>、それに職員がブチ切れるわけでもなく、『なんやんねん』みたいな感じで、友だち感覚で接しているのはすごいなと思いました」。このエピソードが語られたあと、調査者は、No.23 になぜワーカーがその若者たちに怒らなかったと思うかと問うている。その問いに彼は「今になったら、その、理由はなんとなく… (略) …そもそもそこは<センターは>、うーん、人を否定しない場所ってイメージがあって、その人がその人のまま大きくなっていくのを望んでいるような感あるような気がする」と答えている。

このエピソードにあわせて、散らかす立場にいた、No.22 の語りをみる。No.22 は、自身がロビーにおいてあったチラシを破って遊んでいたときのワーカーとの関わりを次のように述べている。「怒られたけれど、でも、そんなに、めっちゃむかつくってならなかった」(No.22)。その理由の一つとして「怒られてたけど、でもちゃんと話はきいてくれたしみたいな」という。そこには、ただ怒られる、注意される関係以外のつながり、No.23 が語った「人を否定しない場所」での信頼関係があることが示されている。No.22 は、自身とワーカーの関係の変化を語ることを通して、また、No.23 は、センターという空間で他の若者とのワーカーとのやりとりを通して、それまでの持っていたワーカーの役割を捉えなおしているともいえる。

## 7節 まとめ

### 7-1. まとめ

インタビューでは、若者自身とワーカーの直接的な関わりに加えて、対象者自身がセンターという場に身をおくなかで、目にした風景なども多く語られていた。若者のとらえるワーカーの存在は、若者からの一方からのみ規定されるではなく、また、ワーカーからの働きかけだけで規定されるものではない。若者の存在、ワーカーの働きかけ、両者の応答、それらが交じり合うセンターという場の4つの要素が揃うことでユースワーカーの存在の意味が浮かびあがってくることがわかった。この章で注目した若者の語りから、若者それぞれにワーカーの存在をとらえており、同時にワーカーから若者に向けられるまなざしも多様なものであることがわかった。





ワーカー（No.23）は、「一時期、大学生になった彼が、インターンシップを受けようかどうか悩んでいて、活動の前に1時間ぐらい、毎回話し込んでいた」ことを語っている。No.23からこのエピソードが語られることはなかったが、これまで記してきた通り No.23 は、ワーカーの役割のとらえなおし、存在の意味付けも更新している。その他のワーカーのインタビューでも、若者が語らなかったエピソードが多く語られている。若者とワーカーは、その時々そこでの出来事や行為について確認しながら意味づける作業を行っている。それは、時に記憶にとどまるが、その多くは日常の一部としてかれらの生活の中にうめこまれていくのだ。ユースワーカーは、若者と日々対話し、活動を共にする過程を通して、若者のその時を受け止め、若者がかれら自身をとらえる手助けをする存在であると考えている。

## 7-2. 課題

ワーカーと他の大人との比較について十分な考察を行えていない。そして、若者とワーカーの関係の深まりは、その当事者間だけで起るものではないということを述べきたが、こちらも十分に検討をつくしたとはいえない。受付やロビー、和室、スポーツルームといった物理的な場、そして、おまつりや事業Z、国際交流プログラムなど、対象者が参加してきた〈場〉について考察を深める必要がある。これらユースワークの場の持つ意味については、第5章を中心に研究全体のなかで、検討しており、それらを踏まえて、あらためて考察を重ねていきたい。







## 7章 ユースワーカー以外の他者との関わりの有無とその意味付け

松村 幸裕子（NPO 法人暮らしづくりネットワーク北芝）

### はじめに

ユースワークにおいては、ユースワーカーと利用者の関わりだけでなく、センターを利用したり、事業に参加したりする中で、同世代や異年齢の他者との関わることも、若者にとって意味のあるものとして捉えている。本章では若者たちの語りの中から、ユースワーカー以外の他者との関わりの有無とその意味付けについて検証する。

筆者は、2000年4月、16歳の時に京都市ユースサービス協会（以下、YS協会）のボランティア説明会に参加し、以降協会の自主事業や、各センターの事業に複数参加・参画してきた。また、ロビーや自習室を利用することもあり、20代半ばまで継続的な施設利用者および事業参加者であった。その後、大阪府箕面市において、子ども・若者に関わる仕事に従事しながら協会の理事として参画している。このことから、センターの利用者、参加者であった経験知と現職で若者に関わる支援者としての経験知の両方の側面から考察していきたい。

### 1節 ワーカー以外の他者の存在はどう語られたか

青少年活動センター（詳細は1章）を利用する若者たちの語りの中からは、関わるユースワーカーの存在以外の他者についての言及が見られた。「他者」の分類としては以下のように分類される。

- ・センター以外の場（学校、予備校等）での友人・先輩後輩・兄弟姉妹
- ・センターおよびYS協会主催事業の参加者
- ・センターのロビーを利用している人
- ・センターを利用（貸室、事業）している人
- ・ワーカーではないボランティア
- ・センター事業を通して出会った人

#### 1-1. センター以外の場（学校、予備校等）での友人・先輩後輩・兄弟姉妹

センターを利用するにあたって学校や予備校等での友人関係、地域の先輩後輩関係、兄弟姉妹関係を伴っているパターンである。No.23は「高校の友だちと一緒に青年くの家（センター）>に連れて行って、他の高校の友だちとかも誘った」と述べ、No.46は「確かA<個人名>、が最初に使ってた」ことから利用するに至っている。また、縦の関係性が濃い地域では「僕自身もやっぱり先輩らにつれてこられ、こさされた」（No.1）や「遊び場とかめっちゃあるみたいなの、聞いてたから、先輩とかから」（No.22）など、先輩の存在がセンターの利用に影響を与えている。他にも、No.34は「あー、出来事というか、





そのよく B<個人名>が一番最初に勉強をやめて、ジャンプ読みに行ったとか覚えていますがね。自習室でやっていたら、ちょっとお茶飲んで来るって。1 時間ぐらいかえって来なくて」と、学校での友人関係をそのままセンター内にも持ち込み、その中での友人の行動を覚えている語りがみられている。また、No.22 や No.49 など、先に兄弟がセンターを利用していたり働いていたという語りも見られた。

調査者：H<センター名>集合なって、へえー。来るきっかけは、まあ中学になったら H<センター名>って言うのがあったって言ってたけど、なんか、誰かが？

No.22：おねえちゃんがいるんですよ。自分に。おねえちゃんがいって、で、そういう中学校とかでも、そういうな、口コミで聞いてたから。

No.49：多分、大学一回生のときの夏に、F センターに行きました。で、私の姉がちょっと、センターで働いていたので。で、大学生になって何か新しいことしたいなと思ってお姉ちゃんに相談して、こういうところがあるし行く？って言って、連れてきてもらったのが最初やったと思います。

#### 1-2. センターおよび YS 協会主催事業の参加者

センターや YS 協会が主催する事業に参加した若者については、他者についてそれぞれ印象的なエピソードとともに語られているのが特徴的である。No.53 は C<個人名>の存在について「『ぶっこんで、もうガン！』ってこう、こっそりじゃなくてバーン！ってなんか印象を、自分のね、印象をつけてぶわーっと去っていった」と述べ、1 人の同世代の生き様に影響をとっても受けたと語っている。また、他の参加者についても「すごく色んな価値観とか、まあ、人生を送ってる人たち、濃い子らがばーんと集まった」と語っている。No.49 も同様に「他の人、一緒にワークショップやってるメンバーの人と一緒に同じものを作り上げるっていうので、その人たちの関わりもすごい濃かった」と述べ、複数の他者との関わりについて語っている。No.31 は「障害を持ってる子もボランティアとかで来てて、そのときにこう、はじめてがっつり関わった」ことが印象的な出会いであると語っている。また、No.28 は「知らない人と知り合いたいって言うておいてあれですけど、全然違う分野の人達がいっぱい来てたんで、慣れるまでは緊張しながら行ってたんですけど、グループ分けとかしだしてから話がしやすくなった」と元々知らない人と知り合うことを目的に参加していた若者もみられた。

#### 1-3. センターのロビーを利用している人

ユースワークにおけるロビーは、見知らぬ若者同士が出会うきっかけを与えている。No.9 はセンターを利用している中高生のことを気にかけて、一緒にロビーで遊んでいた。

暇を持て余した中高生の子らとかよく来てたんですよ。…（略）…多分どっちかっていうと、あん





まり学校行きたくない感じの子とか、けっこう多かった印象なんです。そういう子らの受け皿にもなっていた印象やったんで…（略）…なんかああいう子らと遊ぶ機会が減ったんで（No.9）。

No.34 はロビーにたまっていた中高生についての印象を以下のように語っている。

ダンスチームとかそういうのがあったりしたんで、それみて、こういう人なんだなって。ちゃんとしたチームの練習があったのかなって思いましたし、まあ、やんちゃそうなんで、うちのやんちゃボーイ<B>と喧嘩しないといいなって思ったりしましたね（No.34）。

#### 1-4. センターを利用（貸室、事業）している人

センターには、スポーツジムや自習室など個人やグループの利用ではなく、複数の個人やグループが同じ用途で場所を共有することがある。その中で、No.78 は「ジム、行ってたときに、たまたま、友達になった人はいます」と語り、トレーニングジムで出会った人の存在を語っている。また、No.46 は「センターに来て、その彼の友だちとか連れともなんか喋るようになってなんか絡むようになって」と語り、もともと友人に誘われて利用していた自習室の中での他者との出会いを語っている。

#### 1-5. ワーカーではないボランティア

ボランティアはワーカーではないが、若者への関わり手として研修を受けたり、振り返り等によって関わり方の内省をしていることがあり、同世代にも関わらず参加者・利用者として捉えるのではなく「ボランティア」として語られているのが特徴的である。たとえば No.9 は「トレーニングアドバイザーっていうボランティアさんがいて、その人とけっこう最初仲良くなって」とボランティアの存在を語っている。

#### 1-6. センター事業を通して出会った人

センター主催事業の中で、センターが所在する地域の地縁団体と出会う活動を展開していることもあり、「商店街の会長の E さん…（略）…新しいことなんぼでもしたろうやってスタンスのおっちゃん…（略）…商店街にこういう考え方の人がいるなんてすごいな」（No.9）、という語りから、印象的な出会いをしていることがうかがえる。

特定の人だけでなく、友だちと来始めたものの、その関係性だけでなく、事業に参加したり、他のロビー利用者と話したり友だちになっていくという発展もみられている。

## 2節 本人が意図しない他者との関わりが生まれること

センターを利用する若者たちの中には、他者を“意味ある他者”として意識していない状態があることと、他者への関心が生まれることが語られている。他者を意味ある他者として意識していない状態とは、





センターを利用する際、同じ空間にいる他者（ワーカーも利用者も含め）の存在を、単に空間を共有している人としてみていたり、自分に影響を与える人と思っていないという状態である。

それでは、同じ場を利用する他者に対してどのような関心をもっていたか見ていきたい。No.46 の「1 以前の＜部屋を利用した＞、どっかの団体が適当に座布団入れてたのにキレたような記憶はあるな」との語りからは見知らぬ他者への関心が伺える。No.49 はセンターを利用している他の団体やグループへの関心がみられた。

あと一番なんかいいなと思ったのは、あの、今はなかったかもしれないんですけど、ホワイトボードがあって、どこの部屋になんの団体が使ってる、みたいなん書いてあるのがあって、その団体名がなんか面白いんですよ、なんか。何これ、何してる人たちなんやろな、みたいな、見てたりとかして（No.49）。

また、No.22 は「見てたりしてても、そういうなん＜度が過ぎるおこないについて＞、中高生とか、あっても、お前やめといた方がいいんじゃないかって思ってまう」と語り、ロビーで過ごす中高生に対して気にかけていた。他にも No.1 や No.53 が語る「ロビーにいるヤンキー」の存在や、No.34、No.9 が語る「あの子らく当時自分よりも年下の中学生」の存在等、直接的に関わっておらず少し離れた場所からそういった存在を観察していたことや、自ら関わりにいっていた No.9 の行動は、日常からお互いにセンターを利用している「顔見知り」同士であるからこそ生まれたのではないかと考える。これは、例えば日常的にファストフード店を利用していたとしても、そのように意識することは起こり得ないだろう（5章も参照）。

### 3節 他者と出会ったことで若者が変容していったこと

これまでの節にて若者が多様な他者がセンターの中で出会い、意識するようになったことをみてきた。そこで、若者と他者との出会いはどのような影響を与えているのかみていきたい。

#### 3-1. 価値観の変容

No.9 は「他のボランティアがやる気ないのに、その子らがめっちゃ頑張ってる…（略）…涙ぐましく見えてきて…（略）…めんどくさいっていう風にやってる自分がちょっと恥ずかしいなって思いました」と語り、自分の振る舞いについて振り返っている。No.23 は以下のように留学生との出会いから広がった活動への参加体験からの価値変容を語っている。

留学生だと結構価値観が違ふんで。この人全然違ふんやって、じゃあいいやってよけるんじゃなくて、価値観の違う人とそういう人という意識を持ちながら接していたら、他の人が出てきたときに、結構ああ広がったみたいな感じ（No.23）。







『あのお前はいいや』みたいな、出会い頭で『お前はいいや』決めつけなくなった (No.23)。

No.53 は「すごく色々な価値観とか、まあ、人生を送ってる人たち、濃い子らがばーんと集まってるんで」と、同じグループで活動したメンバーが多様な価値観をもっていたことに影響を受けたことを語っている。No.78 は「人それぞれいて、喋ってて、あーこういう人もいるんやーっていうのを学ばせてもらったんで。活動センターにはもうセンキューって感じ」と、多様な考え方に会った語りがあった。No.49 は当時の行動変容について以下のように語っている。

前に出てくる人多かったじゃないですか、＜ダンスの＞メンバーに。演劇やってる人とか。そういう経験ある、舞台の経験がある人が多くて、私にはみんな、舞台慣れしてますみたいな感じ、もう慣れますこういうの、みたいに見えたんですよ、最初。で、あ、やばいなこれって思って、これこのままじゃ私おいてけぼりにされるなと思って、これちょっとやばいぞって思って。で、もう自分出していけないともう落ちてしまうこれ、この場では、と思ってそう＜自らが前に出ていくこと＞になったんやと思います。前に前に出ていかなあかんねやなと思って (No.49)。

ボランティア活動をしたいとやってきた No.31 は以下のように語っている。

障害を持ってる子もボランティアとかで来てて、そのときにこう、はじめてがっつり関わったので、はじめはあんまりもちろん、付き合い方とかも分からずだったんですけど、周りの人の接し方とか、みんな見たり、自分も関わることで活動を進めると増えてきて、それで関わったら、別に障害のあるないとかじゃなくて、個人個人の付き合いみたいな感じで、なんかそんな、はじめにちょっと構えたけど、そんな必要ないんだなー、みたいなイメージを持ったのは、結構、今思い出すと印象的 (No.31)。

以上の語りから、他者の存在を意識し、それが本人に影響を及ぼすのは、もともと No.28,49,53 のようなセンターの事業に参加しようと思ってやってきた人や、事業参加やボランティア参加などグループで何か一つのことに取り組む体験をしている人に多い(一方で、部屋利用やロビー利用のみの場合は、他者からの影響はあまり語られない)。これはユースワークにおいて、ワーカーの関わり以外に本人に影響を与え、育ちを促すグループダイナミクスを考えながらの事業づくり、グループづくりがおこなわれていることが反映されていると考えられる。

### 3-2. 若者が意識してサポートする側へ変容していくこと

活動を続ける中で立場が変わっていった二人の語りを見てみたい。

1 年目は自分が結構メンバーの中でも年下の方だったんで、お兄さんお姉さん達にちょっと、甘える





じゃないですけど、くっついていくみたいな感じやったんですけど。2年目は若い子達がすごいいっぱいいて、もうちょっと自分をしっかりしようみたいな (No.28)。

チームを超えて私に興味を持ってくれた人がいて、お話するようになって、それでチームを超えて助け合いというか。1年目から継続して居る子が、何人かいたんですよ。で、1年目で仲良くなったその人の相談したりとか。相談っていうか、チームを超えて話したりとか。でしたね。もうなんか、全体で、みたいな。なんか2年目はそんなイメージがあります。プロジェクト全体で関わって行って (No.28)。

ようするに今まで、会議を仕切ってくれる人がいて、『さあ今日はこれについて考えるよって、じゃあ、こうこうこんなみんな、なんかない?』って聞かれて、はじめて発する側が、初めて立場が変わるわけじゃないですか。なんで考えること増えるし、且つ、リーダーってきいて、一番はじめに思い浮かぶのが、責任なんで。なにかあったときに、やばいんじゃないかってことはありましたね (No.23)。

No.28は2年目にグループの中に初めて参加する中学生がおり、どのように関わっていけばよいか戸惑ったという語りが見られ、それをどう解決していけばいいか、活動に参加している仲間と相談し、乗り越えることにつながっている。No.23は活動のリーダーになる不安もあったが「あの、大丈夫、大学1回生でリーダーできるやつなんておらんから。俺らもいるんやしサポートするよっていう人がいて。何人かで」という周りからの手助けの存在が受け手から担い手への変化を生んでいる。

## 4節 他者関係の多様な拡がり

### 4-1. 出会った他者との関係性 センター外で、事業の後

No.28は活動後もメンバーとの付き合いが続いた他、その他の活動に参加することにつながった語りがみられている。

グループを組んだ人たちとG<センター名>以外でも集まったりして何か作ったり準備したり、あと終わった後にご飯食べに行ったりとか。ボランティア以外での付き合いがあったっていうのが結構印象に残っています。で、今でも年賀状のやり取りする人とかいるんですよ。中に (No.28)

イベントにちょっと手伝ってほしいって言われて行ったりとか、なんかね、B大学の学生団体みたいな所の人を紹介されて。で、Y<施設名>とかでやるイベントのステージに立ったことがあって (No.28)。

No.53は、参加していた事業は終了したが「そのだいぶ後に、D<団体名>としては一応復活はして





るんですよ。あの、だいぶ形態も変わってメンバーもかなり替わってて、まあもちろん最初の方のメンバーもいるんですけど」と語り、一度終了した活動をまた再開させている。No.78 は「ジム、行ってたときに、たまたま、友達になった人はいます…（略）…趣味で、たまたま話が合って友達になったっていう感じ」と語り、活動から発展して友だちのような関係性になっていたり、違う活動へ誘われたり、もう一度活動を再開するといったことが見られている。

筆者にも似たような経験がある。活動が終わった後も頻繁に会い、遊びに行ったり、センターとはまったく関係ない活動に誘ったり、誘われたりした経験がある。また、筆者は 2000 年から携帯電話を持ち始めたため、センターや事業で知り合った人たちと直接的につながりようになった。その後、Gree や Mixi、Facebook<sup>41</sup>等の SNS を活用していったため、いまだに当時知り合った人たちの動向を知ることができたり、友だちの友だちとして新たな人間関係を作っていたりもした。

このように、他者関係の拡がりや深まりは、今日の携帯電話やスマートフォンの普及に加え、SNS の拡がりや助長していることは明らかであろう。友だちの友だちが友だちだった、といったことが可視化される SNS により、センターで出会った人同士が SNS でもつながり、その後も継続的に交流を持ち続けられる。名前一つで検索でき、そこから連絡を取りあうことも可能にする SNS の普及から、センターでの出会いや関わりがきっかけになって、関係性を継続させることを容易にさせていると考えられる。

#### 4-2. 他者との関係性の深まり

若者たちはそれぞれが多様な他者関係の広がりや深まりについて語っている。No.78 は、利用者同士で友だちになることがよくあることかという問いに対しては、「いやもう全然ないです」と答えているが、偶然同じ趣味である人の会話を聞いたことが友人関係につながったケースである。他にも、センターを場所として利用（スポーツジム、自習室、テニスコート、ロビー、貸室を利用）していた No.1 は特定のユースワーカーとの関係について多く語っていた。また、No.34 は、ロビーにいた中学生の存在について語っているが、存在を認識していたものの関わりをもっていったわけではなく、センターの利用から離れていくとともに関係性を持たずに終わっていく様子がうかがえた。No.46 は、センターを使っている他のグループへの言及から他者への関心が広がっているとうかがえ、No.22 は、センターがあるからこそ先輩後輩関係等、地域のつながりを保ち続けることができたことがうかがえた。

センター事業やグループ活動に参加しようという動機でやってきた No.28、No.31、No.49、No.53 は、ワーカーに活動を離れたあとも相談をしにいたり、事業で出会った他者と連絡を取りあうなど関係性が深まっていたり、他者が介在した別の場につながっている。No.23 については、場所の利用から始まっているが、関心をもつ事業がありそこに参加したことから、「＜友だちとロビーで＞普通に遊んでるんですけど、事業 E の時間になったら事業 E に行くって感じ」と普段からの関係性を持ち込まない

---

<sup>41</sup> GREE と Mixi は日本国内において 2004 年 2 月にサービスをスタートさせたソーシャル・ネットワーキング・サービスの一つ。



形で他者と出会い関わる場への参加について語られている。

また、No.49 がセンターで出会った他者を「友達…ともなんか多分、感覚は違います…（略）…一緒に頑張った人たちというか、こう、一緒に、なんて言うんですかね、友達でも多分ないんですけど…（略）…職場が一緒の同僚とかもあるんですけど、でもそこよりはもっと深いし、そこまで浅くない…（略）…そのカテゴリーにはく入らない」。ダンス一緒にやった人、みたいな感じ」と語るように、事業が終わったあともセンターの外で会ったり、ご飯を食べたり等するものの「友だちではない」という表現も特徴的である。

この「友だちではない」という表現について考察したい。筆者も No.49 と同年代のときにセンター主催事業に複数参加し、それぞれの活動の中で「友だち」と表現しにくい感覚の他者の存在が複数存在する。それぞれの事業では、3ヶ月くらいの短期間から数年単位まで一緒に活動した期間や一緒に活動した人数なども違っているが、「あの活動のあのときの〇〇さん」といった表現をしたくなる。ただし、その存在を誰かに説明する時は「友だち」と使うが、学校やインターネットで知り合った「友だち」と同列ではないという感覚である。これは、何か一つの目的に向かって、一緒に何かを作り上げる体験をする中で、感情のぶつかり合いがあったり、自分の弱いところや他者に見せたくないものを見せ合ったりして、信頼関係を築いていったことにあるのではないだろうか。「一緒に困難を乗り越えていった仲間」のような感覚に近いのではないかと類推する。

以上の若者たちの語りから、センターやセンター事業での他者同士の関係づくりと関係性の深まりはどのようにセンターに出会い（入口）離れていくのか（出口）によっても違いがあり、本人が何を求めているかにもよるが、以下の図7-1のような形に深まると考えられる（第4章も参照のこと）。

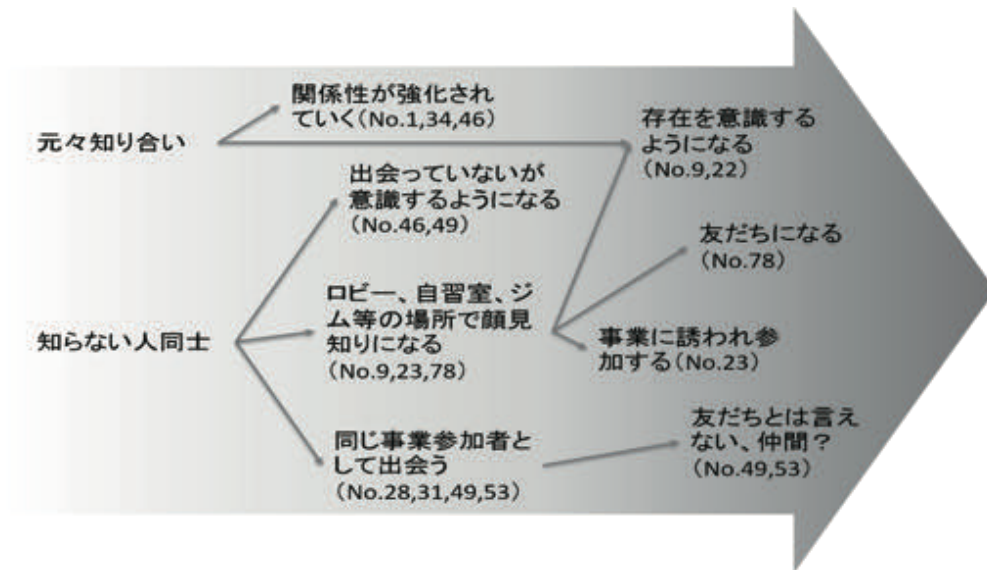


図 7-1





## 5節 まとめ 他者との関わりから見たユースワークの価値

今回話を聞いた若者たちの中には、家庭や学校での居づらさを明確に話した若者はいなかった。しかし、インタビューに応じた若者すべてに受け入れられた感が語られていたことに加え、自分以外の他者についてもセンターやユースワーカー、活動や事業に参加する他者が受け入れていた、受け止めていたと感じていたことから、“どんな人でも受け止めてもらえる場”と感じていたのではないだろうか。センターの利用頻度、利用の仕方の変化、事業への参加の仕方の変化に他者が介在していることは若者たちの語りから読み取れることだろう。単なる物理的な場所としてだけでなく、その場を他者同士が介在することを前提にどのような場にするかユースワーカーが考えていることが影響を与えていると考えられる。また、若者自身が、ユースワーカーが他の利用者に直接的に間接的に働きかけていることを見聞きすることで、若者たちがどのように“居る＝明確な目的をもっていなくても居ることができる”か“利用する＝明確な目的を持ちその目的を達成するために場やワーカーを活用する”かを選ぶことにつながっているのではないだろうか（4章も参照）。

今日の子ども・若者が置かれる状況は、家、学校、塾、予備校、アルバイト先等が他者と出会い、関わり合う主な場である。学校や塾は概ね同じ年齢の集団が作られる。また、小学校卒業後、中学校3年間、高校3年間では、同世代として括られる年齢差の構成で、先輩後輩関係が作られ、部活や委員会活動では、固定された関係性の中で物事に打ち込んでいくことになる。そういった日本の学校社会の中で、3歳以上離れた年の人、たとえば中学生にとっての高校生や大学生、高校生にとっての大学生や社会人や、社会人にとっての中学生などと顔見知りになり、気かけ、あるいは何か同じ目的の活動に参加する場をつくることはユースワークの価値の一つと言えるだろう。

また、センターでは、他者との関係がこじれたとしてもその関係性を継続させたままにするのではなく、一度その関係性をリセットするために活動から離れたり、センターを利用しなくなったりすることで、客観的に関係性を捉え直すことができる。また、特定のワーカー以外のワーカーも含めた新たな他者との関係性を築く中で、それまでの関係性を修復する力をつけさせることができる。これは、ユースワーカーが他者との関係づくりを強要しないことから生まれているのではないだろうか。たとえば、学校のクラスでは、隣の席になった者同士を班として、班活動をさせたり、クラスそのものも子ども・若者たち自身が選べるのではなく、教員が決めた集団の中に属し、クラスメイトとの関わりを否が応でも持つことを強要されたりする。そして、その環境から「離れる」という選択肢が持ちにくい状況がある。しかし、センターは、若者本人の意志で利用し、利用し続けたいと思い、行きたくないときには行かず、また行こうと思ったときには行ける場所である。また、ユースワーカーから若者に対して「参加してほしい」というメッセージを出して声をかけたとしても、“参加しない”という選択肢が彼らの中にはある。一方で、同じ事業や活動に参加する他者からの働きかけもおこなわれる。そうした自分以外の他者からの働きかけを若者自身が受け取り、どのように行動するかを若者自身が選択するのである。筆者の体験からも、主にユースワーカーを含む他者との人間関係での躓きがあったときには、センターを数ヶ月利用しないこともあったが、ほとぼりが冷めた頃に利用を再開することがあった。多様な他者との出会い





があるからこそ、新たな関係性を築いて逃避し、その間に他の他者との関係性からそれまでの関係のこじれを内省する時間をとることができたのではないだろうか。

ユースワーカー自体が若者にとっての他者を意識していたかどうかについては、今後の課題として検討するが、ワーカー自身が、接点のない若者同士が出会ったり、関わり合ったりすることが「意味のあること」であると当たり前のように感じているからこそ、多くは語られなかっただけではないかと考える。

### おわりに

今回、利用者・参加者であった当事者として若者たちへのインタビューをおこなった中で、センターで出会った異年齢、異属性の人たちと共に何かを作り上げる体験だからこそ、“友だち”という言葉で表現できないという感覚や、同世代同士で価値観をぶつかり合わせることの体験についての語られたことについて、一つ一つ共感しながら話を聞くことが多かった。異なるセンターの中で、異なるユースワーカー、異なる年齢、異なる場所、異なる取り組み、異なる利用者・参加者たちでつくられていた活動であるにもかかわらず、“同じような体験”として語り合えることがあること。それこそがワーカーと利用者・参加者の一対一の関係性での働きかけではなく、場や環境、そしてその場をともにする他者関係を前提としたユースワークの理念をユースワーカー同士が共有し、手法について研究し続けている成果としてあらわれているのではないだろうか。





## 8章 自身の変容とユースワークの関係

石山 裕菜（同志社大学心理学研究科博士後期課程）

### 1節 目的

心理社会的発達理論において、Erikson（1959）は人生を8つの段階に分け、それぞれの段階において起こってくる心理的危機や、重要な対人関係、特徴を示している。

彼は、自己が正常に発達するためには、それぞれの段階で起こってくる心理的危機を乗り越えなければならないとし、とりわけ青年期（Eriksonの理論では12歳から20代半ばごろ）は、「自分は過去も現在も未来も変わらず自分であり、なおかつ社会の中で受け入れられている」と感じられることが重要であるとしている。また青年期は、その後の人生でどのような職に就き、どのような価値観を持ち、誰とどのような家族もしくは友人関係を築いていくのかを決定する重要な時期でもある。そのため、この段階でどのような人と出会い、どのような経験をし、どのように過ごすかが、その後の人生において、大変重要な役割を担っていると考えられる。

本章では、ユースワークと出会うことが本人の価値形成や、社会における受容感、人間形成にどのような影響を与えたのかをインタビューから読み取り、推察することを目的とした。なお、ユースワークは若者の変容を目的として行われているわけではなく、変容するから価値があるとしているわけでもないことを断っておく。

### 2節 人との関わりによって変容が起こったと感じている事例

人は社会の中で生きている。二人以上人がいると、必ずそこには社会が形成される。無人島で暮らさない限り、人が生きていく上で必ず社会は作られる。そのため、他者との関わりは必須であり、最も影響を受ける部分であると考えられる。そうであれば、人の変容を語る上で、人との関わりについて考えることは不可避である。そこで、本節では、特に、インタビュー対象者が人との関わりによって変容が起こったと感じている事例について取りあげる。その後、3節以降では、本人として、人が対象者ではなく、別のものが変容の要因であると考えているできごとについて検討することとした。

図8-1は、人との関わりによって、変容が起こったと感じている事例において、人間関係が広がったと感じることで、どのような影響が起こった可能性があるかを示したものである。



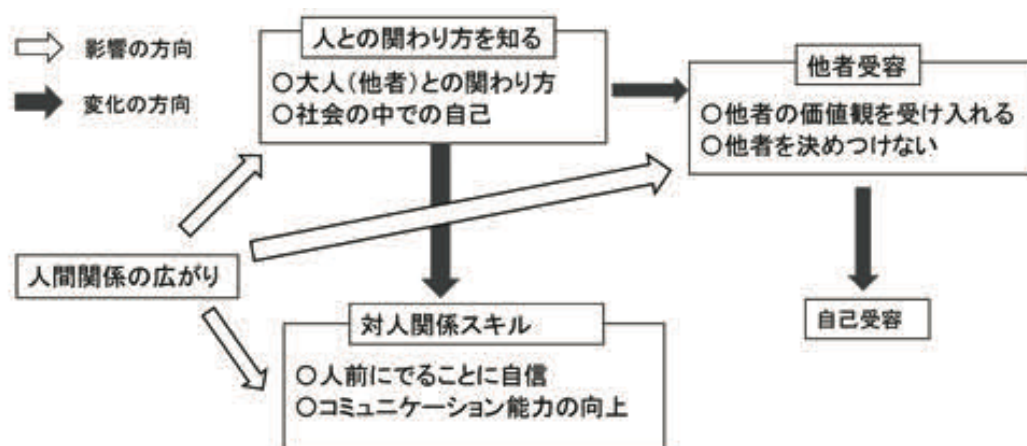


図8-1 人間関係の広がりがどのように変容へと繋がっているか

まず、“人間関係が広がる”もしくは、“職場もしくは学校と自宅を行き来していたのでは得られない人との関わりが起こる”こと（本章2-1）により、人と関わる機会を得ることができると考えられる。さらに、それによって、“人との関わり方”を知り、また、「対人関係スキル」が獲得されと考えられる（本章2-2）。さらに、“人との関わり方”を知ることにより、他者を受容し、ひいてはそれが自己受容に繋がっている可能性がある（本章2-3）。詳細については、本文中で触れることとする。

## 2-1. 人との関わり合いが増加したと感じている事例

まず、多くの対象者から共通して聞き取ることができたのが、人との関わり合いが増えたという項目であった。例えば、No.9 は、知っている人のいない新しい土地に引っ越して来たが、青少年活動センター（以下センター）に来たことで、「地域に溶け込めた」と語っている。普通に、会社と家を往復していれば、地域の行事や、人々と出会うことはなかったであろう。しかしながら、センターに行き、そこで様々な人と出会い、新たな経験を得ることができたと言う。

さらに No.46 は、「ここらへんの友達が増えた」と話しており、周辺地域の人々が“ハブ”としてセンターを利用していることがうかがえる。

また、No.28 は、「最初ちっちゃい世界にいた自分が外の世界を見たような…（略）…学校の友達だけで人間関係が終わって、先生と、親と、バイト先のちょっとの人と。…（略）…くでもユースサービス協会は>いろんな大学からいろんな事勉強してるいろんなタイプの、個性のある人がいたので、うーん。その人達がすごい面白かった」と述べ、「学校」という世界の外で、普段出会えない人と出会うことができたと言っている。

以上より、ユースサービスを利用することで、地域の人々と繋がりができ、さらに、普通に学校や会社などに行っているだけでは出会えない人と出会うという、人間関係の広がりをもたらすのではないかと考えられる。





## 2-2. ユースワーカーを介し、人との関わり方を知り、人と関わっていく上で必要なものを学んだり、行動したりしている事例

### (1) ユースワーカーの人との関わり方を見ることで他者との関わりを学んだと考えている事例

ユースワークでは、若者の自己決定や自己選択を促し、学びの機会を設定するために、ユースワーカー（以下ワーカー）は、若者との関わり合いを意図して行ったり、行わなかったりする。それらの行動は、若者の自主性を伸ばし、若者自身の他者との関わり方に影響を与えている可能性がある。

例えば、No.49 はユースサービスを利用する中で、「対応の仕方というか、こう、すごい親身になって一人に関わってくれるっていうのが、私だけじゃなくて、ホント。で、ホントに思い返してみたらいろんなワーカーさんに関わったなと思って、その人たちが振り返っても、やっぱちゃんとすごい向き合ってくれたっていうか、ちゃんと関わってくれたっていう印象が強くある」と話している。

No.49 は、現在、窓口で業務を行うことのある仕事についているが、その際、以下のようなことに注意を払っているとしている。

そこで毎回来るような人ももちろんいて…（略）…積極的に関わりたいなと私は思うんですけど。…

（略）…この人また来んなーとか、今日はどうしたんだろうなーみたいなんで、気づくようになったっていうのと、そういうの、人に興味を持つようになったっていうか、そういうのはそういう職員さんとかワーカーさんを見てて、見習いたいなと思った（No.49）。

こうした気づきを「現在の仕事に生かしている」と No.49 は述べている。このように、ワーカーが“人と向き合い”関わってくれた”という印象を持つことで、それを見習うという行動が表出されている。

### (2) ユースワーカーとやりとりをすることにより他者との関わりを学んだと考えている事例

No.22 は「大人の関わり方がわからん、大人の関わり方って言うか、関わり、うーん、関わり方がたぶんわからなかったと思う」と述べており、ワーカーと出会うことによって、大人との関わり方を学んだとしている。ただ、この場合は、No.49 のように、ワーカーと他者との関わり方を見て、学んだ、もしくは感じたわけではなく、“大人”という存在と出会い、実際に接していく上で、社会的にふさわしい関わり方を学んだのであろう。いや、むしろ、この相手にこの状況ならばこの程度言っても許される、これ以上は許されないという線引きを、試行錯誤の末、獲得したのかもしれない。

ところで、No.22 にとって、ワーカーは“一般的な大人”とは違う存在であった。No.22 にとって出会う大人は、学校の「先生」と「親」、そして「ワーカー」であったようだ。No.22 にとって「先生」は、「生徒と教師」という枠組みの中で語られる存在であり、「親しくなれへん」存在であった。一方で、「ワーカー」は「ノリで言ったらノリで返してくれる人」と話している。また、「親」は、「自分は親にあんま話さへんタイプ、なんすよ。学校のこととか、そういうなんも話さへんけど、なんか、ここやったら、たまに話したりとか、悩みとかも、言えるみたい。個人的に。だから家ではホンマになにがあったか





も言わへんみたいなの。」「言って、＜親に＞わーって言われるのはわかってるから、言ってなかったかな」と話している。

そうした一方で、No.22 は、ワーカーには、話をしやすいと語っている。「大人やけど、そんな、大人じゃない感じ」「なんか、親しみやすいのかな。」「＜普通の大人は＞なんか、真面目すぎ、やから、ここは、言っても、真面目やけど、ちゃんと、なんか、なんつったらいいんやろ、冗談の時も、冗談で返してくれるし、でもやっぱ、普通の大人、また違う大人は、そういうのはなんか、無理やなあみたいなの」と話している。No.22 は、「大人との関わり」を持ったことにより、「＜大人相手でも＞冗談も言えるし、…（略）…言ったらアカンこともあるし、度が過ぎてるってことも、わかるようになった、かな」と話している。また、こうした話から、No.22 は、ある人が属している、社会的・文化的集団の中で、“ある文脈において、ある人と接する際には、このように振る舞うことが望ましい”という不文律を、ワーカーとの実際のやり取りの中で、学習したと考えられる。

前で述べたように、ワーカーはその関わりにおいて、若者の持つ価値観を否定せず、若者の存在を尊重している。そのようなワーカーの姿勢が、No.22 にしっかりと話のできる“大人”として、ワーカーの存在を認識させたのかもしれない。そのため、ユースワーカーとの会話を通して、社会性、社交的なスキルを獲得する際の1つの要因となったのではないだろうか。

Havighurst (1953) は、人生を6つの発達段階に分け、それぞれの段階で、身体的成熟や技能に関する課題、社会・文化において起こってくる課題、個人の価値や選択に関する課題を具体的に設定している。特に青年期は、経済的独立に関する自信を確立したり、職業に就く準備をしたり、社会的に責任のある行動を求め、成し遂げたりすることが課題として設定されており (Havighurst, 1953)、社会の中で自分の行動がどのように見られるか、判断されるかを学んでいく時期でもあると考えられる。青年期において出会う親や教師以外の大人として、両者とは違う存在であるワーカーとの関わりは、新しい関わり方を知るよい機会となっている可能性がある（ワーカーの存在については6章参照）。

それでは、ユースワーカーとは“他の大人”と比較し、どのような存在であったのだろうか。

No.49 は、「困ったことがあったら相談したい、大人…じゃないけど、友達でもない、学校、学生のおかげだったら学校の先生でもない、今だったら職場の人でもない、なくて、全然違うけど話を聞いてもらえる」と話している。このように、「話を聞いてもらえる」という感覚は他の利用者にもある。

例えば No.23 は学校の先生とユースワーカーの違いについて「怒らないところですかね。学校の先生はもっとがみがみ言ってくる」と話している。

また、No.34 は、「喫茶の時にしろ、そのあの職員の時にしろ、話しやすかったりしましたし、で、かつ大人の視点でこうじゃないのって」「普通に学校とかで、あの、うーん、例えば…、なんか学校で、例えば、先生とかと、あのあー友だち、女子たちとこう揉めるっていうか、なんか、軽く喧嘩したりしたときは、まあ、なんか『向こうはこういう気持ちやったんちゃうん』みたいな言ってくださったり。その喫茶の時にしろ、そのあの職員の時にしろ、話しやすかったりしましたし、で、かつ大人の視点でこうじゃないのって」と話している。





さらに、学校教師と比較し、「どうしても悪い意味ではないんですけど、先生だとなんというか固いというか、固い意見で、なんですかね、論理的というのでしょうか、正攻法というか」と話している。

ここにも、頭から支援者の意見を押しつけるのではなく、相手の立場・意見を尊重するというユースワークの姿勢が表れている。

こうした一方で、No.1 は、学校教師とワーカーの相違を聞かれ、上述した対象者とは異なった意見を述べている。まず、学校教師とワーカーの類似点について以下のように述べている。

やっぱ子どもに、その一、…ルールとか規律みたいな、マナー的なところを、教えてあげるっていう面に関しては、ちょっと似てるところあるんじゃないかな、みたいな。やっぱ外出ても、例えば、今このインタビューさえも、書類作って、許可お願いします、みたいな、そういう、同意お願いします、で、同意しての、こう、始まる、みたいな。〇〇<センター名>とかでも、やっぱちゃんと書類、めんどくさい！とか言いながらでも書いてたんですけど、なんで住所書かなあかんねん！みたいな。でもやっぱああいう手続きをちゃんとしてから借りるっていうのが、やっぱのちのち、ねえ、どっかいろんなところでも役立ちますし。役立つっていうか、当たり前のことですし。

で借りた後はやっぱちゃんと鍵閉めて、とか。ねえ。これは返す、みたいな。そういうところはやっぱ、そう、似てるんじゃないかな (No.1)。

以上のように述べ、マナーや社会におけるルールを教える点が似ているとしている。規律を教えることがあるというのが、学校教師でも、ワーカーでもあると No.1 は考えたようだ。

一方で異なっている点として、ワーカーのことを「…まあでも、働いてる感じは、僕はあれですけどね、あの一、〇〇<センター名>の、職員の人らは、飲食店と一緒にちゃうんかな、みたいな」「はい。注文されたもん応えて。持ってったら終わり、ぐらいの。仕事のには」「和室貸して、言うたら、あ、書いて、みたいな。鍵ハイ。じゃあバイバイ。みたいな」とどちらかというと店員的に考えているのに対し、学校教員を「学校の先生はやっぱ一人ひとりの子どもと関わっていかないといけないですし、なんかあれば親からも苦情来ますし」と述べ、より子どもと関わることに重点を置いていると感じている。

これは No.1 が教員を目指していることと関係していると考えられる。No.1 は学校教師に対し、いじめられていたなどではないが、学校に行くのが面倒臭かった時期に担任の先生に学校に来るように誘ってもらったこと、その後職場体験を通じて教職にあこがれを抱いたことなどから、自分自身が教師に関わってもらい、受け入れてもらったというポジティブな印象を持っており、自らも教師を心ざしている。一方で、センターでは、主に施設を借りに来ており、この様な利用の在り方がワーカーの印象を「施設管理の人」と規定した可能性がある。しかしながら、No.1 は、インタビューの中で、特定のユースワーカーと関わるのを楽しみにし、話をしたと語っている。ワーカーのことを“施設管理者”のように語っている一方で、特定のワーカーへ“強いあこがれ”を抱いていたことがうかがえる。そのワーカーとの関係性を大切にしていたという語りをしていることから、全てのワーカーを「施設管理の人」として考え





ていたわけではなく、そうでない関係性を本人が感じていた可能性がある（詳細は6章）。こうしたことを確かめるためにも、ワーカーとの語りと照らし合わせ、より詳細な検討が必要である。

この様に、学校教師や親以外のワーカーの存在は、両者には話ができない場合の居場所や一味違った大人との関わりを持ち、社会に出る上での礎となっているのではないだろうか。

### 2-3. プログラムを通じた人との関わりによって変化を感じている事例

ここでは、上記で取り上げた、ワーカーを直接介してではなく、センターの利用とそこでの他者との関わりによって、生じた変容について取り上げる。

No.28 は、普段は出会えないような人と出会うことによって、以下の様な体験をしたと述べている。

多分最初に〇〇<センター名>でのボランティアの経験があったから、初対面で知り合う人とも、私  
どっちかっていうと人見知りをするタイプなんですけどね、昔に比べたらやっぱり、話せるようにな  
ったというか…（略）…コミュニケーション、人とのコミュニケーションを、だいたい最初に比べたら  
取れるようになったんじゃないかなって思います。今でもやっぱり苦勞する事あるんですけど、人との  
コミュニケーションについて、でもやっぱり、行かなかったら全然出来なかったんじゃないかなって  
いうのはあるんで（No.28）。

社会人になってからの事とか。同世代の人としか話が出来ないとか、うーん、立場が違う人とはどう  
していいかわからないとか。そう思う事も今もあるんですけど、やっぱり、〇〇<センター名>の事  
業 F<クリスマスの日に子どもにプレゼントを渡すプロジェクト>とか、人づての繋がりとかを通じ  
て、結構知らない人と知り合う事が出来たので、そこが一番大きかったのかなって思いますね  
（No.28）。

No.28 は色々な人と出会い、話をする経験をする事でコミュニケーションをとることができるよ  
うになったことを思い出し、語っている。

加えて、No.49 は、以下のように話している。

前に出てくる人多かったじゃないですか、<ダンスの>メンバーに。演劇やってる人とか。そういう  
経験ある、舞台の経験がある人が多くて、私にはみんな、舞台慣れしてますみたいな感じ、もう慣れ  
てますこういうの、みたいに見えたんですよ、最初。で、あ、やばいなこれって思って、これこのま  
まじゃ私おいてけぼりにされるなと思って、これちょっとやばいぞって思って。で、もう自分出して  
いけないともう落ちてしまうこれ、この場では、と思ってそうだったんやと思います。前に前に出て  
いかなあかんねやなと思って。そんなタイプではないんですけど確かに。どっちかって言うとあまり  
前に、そんなに出たくないタイプなんです。出ないと、そう、そうなんです。なんか、特に創作、公







演に向けて作っていく過程に行ったら、こう、言われたことそのままできるんじゃ多分作れないなと思ったんで、そこを越えるために、なんかいろいろやってたんだと思います (No.49)。

すなわち、常に消極的に過ごすのではなく、前に出ていくこともできるようになったというように自分のコミュニケーションのレパートリーが増えたと述べている (7章3節も参照)。

他者の受容に関して、No.23 は事業Eを通じ、初対面で人を決めつけたりすることもなく、また、他者の価値観を受け入れることができるようになったと語っている。事業Eは、お茶をしながら日本語での日常会話を練習したり、日本の若者と交流したりする場を外国人に提供していた。これにより、多様な価値観に触れ、多元的な見方が可能になったと考えられる。

この事業を通じた経験を No.23 は以下のように語っている。

ふつうに出会ってこの人はこういう人なんだって、いろいろ感じるどころってあるじゃないですか、あー、この人しゃべり方きついなとか、すぐ野球の話するなとか。で、だからいいやってじゃなくて、そういう人やねんってで、そういう人なんやって意識をもちながら、人との付き合い方をするってのは、センターに来て、事業Eに入って、今に至るあれですかね。留学生だと結構価値観が違うんで。で、価値観が違って、ああ、この人全然違うんやって。じゃあいいやってよけるんじゃなくて、価値観の違う人と、そういう人という意識を持ちながら接していたら、他の人が出てきたときに、結構ああ<価値観が>広がったって (No.23)。

この事業Eのように、国と国、文化と文化といったわかりやすい価値観の違いだけではなく、年齢、性別、社会的身分、門地、地域といった様々な価値観に触れることができるというのが、センターの特徴かもしれない。センターでは、“普通に生活していたら”、すなわち、学校と家を往復しているだけでは出会わないような人と出会い、関わり合う機会を得ることで、年代や生活水準、果ては個人の持つ価値観の違いに触れる機会を与え、多様性を受け入れる土壌となるのではないだろうか。

こうした他者の受容は、自己の受容へとつながる可能性がある。No.53 は、自分の体験に関して、以下のように語っている。

自分が大っ嫌いなまま、事業Zやってたから、そこでA<人名>のあの、必死、必死なところ見て、どっかで変わっていったのかも知れないですね。… (略) …<Aの必死に必死に命をかけて事業Zをしているところを見て>なんかこう、かっこええなっていうか、正直に生きるってかっこいいな、かっこいいっていうか、まあ、そんなときはそういう解釈ですよ、かっこいいなーって思ったし、なんかそれも影響あるのかもしれないですね、今なにを言われてもあの、正直に生きてるっていうのが。A、ありがたいな (笑) (No.53)。





No.53 は自分が死んでも「人口が減る」だけということを口癖としており、そのようなことをよく話していたのは、「そんなことないよってやっぱ言われたい、自分をもっと認めて欲しかった」からだと振り返っている。昔は、そのように出すことができなかったけれども、「今はその、なんて言うのかな、人に認めてもらわんと自分の価値観があ、評価できないのかっていうところを、出した」というのが変わったところだと話している。これを出すことができるようになったおかげで、「全然そこはもう、出ないというか、そのものがばかばかしいと思えるようになって、そこにフォーカスがいかなくなったというか、生きてんねんから生きることにはフォーカスせなあかんというか、ご飯食べなあかんとか、家賃払わなあかんってことにフォーカスが当たってきてるので」と考えるようになったと述べている。この様に、実際に生きて行くための日常ごとに焦点を当てることによって、他者から認めてもらうことによって、自分の価値観を評価するという考え方が変わってきたという様に述べている一方で、No.53 は次のように続けている。

事業Zってというのは私の中で今でもすごく大きいウェイトがあって、それでまあ、ある一種の、その時点の私のターニングポイントというか、あの、価値観とか生き方が変わった部分であったと思うんですよね。そんなとき本当にもう、ノーライフノーZみたいな感じで、もうずっとそれで生きていくって思ってたので、なんかやっぱりある意味私の価値観も、A<人名>みたいに大っぴらには出さへんかったけど (No.53)。

No.53 は、事業Zに参加すること、そしてA<人名>と出会ったことによって、受け入れきれなかった自分を受容するきっかけとなっていった可能性がある。

#### 2-4. まとめ

このように、センターは人間関係の広がりをもたらす場を提供することで、人の関わり方を学ぶ機会を提供したり、対人関係スキルを獲得したりする場を提供していると考えられる。それにより、他者やその価値観を受容し、ひいては、それが自己受容につながっていくのではないだろうか。実際の自分自身を受容し、また、社会の中で自分が受容されているという感覚は青少年の発達を助け、後押しする機会を提供していると考えられる。

### 3節 新しい選択肢を知ることによる変容

本節では、センターと出会うことによって、新しい知識、選択肢を知ったという事例について取り上げる。

No.31 は、センターに関わる前から、子どもと関わる仕事をしたいと考えていた。そのためには、先生にならなければいけないと考えていたが、センターに来たことで、以下のように意識が変わっていった。





そうじゃない場所もあるよって知ったのもセンターきっかけで、なんかこう先生寄りより、どっちかっていうとそういう、子どもの居場所づくりみたいなんがやりたいな一みたいに思い始めたのは、センターでボランティアやってたおかげやなって思いますし、今も、そこからあとの居場所づくりに関わっていくなかで、居場所作りがすごい楽しいなって思って、…（略）…その、自分のなかの居場所、キーワードの居場所っていうのは多分こう、もちろんずっとこう、つながってあるのはそういう経験があるからかな、って思います（No.31）。

子どもと関わる仕事がしたいという芯のようなものは変わってはいないが、ユースサービスに携わることで、子どもに関わる仕事にも種類があり、教師以外の選択肢を知ることができたと話している。また、No.46 は次のように語っている。

高校…最近、まあ前喋った時に、その一種の避難場所ちゃう？みたいな話をしてたと思うんですよ、ここが。学校からドロップアウトした時にみたいな。で、なんやっけ毎週何曜日か忘れちゃったけどなんかあるじゃないですか。そういうとか。話もしてたと思うんですけど。まあそういう感じの。今ここはそうなんやろうなって。

で、そういう場があって、こういう職員がいてっていうのをちょっとこう見た中で教師を目指しているというのは、あの一学校は学校でありつつ。

僕、まあこんなこと言ったら教育委員会の方針と合ってるか知らないですけど、まあ結局学校に行きたくなかったら別にここへ来て勉強してもいいんじゃないかって。別に人間で一瞬逃げてもいいやろって。てか家からも出たくないとかって。でも学校行くとってしんどいじゃないですか。だからとりあえずこっちに行ってみて。この家から出るっていうのをまずクリア出来たら、っていうのがあればいいかなって（No.46）。

No.46 は教員になりたいとセンターを利用する前からずっと考えているが、そうした中で、いわゆる＜普通とは違う道＞を選択する場合があることをセンターの利用によって知ったと述べている。

このように、新しい選択肢を知ることが、第2節で述べた、価値観の多様性や他者の受容へと繋がっていくのではないだろうか。





#### 4節 役割を与えられることによって起こった変容

ユースワークでは、成長を期待するという意図を持ち、若者へ学びの機会を積極体に提供し、様々な経験の機会を見守ることがある。

No.23 は、あるイベントの企画運営をするにあたり、リーダーに抜擢されるという体験をしている。このようにリーダーに抜擢されたことによって、次のような意識の変化があったことを話している。

今までは、会議を仕切ってくれる人がいて、「さあ今日はこれについて考えるよって、じゃあ、こうこうこんなみんな、なんかない？」って聞かれて、はじめて発する側が、初めて立場が変わるわけじゃないですか。なんで考えること増えるし、且つ、リーダーってきいて、一番はじめに思い浮かぶのが、責任なんで。なにかあったときに、やばいんじゃないか (No.23)。

No.23 はこうした役割を与えられ経験を積むことで、「一つは、人前で話すことが苦でなくなった。で、むしろ話したい側になった」と話している。

この事例ではリーダーであったが、それ以外にも役割を与えられることによって、変容が起こる可能性はある。Zimbardo(2008)は、普通の人でも、特定の役割や肩書を与えられると、その役割に合わせて行動すると述べている。一般的にはスタンフォード監獄実験で見られたような役割のネガティブな効果を指すことが多いが、Zimbardo(2008)は、役割のポジティブな効果も期待できると述べ、新しい役割に触れることで新しい自分自身に触れることができる可能性が示唆されている。

このような役割の付与はユースサービスの文脈において、しばしば意図的に行われる。ユースワーカーは個人の課題を考え、若者個人にとっての成長に必要なのは一体何であるのか考える。そして、その課題を達成し、成長を促す役割を与えることがある。また、“グループ活動”や“場”といった関わり合いについて考慮し、環境の設定を行うことになる。上述したインタビューでの発言は、このような意図が、実際に若者の成長につながった好例であると言える。

また、No.34 は自己の変化について以下のように語っている。

自分達で計画して、何かをやるっていう癖がついたというか。例えば学校だと時間割が決まっていたし、部活もまあ、形は決まっていたし。今までだったらセンターに行く前だったら学校行って、部活して家に帰って終わりなんですけど、そうじゃなくて、わりとそう、部活後の夜の時間をなんかテニスにしろ、勉強にしろ、なんていうんですかね。今日はじゃあ、こっちに行って、勉強して、ここぐらいからちょっとテニスしようかみたいななんか、結構考えたり、今、今週はテストが近いから頑張ってテニスはやめておこうとか。

自分達で時間割を作ったりとかできました (No.34)。

No.34 は高校生の時に、センターを利用しており、自分で時間割を考えて過ごすという経験は少な







ったと考えられる。そのため、自分たちでやること、やる時間を決めて行動することで自分で考える癖や、計画力が身についた可能性がある。こうしたことも、若者の自己決定、自主性を高める良い機会となっているのではなかろうか。

## 5節 まとめ

以上より、ユースサービスは、様々な価値、背景を持った人々との出会いを若者に提供している可能性がある。そうした上で、若者が他者や自己を受容し、社会の中に受け入れられていくという感覚を得る機会を提供すると共に、社会で生きていく上で必要なコミュニケーションを培う場所を提供していると考えられる。こうした体験を通して、“自分は過去から未来永劫自分自身である”という感覚や、“自分は何を価値とし、生きて行きたいのか”“自分は社会の中でどのように振る舞っていくのか”などを考える機会を与え、青少年の自己選択を助ける役割を果たしていると考えられる。

## 6節 限界と今後の展開

本研究は、インタビューを使用し、研究を行っている。そのため、本章では、インタビューで語られた内容を基に、推察を行った。さらに、ワーカーのインタビューからは語られているが、本人のインタビューからは語られなかったため、本章で検討を行わなかった項目があった。そのため、変容に影響を与えたであろうその他の項目や、周りの人間から見て、その人の変容に影響があったと思われるものについては検討していない。以後の研究では、このように本人と関係したワーカーや職員の話などと比較検討した上で、本人に再度インタビューするなどさらなる検討が望まれる。

## 引用文献

- Erikson, E. H. (1959) Identity and the life cycle, New York: International University Press.  
(小此木啓吾訳 1973 自我同一性 誠信書房)
- Havighurst, R.J. (1953). Human Development and Education; Longmans Green: New York, NY, USA ,Zimbardo, P (2008) The Lucifer Effect: Understanding How Good People Turn Evil :New York Random House Trade Paperbacks (鬼澤忍訳 ルシファー・エフェクト ふつうの人が悪魔に変わるとき 2015 海と月社)





## 9章 ユースサービスへの期待とニーズ

石山 裕菜（同志社大学心理学研究科博士後期課程）

### 1節 目的

本章では、ユースサービスの期待とニーズに関する語りに注目して推察する。この場合におけるニーズとは、“人々が生活したり、仕事をしたりする上で感じる現状の様々な不満や欠乏のことで、理想的な状態と比較したときのギャップ”<sup>42</sup>とする。

よって、顕在的に表れたもののみを本章では扱い、その他、現在の利用者がユースサービスを利用している要因や、潜在的なニーズについては軽く触れるにとどめることとする（潜在的なニーズについては4章や他章参照）。

### 2節 設備としてのニーズ

本節では若者のニーズの中でも、設備や施設といったハード面のニーズに着目する。

京都市ユースサービス協会は、1章で述べたように、市内に7つの青少年活動センターを持っている。それぞれのセンターにはそれぞれの特徴があり、その特徴に合わせて設備面の充実度や刷新度も異なっている。

No.22はWi-fi環境の整備が必要であると述べている。これは、No.22が、センターを「くみんなが>集まる場所」であると認識していることに関係してくるのではないだろうか。近年では、スマートフォンの普及に伴い、SNS（ソーシャルワーキングサービス）を利用したコミュニケーションの方法が青少年にも浸透している<sup>43</sup>。

そのような現状にあって、Wi-fiのない環境であっても、スマートフォンを利用する機会は多く、またそのような環境下でスマートフォンを使用することで、ネットを利用する際の通信速度制限に達しやすくなってしまう。SNSを利用して様々な情報を仕入れ、自らもシェアし、発信している若者が集まる場所には、Wi-fiが必要であるというニーズが垣間見られる。

また、No.23はサンドバック、No.78は、ジムのマシンの刷新と発表で使えるワイヤレスマイクが必要であると述べている。常に最新のものである必要はないが、ある程度使いやすく、新しいものがあるというというのが若者のニーズであるようだ。特に、自分が何をどんな目的で使用しているのかにより、注目すべき点は違ってくるであろう。

またNo.34は部屋についての詳細な管理表が見られる形で存在し、部屋の利用に有用であるとよいと述べている。No.34が利用していた頃、部屋の利用状況が現代のようにインターネット上で簡単に見ら

<sup>42</sup> マーケティング用語集 [http://cyber-synapse.com/dictionary/ja-na/needs\\_and\\_wants.html](http://cyber-synapse.com/dictionary/ja-na/needs_and_wants.html) 2017年2月10日閲覧

<sup>43</sup> 官報 <http://www.soumu.go.jp/JohotsusIntokei/whitepaper/ja/h27/html/nc242220.html> 2017年2月10日閲覧





れる時代ではなかった。そのため、このようなニーズが出てきた可能性がある。現在では、インターネット上で、部屋利用についてそれぞれのセンターが管理を行っており、利用できる部屋がわかりやすくなっている。この意味で、このニーズは現在では満たされているものかもしれない。

### 3節 イベントやプログラムとしてのニーズ

次に、イベントや、プログラムに焦点を当て、検討を行う。

No.28 はモノづくり系のワークショップがあったらよいと述べている。「例えばものづくり系で。なんでしょうね、具体例…なんか例えば、ちょっと小物、まあレザークラフトをやるとか」と話しており、自分の興味があることがモノづくりであるため、そのようなプログラムがあれば参加したかったと述べている。

また、No.31 は、お泊り企画を「イベント、なんか、お祭りみたいなイベントみたいなとか、を私がやるのが好きなので、そんな感じの企画かな…?」と述べている。このように、ある特定のことに興味がある対象者は No.28 や No.31 以外にも多く存在しており、それぞれ一定数いると考えられるため、若者のニッチなニーズを満たすようなプログラムやイベントを開催するというのも新たな利用者層の開拓には効果的かもしれない。

No.49 は、「一緒に思っていることを話し」たり、「ハイキングに行く」ような形で、中学生と高校生が関われるようなプログラムがあったらよいと話している。このようなプログラムそのものは、あったようだが、「中学生とか高校生と、私の大学のときとかが一緒にやるなんか、全部一緒にできるんですけど、その、やっぱり中学生とか高校生はあんまり参加してなかった印象、そこが一緒になって何かをやる、じゃないけど……勉強教えるとかはあったのはあったんですけど、そういうのじゃなくてこう、一緒に話し合うとか、お互いどういうこと思ってるのかとか、ハイキングに行くとか、何か分からないんですけど、そういうので関わるようなプログラム」があったらよいと話している。中学生や高校生にとって、自分と年の近いけれども、少し文化の違う（年代、学校を含め）人に触れることは、新たな気づきを生む、好い機会であると考えられる。

また、No.46 は、ユースサービス協会が提供している学習支援事業において、現状のように、学校と離れた形で進めるのではなく、学校と連携した形での学習支援があったら良いと述べている。加えて、No.53 は、「こう自分の可能性を、もう閉じてしまうような子たちって、いっぱいいると思うんですけど、別に将来に関わるうが関わるまいが、今その、出したい芸術観というか、感性、自分の感性を引き出してやる、ここやったらなんぼでも出したらいいで、って、ルールもなんもないで」というイベントがあったらよいと話す。それも、一回限りのイベントで把握、クラスのような形で定期的に行うことで、カウンセリングやヒアリングを行い、子どもたちが自分の価値観や可能性を見出せるプログラムを行いたいと話している。こうした長期的な関係性作りをプログラムで行うことで、短期的なものとは違った効果が表れてくる可能性がある。

最後に、No.78 は、若い人たちが自分で発信することが苦手だと感じており、自分でできるようなノ





ノウハウを教えてくれる教室のようなものがあればよいと話している。現代の若者は、SNS の様に簡単に情報を発信するツールが普及しているため、自分を発信することが得意であるように感じられるかもしれない。そうした一方で、若者年代の SNS 人気はより、文字を中心としたものから、ヴィジュアルを重視しているものへと移ってきているとも言われている<sup>44</sup>。こうしたことを受けて、自分の考えを自分の言葉で発信する機会とその方法の教室が必要であると No.78 は考えたのではないだろうか。

#### 4節 ユースワーカーの関わりに関するニーズ

本節では、ユースワーカーの関わり方に関するニーズに関する語りを抽出する（現在の利用者がウォンツとして持っているものは他章を参照）。

No.22 は「＜職員も＞もっと普通に積極的でいいんと違うってなる。なんか、引っ込み思案って言うか…それやったらあかんやろ」と話し、より積極的に利用者に関わっていく必要性を語っている。このことから、No.22 は、ワーカーの仕事を＜利用者と関わる事＞であると考えている。

すなわち、若者の中で、ワーカーとの関わり、それもワーカー側からの関わりを求めている可能性が考えられる。

#### 5節 利用者を増やす上で若者が青少年活動センターに期待するもの

最後に、若者がどうすればセンターを訪れ、利用者が多くなるのかについて対象者に質問を行っている。この質問に対する回答を考察することによって、利用者の潜在的なニーズを抽出することを目的とした。

対象者の語りの中で、多く語られているのは、より多くの人にセンターに関わってもらうための仕組みづくりである。

No.9 は、「僕はこのユースサービス協会っていうのに関わって得るものが多かったんで、人もこういう、僕みたいなあんまり関わらんかった人をもっと引っ張ってこれるようにしてもらったらな。そういう広報というか活動をしてもらえたらいいなと思います」と述べ、ボランティアという名前ではないのかと話す。

これは、No.9 が、ボランティアに対する偏った考え方をしていたことに起因するという。

例えば、ボランティアっていう名をとって、実はやってることはなんか宗教的なものだったりとか、後なんかネットワーク技術とかあれとかそういう、ちょっとお金が絡んだりとか、そういう風に使われてるっていうのがあるっていうのが、僕は認識してますし、そういうところから来る違和感というか、かなあ、とは勝手に思ってるんですけど（No.9）。

<sup>44</sup> （電通報 <http://dentsu-ho.com/articles/3542> 2017 年 2 月 10 日閲覧）







このような考え方をする人が No.9 の周りにもいることから、ボランティア以外のところから入ったほうが、最終的にボランティアをすることになっても、入り口として入りやすいのではないかと考えた  
と No.9 は語る。

ボランティアとか頑張っても、自分になんも、なんの得るもんもない、お金にもならん、なんでそんなお金にならんことみんな頑張ってるの、って、最初ボランティア活動してて思ったんですよ。で、  
思ってた、思ったんですけどそういう風に頑張るの、ボランティアって文字通り、慈善活動というか  
お金にならないことじゃないですか。でも頑張ってる人見て、ちゃうかと、こう頑張ってる人見て、  
少しはあれやかと、こんな頑張ってる人見て、自分はそんな、お金だとか金にならんことやって、も  
うめんどくさいわとかく思って>、恥ずかしいなって思った (No.9)。

このように、実際にボランティアを頑張っている人を見ることで、ボランティアに対する考え方が変  
化したと話している。こうした自身の経験から、ボランティアに参加するとなるとハードルが高いので、  
その入り口を上手く作ってやる必要があると考えている。

トレーニングルームがあるから、とか、あとなんか、会議室とか、そういうのが安く使えるっていう  
ところで、なんかそういうので、遊べる空間あるよとか、そういうので、そういう形でとっかかりで、  
っていうのもおもしろいかも。あとなんかイベント？ やってますとかいうんやったら。なんか蚤の市  
みたいなイベントやってるとか、でもボランティアと関わることとかありますし (No.9)。

ボランティアという名前ではなく、別の名目で人を集められるような広報をし、そこから人をボラン  
ティアと呼び込む仕掛けづくりをしてほしいと語った。

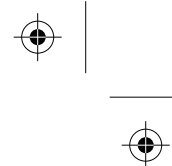
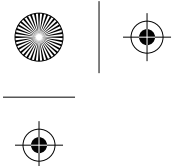
同様に、No.23 は、Wii を皆で行うというようなゲーム企画を発案している。そうした、ゲーム企画  
をすることで、学生が多く集めることができるのではと考えている。「意識高い奴らをこう、持ってくる  
方法、仕組みが、あったらいいかなって」と話し、さらに集めるだけでなく、「そういう意識高い奴らを、  
意識高いだけでなく、あの、スペックもきっちり整えていけるようなプログラム」を作ることで、実際  
に行動していける手助けができればよいと考えている。

## 6節 まとめ

以上より、(1) 現在存在しない、もしくはあるけれども古くなった設備の充実、(2) より参加者同  
士が自然に触れあえるような企画の開発と、若者が苦手とする分野の啓発教室、(3) より積極的なユー  
スワーカーの関わり、(4) より多くの人がセンターに足を運ぶような仕組み作りの 4 点を、若者のニ  
ーズとして捉えることができる。

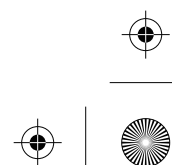
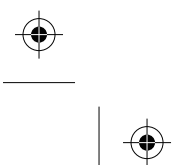
また、本調査において、属性と利用ニーズに一貫した傾向は見られなかった。しかしながら、属性一





若者の成長におけるユースワークの価値  
—京都市青少年活動センター利用者インタビューから—

つひとつの人数が少なかったこと、また、対象者一人が分類される属性が必ずしも一つではない（3章参照）ため、正確な分類が難しかった可能性がある。以後の研究では、属性に分類される対象者を増やすことで、属性とニーズの傾向を検討していく必要がある。





## 総合考察

ユースワークが若者に何らかのポジティブな影響を及ぼしているだろうことは、これまでも実践的に（すなわち、現場レベルでは）体感されてきた。しかし、その内実が明確に外部に提示される機会は少なく、また、現場においても十分に意識されてこなかった側面があるという。本調査は、そうした問題意識から、日常に埋め込まれ十分に体系化・言語化されてこなかったユースワークの価値や意義の一端を明らかにすることを目的に、構想され実施された。最後に、各章を横断するかたちで上記課題の総括をおこなうことで、さしあたってのまとめとしたい。

### 1 節 若者にとってのユースワークの価値

若者たちは、センターを利用する（ユースワークとかかわる）なかで何を得ているのだろうか。インタビューでは、若者によって意識化（あるいは意味づけ）され言語化されたものと、本人からはユースワークによる効果として明確には語られないものの体得していると考えられるものの両者が見出された。8章では、主に前者を論じ、調査対象者たちが、センターを利用することによって人間関係を広げ、そこでのかかわりから、人との関わり方を学んだ、コミュニケーションをとれるようになったなどと感じていることがわかっている。他方、各章では、若者自身が明確に意義や価値、あるいは自身の変容として語ったものではないものの、ユースワークによるポジティブな影響と思われる後者の側面もまた炙り出されている。ここに、センターの日常に埋め込まれながら若者に作用し、無意識下でかれらの血肉となっていくようなユースワークの効用があるのだとすれば、それらをまとめておくことは重要だろう。以下、他者関係に関する側面、〈場〉や経験に関する側面、の二つから整理してみたい。

#### （1）他者関係に関する側面

まず、他者関係に関する側面では、他者関係の拡大が指摘できる。拡大とは、かかわりをもつ他者の数が増えたということだけでなく、他者関係の幅の広がりも含む。たとえば、No.28 はボランティアに参加するなかで「いろんなタイプの、個性のある人」に出会ったと語り、No.23 は国際交流の事業ボランティアに参加することで「結構価値観が違う」留学生らとの関係を築いている。このように、学校等を基軸にした生活のなかでは出会ったりかかわったりすることが難しい層とのかかわりがセンター利用を通じて生じている。そうした他者関係の多様性の増大が、他者受容ひいては自己受容につながる可能性があることはすでに8章で述べたとおりである。学区制の撤廃などにも伴い、家庭背景や成績など同質性の高い集団での生活が多くなる青年期においては、年齢・居住（出身）地域・属性・思考（志向）等の異なる者たちが出会う機会はとりわけ制限されている。そのなかで、センターでの幅広い他者との出会いを経て、実際に若者たちの他者関係の多様性が増大していることは、特筆すべき事柄であろう。それは、あるユースワーカーの「彼と誰かをつなぐ」（ワーカーNo.78）という言葉にもあるように、ユースワークによって支えられ、実現しているものである。





また、他者関係の深まりも見られる。ここでは、事業やボランティアに参加した者たちが、同じく参加していた他の利用者・参加者の存在を「友だちではない」者として形容していたことを思い出したい。7章では、一つの目的に向かって共に何かを作り上げる体験と、その過程でのぶつかり合いを経て、“一緒に困難を乗り越えていった仲間”のような存在になっていく可能性が指摘されている。近年の若者の友人関係をめぐっては、「優しい関係」<sup>45</sup>に代表される踏み込み合わない関係性の指摘や、希薄化論から選択化論まで多種多様な議論がみられるが、いずれにしても、学校等の「友だち」とは異なる「仲間」や「同士」とも言える他者関係をセンター内で形成・獲得しているのだとすれば、それは学校等に限定された関係性に留まらない回路を担保することに他ならない。実際、No.46 は高校や予備校における「蹴落とし合い」の関係ではなく、「教え合い」の関係がセンターでは構築できたと語っており、センターには学校等に見られない特有の他者関係形成のあり方が可能となっている側面がある（5章）。日常のそれとは異なる他者関係・友人関係をつくることに、ユースワークは寄与している。

さらに、若者たちが獲得している他者関係は、若者同士の関係に留まらない。ユースワーカーとのかかわりもまた、多くの若者から語られている。「友だちみたいな感じ」であるワーカーは、「友だち」のように気軽に話せる存在であるものの、「友だち」そのものではなく、時にシビアな話や相談もできる存在として位置づけられていた（6章）。また、事業やボランティア参加を通じた地域の人との関係に魅力を見出している若者もいた（7章）。若者たちはセンター利用を通じて、同世代に限らず、「大人」とのかかわりも獲得している。

以上のような他者関係の広がりや深まり、新たな「大人」とのかかわりは、家庭・学校・塾といった生活環境のなかで形成される既存の他者関係に、多様な属性・距離感の他者関係を新たに追加している。そうした新たな関係は、既存の他者関係や今後構築していく関係のあり方に影響を及ぼすこともある。たとえば No.28 が、「人生の先輩」であったユースワーカーと同様の存在を、その後会社の先輩に見出しているようにである（4章）。また、センターで形成された関係自体が、近年の SNS の発展にも支えられるなかで継続し、活動の広がりを促すこともある（7章）。さらには、学生時代にセンターを利用していた No.34 のように、数年ぶりにセンターを訪れた際に、家にこもりがちのきょうだいのことをワーカーに相談するようなケースも見られている。ここには、センター利用を通じて形成される他者関係やネットワークの形成・獲得が、社会関係資本の獲得としても捉えられることが指摘できよう<sup>46</sup>。

<sup>45</sup> 土井隆義『友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル』ちくま新書、2008 年

<sup>46</sup> インタビュー対象者たちからは、ユースワークによる自己の変容としてコミュニケーション能力がついたという言い方がしばしばなされる。確かに、ユースワークは、若者たちが他者との様々なかかわりを築き、そのあり方を学び獲得していく過程と重なっているのだろう。しかし、以上からは、個人の高めるべき能力として捉えられるきらいのある「コミュニケーション能力」の向上がユースワークの価値というよりは、多様な他者と実際にかかわりをもつ機会を生成することそのものが重要であり、そこでの経験が結果的に他者とかかわる際のある種の力のかたちづくっていく、と考えるべきである。「コミュニケーション能力」ではなく、実際にユースワークを通じて形成される他者関係そのものが重要な意味をもっているのである。







## （２）〈場〉や経験に関する側面

次に、〈場〉や経験に関する側面についてである。ユースワークにかかわることによって、若者たちは他所では得難い〈場〉や経験を獲得している。

まず、先に触れた他者関係の側面と関連する事柄として、多様な他者と共存する〈場〉の獲得が挙げられる。センター利用を通じて新たな他者関係の構築がなされない場合や、実際にはかかわりをもっていなかった場合においても、若者たちは他の利用者の存在を意識していた（５章・７章）。それぞれの利用や活動を通じて、そこに一つの親密圏やコミュニティをつくりつつ、その空間は多様な他者が存在する公共空間に包摂されているのである（５章）。同質性の高い生活環境の増大状況に対しては、多様な他者の存在を感じられる〈場〉の存在自体（そのような機会があること）が、意義をもつといえるだろう。付言すれば、そうした多様な他者が共存する〈場〉を土台にしてこそ、先に挙げた多様な他者との関係拡大の可能性が担保されるのである。

また、５章に詳しく見たように、若者たちがセンター内で自らの振る舞い等を決定できる「自分たちの空間」を形成していることも、ユースワークによって生み出されている重要な側面である。とかく、目的や行動が規定されがちな青年の生活環境にあっては、若者自身が過ごし方も含めて決定できる〈場〉は限られる。一方で、センターは、「自分たちで計画して、何かをやる」（No.34）ことのできる〈場〉として体感されていた。自分たちでコントロール可能な〈場〉を獲得し、また、その〈場〉を押し広げながらセンターを「自分たちの空間」に組み替えていく過程は、まさに公共への参画である。こうした主体化・参画経験が、若者たちに実体験として身体化され、やがてセンター外の社会参画の礎となっていくのである（５章）。

最後に、ユースサービスへの要望として語られた言葉からも、検討しておきたい。No.53 は、芸術観や感性を「なんぼでも出したらいい」というイベントがあったらいいのではないかと語っている（９章）。「自分の可能性」を「閉じてしまうような子」を念頭に、彼女は表現活動の重要性をニーズとして表出しているが、それは、彼女が歌の事業に精力的に参加し、そこで「表現できたから今に至ってる」と感じているからに他ならない。自己表現のおこなえる〈場〉の獲得は、すなわち、その自己表現を受け止めてくれる〈場〉や他者の獲得でもある。しかし、ダンス・音楽・美術などを通じて自身を思い切り表現できる機会は、商業的なそれを除けばほとんどないといってよい。ユースワークが、「自分の価値観とか可能性を見出せる」（No.53）ことにつながる自己表現の〈場〉を提供していることは、若者の成長発達に重要な意味をもっているといえるだろう。

## ２節 ユースワークの中核

では、なぜ、センターの利用は、上記のような影響を若者に与えることができるのだろうか。ユースワークにおけるどのような要素が、それを実現可能にしているのか。それを明らかにすることは、ユースワークの核となる要素を明らかにすることにも通じるため、今回調査で浮かび上がった事柄に限定して簡単な検討を試みたい。





### (1) “曖昧さ”の意義

まず、いくつかの章にまたがって見出されたキーワードに、若者自身が選択・自己決定できることが挙げられる。たとえば、本論では若者の利用形態を、ロビー利用、施設利用、事業参加、ボランティア参加に分けて検討したが、若者たちは複数の形態にまたがって利用をおこなっていた（3・4章）。利用の方法は若者によって様々である。また、そもそもセンターは利用する（し続ける）かどうかも含めて選択可能な場所であった。そこで誰とかがわかるかも、自由だ。若者自身が、〈場〉への参加も、他者関係も、行かない・選ばないことを含めて選択できることが、こじれた他者関係をクールダウンさせたり関係性を結び直したりする契機をつくりだすこともある（7章）。学校をはじめとする若者たちを取り巻く多くの場所が、行かないという選択も含めて自ら選び取ることが可能な場所とは言い難いなか、若者の自主的な選択にゆだねられるユースワークの〈場〉は貴重だといえる。ユースワークの現場で、若者たちは選択・自己決定の機会を得ているのであり、それが前項で指摘した「自分たちの空間」の形成（さらには主体形成）にもつながっている（5章）。

以上のように考えれば、ユースワークの核には若者の選択があるとまずはいいが、それは単純な「選択できること」に留まらないものも内包していると思われる。ここで、4章で触れた“曖昧さ”を思い出したい。4章では、利用の目的や積極度が問われることなく利用を開始できることが、幅広い若者にユースワークとの出会いを与えていることを指摘した。また、「入り浸ってた」と表現されるような特に何をするでもない“曖昧な”利用のあり方・時間が、その後の発展的な活動へと展開していく可能性を保障することにつながっていた。

上記は、多様な居方を選択できるという点では選択可能性とも言うが、ここではあえて“曖昧さ”と言いたい。なぜならば、若者は選択肢を知ったうえで何かを選んで（あるいは選ばない選択をして）利用しているとは限らないからだ（もちろん先に述べたように、意識的に選択している場合もある）。また、「暇つぶし」でありながら、潜在的には「何かしたい」という欲求をもっているなど（4章）、若者の主観としても多義的で不分明の場合も多くある。その意味では、ユースワークの〈場〉が、多様性に富んでおり、選択可能であるという側面だけでなく、時に多義的で明確に区別されず、理解・表現もしがたいような“曖昧さ”を含みこみ、それが承認される〈場〉であることが、若者の参加を促しているといえる。

こうした“曖昧さ”の価値をより具体的に表すのは、若者の「相談」であろう。若者支援機関などでは、「相談」「面談」といったかたちで明確化され、閉じた空間でおこなわれることも多い。他方、センターでは、ロビーなどの空間において、日常の延長線上で「真面目な話」（No.22）がなされる。若者たちは支援してもらう・相談するために来所しているわけではないものの、日常のかかわりのなかでふとした時にワーカーに悩みを語り、「さりげなく」支えられている（3章）。こうした雑談から始まる「相談」のあり方は、“曖昧さ”が担保された空間のなかでこそ、生じているのである。意図的に“曖昧さ”を伴った空間にすることで、間口を広げ、多様性と流動性・拡張可能性を確保しながら、「いま・ここ」の若者に





かかわる土台をユースワークは形成しているのである。

以上から、ユースワークにおける“曖昧さ”は、若者を包摂する際の重要な要素であり、積極的意義をもつことが明らかとなる。確かに、明確に目的や利用方法が設定されている場合はわかりやすく、評価もしやすい。しかし、そうした明確化を追えば、若者たちの利用や参加は区切られ、流動性や拡張可能性は失われていく恐れがある。ユースワークにおける“曖昧さ”は、多様な若者を包摂するとともに、その後のかかわりを通じて、どのような方向にも若者の選択・自己決定を延ばしうる可能性と流動性を内在させている点で、欠かせないものなのである。

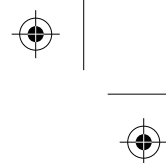
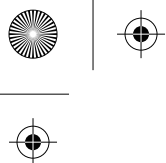
## （２）〈場〉に埋め込まれた価値

もう一つ、ユースワークにおける〈場〉の意義についても触れておきたい。ユースワークの〈場〉が他所で展開される〈場〉とは異なる特徴や性質をもつものであることは、すでに触れてきた（５章も参照）。また、６章では、ユースワーカーの働きかけそのものも、〈場〉に埋め込まれ、日常の一つになっている可能性が指摘されている（６章）。ここでは、〈場〉に埋め込まれているということの意味をいま一度検討したい。

先に見たように、若者たちは、たとえ直接的なかかわりをもたずとも、他の利用者たちの存在を意識している。No.23 もその一人であり、中学生の「悪ガキ」たちがワーカーのことを「おい、○○」と呼び捨てにしている姿を、「大変やな」と思っていたという。そんな彼は、「今になったらワーカーがその中学生に＞怒らない理由は何となく」わかるといい、センターを「あまり人を否定しない場所ってイメージがあって、その人がその人のまま大きくなっていくのを望んでいる感があるような気がするんですよ」と語っている。つまり、彼は、他の利用者とワーカーのやりとりを日常の一コマとして横目でみるなかで（そしておそらくはそうした経験を多々積み重ねるなかで）、センターというユースワークの〈場〉が、人を排除したり否定したりする空間ではないことを体感しているといっているのである。

以上からは、自らに対する直接的な働きかけでなくとも、いつの間にか、若者たちはユースワークに影響されていると考えられる。「わたし」が支援される・働きかけられるということを超えて、そのような意識がまったくない状況においても、いつのまにか働きかけられ、影響し合う一員になっているということが、まさに〈場〉を介したユースワークの特徴ではないだろうか。本調査で見えてきた、たとえば、誰も排除しない・若者を評価しないといった事柄や、若者の選択と自己決定を大事にするといった事柄は、ユースワークにおけるひとつの価値観であるが、それらはある若者をターゲットに提示され、教え込まれているわけではない。むしろ、ユースワーカーがさまざまに展開するワークのなかに内包された価値観が、センターという〈場〉のなかに埋め込まれ、若者たちのセンター利用の日常にありふれることで、若者たちはそれを体感しているのである。若者支援現場においては、近年、“支援－被支援を超えて”ということがテーマ化されつつあるが、ここにはその一つの可能性があるといっていよい。「わたし」が支援されるのではなく、ユースワークが展開する〈場〉に身をひたすなかで、いつの間にか巻き込まれ、周りと共に「わたし」も影響しあうひとりとなっているのである。ユースワークは、まさに〈場〉



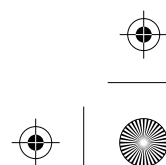
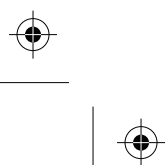


若者の成長におけるユースワークの価値  
—京都市青少年活動センター利用者インタビューから—

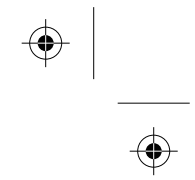
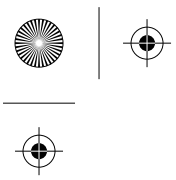
に埋め込まれることによってその真価を発揮するといえ、〈場〉はユースワークの中核に位置づく要素といえるだろう。

なお、本調査では若者だけでなくユースワーカーへのインタビューもおこなっているが、本報告書ではそれを十分に扱い、検討することができなかった。ユースワーカーの意図がどのようなものであったかについてや、そうしたワーカーの意図や実感と若者の感じ方にズレが生じていたことなど、本報告書の内容にかかわって検討すべき課題は多いが、それは今後の課題としたい。

(原 未来／滋賀県立大学)

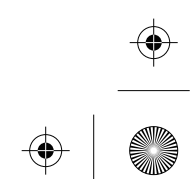
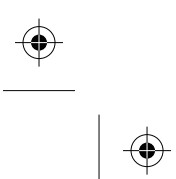






## 参考資料

- 資料1：予備調査インタビュー項目
- 資料2：対象者への説明書
- 資料3：対象者への同意書
- 資料4：本調査ワーカーインタビュー項目
- 資料5：本調査若者インタビュー項目



資料 1：予備調査インタビュー項目

インタビュー内容
<b>① 基本データの聞き取り</b>
名前・性別・年齢・今していることを聞く
<b>② 来場きっかけ</b>
Q その場に来たきっかけは？
Q 誰からこのことを聞いた？
Q 何を期待してここに来た？
<b>③ 利用方法</b>
Q その場はあなたにとってどんな場？
Q 一緒に使っていたのはどんな人たち？
<b>④ グループダイナミクス</b>
Q センター、事業の中で印象に残っている人、プログラムは？
Q 印象に残っている場面は？
Q 印象に残っている言葉は？
Q 参加して驚いたことは？
Q 今も連絡をとっている人いる？
Q その場で嫌な感じを覚えてことは？
<b>⑤ 思い出</b>
Q 利用してよかったこと、悪かったことは？
Q 一番に思い出に残っていることは？
Q その時は嫌だったが、今となると良い思い出になったことは？
Q 過ごした時間はどのようなもの？
Q 利用して感じた一番の量は？
Q やらなければよかったと思うことは？
<b>⑥ 第一印象</b>
Q その場に足を踏み入れた第一印象は？
<b>⑦ ユースワーカー</b>
Q 今も覚えているユースワーカーは？
Q あなたから見たユースワーカーの役割は？
Q ユースワーカーはどんな存在？
Q ユースワーカーはどんな大人？
Q ユースワーカーは普通の大人とは違っていた？
Q 自分の理想のユースワーカーは？
Q 好印象だったワーカーの関わりとその理由は？
Q ユースワーカーとの関わり合いの中で自分が変化したと思うことは？
Q ユースワーカーから貰った言葉で印象的なものは？
Q ユースワーカーを何と呼んでいた？
<b>⑧ 変化</b>
Q 自分が変化したと思うことは？
Q センターがなかったらどこに行っていた？
Q センターはあってよかった？
Q センターは役に立っていた？
Q 将来の夢は（ないからあるも含め）変化した？
Q 進路を決める上でユースサービスでの経験が影響した？
<b>⑨ 周りの人への対応</b>
Q 家族や友人にユースサービスのことを話した？
Q 家族にその場のことをどのように話した？
Q 友だちにその場を勧めた？
<b>⑩ フィードバック</b>
Q ユースサービスでこんなものがあるといいなということ？
Q 参加、利用しての不満は？
Q 自分がユースワーカーだったらどんなプログラムをする？
Q あなたにとってユースサービス協会とは？
<b>⑪ 再度、聞いてみる</b>
Q 何か、まだ話していない思い出は？
<b>⑫ その他</b>
Q 何か言っておきたいこと、言い残したことは？



## 資料 2：対象者への説明書

2015 年 12 月 12 日

# インタビュー調査説明書

公益財団法人京都市ユースサービス協会事務局

TEL：075-213-3681

e-mail：k.y.s.office@ys-kyoto.org

<インタビュー担当者名>

e-mail:



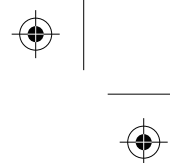
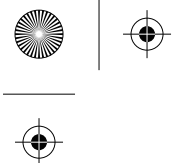
### 目的

本調査では、過去・現在のユースワークのサービス利用者に対し、利用に関する 1 時間程度のインタビューをさせていただきます。本調査はまとめられよりよいサービス提供のため、検討させていただきます。

### 調査の計画

インフォームド・コンセントを受けていただきます。その後、インタビューを 60 分間受けていただきます。この際、録音させていただきます。インタビュー終了後、謝礼としてクオカードをお渡しさせていただきます。なお、本調査の結果が知りたい場合、同意書に記載された連絡先にご連絡ください。結果をお知らせさせていただきます。ただし、個人のデータをお伝えすることはできませんので、あらかじめご了承ください。





資料 3：対象者への同意書

インタビュー同意書

本日はインタビューにご協力いただきまして、ありがとうございます。インタビューを始める前に以下のことを確認しておきたいと思います。

1. いつでもインタビューを辞めることができます。
2. インタビューは録音させていただきます。
3. 研究者は、必要かつ適切なセキュリティ対策を講じることにより、参加者に対するプライバシーを尊重し、研究者の取り扱う個人データの漏えい防止および、個人データの安全管理に努めます。
4. 研究者は、共同研究者以外の第三者には個人データを提供いたしません。
5. 研究者は、研究者の取り扱う個人データを共同研究者に提供する場合も、その共同研究者からの漏えい・再提供の防止を図ります。
6. 個人の特定ができない処理を行った上で、事業報告や学会発表、論文などの形で研究を発表させていただくことがあります。
7. 研究者は、本インタビューにおける個人データを約 3 年間、しかるべき所に厳重に保管し、期日をもって機密書類として破棄いたします。
8. 本インタビューの目的、結果に関する問い合わせは、京都市ユースサービス協会事務局までお問い合わせください。可能な範囲内でご説明いたします。

今日の説明を聞いてインタビューにご協力いただけるときは、以下の下線部に日付をご記入の上、署名を行ってください。

上記の内容に同意して実験に協力します。

2016/

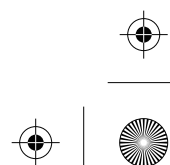
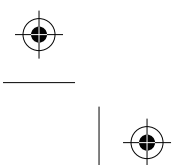
公益財団京都市ユースサービス協会事務局

Tel 075-213-3681

e-mail [k.y.s.office@ys-kyoto.org](mailto:k.y.s.office@ys-kyoto.org)

<調査担当者名>

e-mail:





資料4：本調査ワーカーインタビュー項目

インタビュー項目（ワーカー向け）	
0基礎情報	勤続 対象者と会ったときと今）・ 性自認・関わり方
①第一印象	Q どこで利用者に会いましたか？ また、会った際の第一印象は？
②きっかけ	Q その場に来たきっかけや知ったきっかけ、期待などについて知っていますか？
③初回	Q 初回、どのように利用していましたか？
④背景	Q その子の背景などについて覚えていることはありますか？
③ユースワーカー	Q その子と親しかったワーカーなどを教えてください。 Q その子にとってあなたはどんな存在だったと思いますか？
④グループダイナミクス	Q その子は他者とどのように関わっていたと思いますか？
⑤変化のきっかけ	Q その子は利用しているうちに、変化していったと思いますか？
⑥周りの人への対応	Q 周りの子や友人にセンターのことを話していたと思いますか？
⑦思い出	Q 一番に思い出に残っていることは？ Q その子にとって大きな転機となるきっかけのようなものはありますか？ Q その子とした話で印象的なものはありますか？
⑧ニーズ	Q その子は何のために利用をしていたと思いますか？ Q その子にとってセンターはどんな場所だと思いますか？
⑨聞きたいこと	Q その子に聞いてみたいことは何ですか？
⑩その子と他の子比較	Q その子と似たようなケースの子で、位置づけの違う対象者はいますか？
⑪その他	Q あなたにとってワークの肝は誰ですか？ Q 何か言っておきたいこと、言い残したことはありますか？

資料5：本調査若者インタビュー項目

インタビュー項目 利用者向け)	
①きっかけ	Q その場に来たきっかけは？ 何故来たか、誰と来たかなど詳細について聞く
②第一印象	Q その場に足を踏み入れた第一印象は？
③ユースワーカー	Q 今も覚えているユースワーカーは？ Q ユースワーカーはどんな大人 普通の大人と違う？
④グループダイナミクス	Q 印象に残っている人（ワーカー以外）や場所がありますか？
⑤変化のきっかけ	Q 自分が変化したと思うことは？ Q 将来の夢は（ないからあるも含め）変化しましたか？ Q 進路を決める上でユースサービスでの経験が影響しましたか？
⑥周りの人への対応	Q 家族や友人にユースサービスのことを話しましたか？
⑦思い出	Q その時は嫌だったが、今となると良い思い出になったことは？ Q やらなければよかったと思うことってありますか？ Q 一番に思い出に残っていることは？ Q 利用してよかったこと、悪かったことは？
⑧ニーズ	Q ユースサービスでこんなものがあるとよいなということ？ Q 参加、利用しての不満は？ Q あなたにとってここはどんな場所？一言で言ってください。
⑨自由質問	Q ＊その利用者さんに質問したいことを聞く
⑩その他	Q 何か言っておきたいこと、言い残したことはありますか？



#### <謝辞>

2015年の後半からスタートした、この取り組みも2年あまりを費やしてようやく一つのまとめを提出することが出来る。もとより、若者の成長は個々の背景や環境をベースとしながら、家族や周囲の人々との関係のあり方にも規定されて、極めて固有のスピードと筋道を通るものと考えられ、そこにユースワークの影響を見出すことは困難なことといえる。しかし、そこに踏み込まなければ、ユースワークの価値や役割を明らかにしていくことは出来ない。

今回、この難しいテーマに取り組むに当たり、若者の成長に関心を持って研究・実践を行っている、外部の方々の協力が無ければ調査分析を行うことは出来なかった。本調査の協力メンバー各位に深甚なる感謝を申し上げるところである。また、この調査が若者の内面に関わるものである以上、若者自身の協力無しには行うことが出来ないものである。予備調査に協力してくださった5人の方、「本」調査に協力してくださった11人の方に、あらためてお礼を申し上げる。

最後に、内輪のことにはなるが、調査メンバーとして協力してくれたユースワーカー及び、インタビュー対象となる若者選びに協力し、若者との連絡に当たると共に、インタビューにも協力してくれた、多くのワーカーにも感謝の意を伝えるとともに、本報告書がこれからの若者の成長支援への取り組みに生かされるものとなることを期待したい。

